

「確かな学力」の向上をめざして

ー山口県学力向上フロンティアハイスクール実践事例集ー



平成18年3月

山口県学力向上フロンティアハイスクール推進協議会

山口県教育委員会

本書の構成及び利用方法

本書は、本県の学力向上フロンティアハイスクールにおける実践研究の内容等を掲載し、高等学校等における「確かな学力」の向上を図る取組みの参考資料として作成したものです。

学力向上フロンティアハイスクール9校から特色ある事例を提供していただき、それぞれの実践のポイントを見開きページでまとめることによって、見やすく分かりやすい資料となるよう努めました。また、必要なときに必要な項目を選んで活用できるよう、学校別ではなく、内容別に整理するなどの工夫を図っています。

なお、紙面の制約があることから、各フロンティアハイスクールの取組みの一端を紹介するにとどまっておりますので、詳細については、次ページのフロンティアハイスクール一覧を参照され、各学校にお問い合わせくださるようお願いいたします。

事業概要

学力向上フロンティアハイスクール事業

1 事業の趣旨

文部科学省と都道府県教育委員会との連携・協力の下、高等学校及び中等教育学校において、習熟度別指導、学校設定教科・科目の活用、教材開発、シラバスの作成、大学や中学校等との連携や具体的な到達目標の設定など学校や生徒の実態に応じて学習意欲や学力の向上に総合的に取り組み、指導内容や指導方法、指導体制、評価規準や評価方法についての実践研究を推進し、その成果を全国すべての高等学校及び中等教育学校に普及することにより、新しい学習指導要領のねらいとする「確かな学力」の向上に資する。

2 実施期間

平成15年度から平成17年度までの3年間

3 学力向上モデル地域

39地域337校（国立1校、公立323校、私立13校）

文部科学省は学力向上モデル地域（都道府県）を指定し、都道府県教育委員会は、モデル地域内の高等学校等の中から複数の学校を学力向上フロンティアハイスクールとして指定する。

4 実践研究のテーマ

学力向上フロンティアハイスクールでは、学校や生徒の実態に応じて学習意欲や学力の向上に総合的に取り組み、生徒一人ひとりの実態に応じたきめ細かな指導の一層の充実を図るという観点から、例えば、次のような「確かな学力」の向上のための実践研究を行っている。

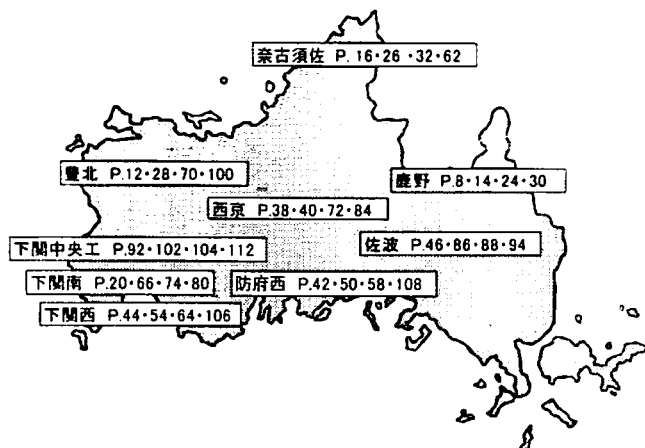
- ① 学習意欲や学力の実態把握と学習指導の目標設定
- ② 生徒の実態等に応じた習熟度別指導、教材開発、シラバスの作成など指導内容、指導方法の改善・充実
- ③ 大学や専修学校、中学校等と連携し、学校設定教科・科目も活用した発展的、補充的な学習等の積極的な展開
- ④ 教科等との連携を図った総合的な学習の時間の展開
- ⑤ 具体的な到達目標の設定による学習意欲の喚起
- ⑥ 科目の履修指導や将来の生き方と進路の適切な選択決定のためのガイダンス機能の充実
- ⑦ インターンシップ、体験活動、専門高校や専修学校との連携等による職業教育の充実
- ⑧ 評価規準、評価方法の研究開発

4 本県の研究主題

「学ぶ意欲を高め、生徒一人ひとりの夢や目標の実現を図る指導と評価の工夫」

山口県学力向上フロンティアハイスクール9校から 学力向上について提案します

学力向上フロンティアハイスクール一覧



高

鹿野高校

一人ひとりの学力向上につなげる基礎学力診断システムを開発しました。

生徒の基礎学力を診断するシステムを開発するとともに、そのシステムで把握した学力の実態等に応じて、一人ひとりにきめ細かな指導やガイダンスを行っています。

URL	http://www.kano-h.ysn21.jp/kyouiku/
TEL	0834-68-2054



佐波高校

インターンシップ先を自分で探すセルフプロデュース方式を導入しました。

電話のかけ方や礼状の書き方の指導及びインターンシップで学んだことの発表活動等を通して、コミュニケーション能力や表現力の向上をめざしています。

URL	http://www.saba-h.ysn21.jp/
TEL	0835-52-1311



防府西高校

総合的な学習の時間の効果的な実施方法について多角的に研究しています。

「産業社会と人間」と「未来プランニング（本校の総合的な学習の時間）」との有機的な連携を図りながら、生徒の進路意識の向上と学習力の育成に取り組んでいます。

URL	http://www.hofunishi-h.ysn21.jp/
TEL	0835-32-1905



西京高校

授業改善＆進路意識＆学習習慣の三位一体で学力向上を進めています。

「授業改善」に向けた取組と、「進路意識の向上」「自律的な生活・学習習慣の確立」をめざす取組とを連動させながら、様々な手法を取り入れて、学力向上に取り組んでいます。

URL	http://www.saikyo-h.ysn21.jp/
TEL	083-923-8508

高

下関西高校

進路意識の高揚をめざす「キャリアセミナー」が生徒に好評です。

外部講師を活用した多様な進路ガイダンス講座を開設し、生徒は進路希望等に応じた講座を選択受講しています。興味深い講師の話に、生徒の満足度も極めて高いものとなっています。

URL	http://www.shimonishi-h.ysn21.jp/kyouiku/
TEL	0832-22-0892



下関南高校

授業研修プロジェクトの実践を通じて、授業改善に取り組んでいます。

シラバスの作成、指導目標の設定、授業評価の実施・検討、研究授業を通じて、進路意識・学習意欲を高める授業の在り方の研究や評価の工夫改善に取り組んでいます。

URL	http://www.minami-h.ysn21.jp/kyouiku/
TEL	0832-22-4039



下関中央工業高校

キャリア教育に関する系統的な学習プログラムを開発しています。

生徒が主体的に自己の在り方生き方を考え、将来の目標を設定できるよう、キャリア教育についての3年間の系統的なプログラムを作成し、多様な学習活動を積み重ねています。

URL	http://www.chuo-t.ysn21.jp/chuo/index.html
TEL	0832-23-4117



豊北高校

Nourish（栄養をつける）北高PCVプロジェクトを実践しています。

Carbohydrate（炭水化物→基礎学力）、Protein（タンパク質→進学に必要な学力）、Vitamin（微量栄養素→進路実現の能力）の向上をめざしています。

URL	http://www.houhoku-h.ysn21.jp/
TEL	0837-82-0023



奈古高校須佐分校

習熟度別授業や全校一斉の基礎学習により基礎学力の向上をめざします。

1年次からの英語・数学に関する習熟度別授業や、放課後、全校生徒が一斉に取り組む基礎学習等を通じて、基礎学力の定着や学習意欲の向上、資格取得者の増加をめざしています。

URL	http://www.nago-sh.ysn21.jp/
TEL	08387-6-2320

山口県学力向上フロンティアハイスクール推進協議会委員

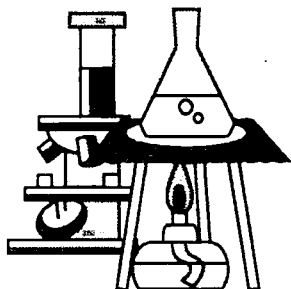
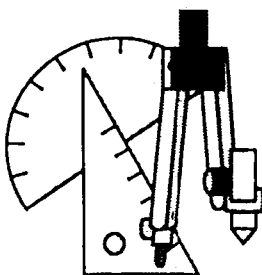
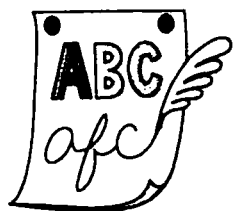
（敬称略）

〔指定校以外の委員〕

熊谷 信順	国立大学法人山口大学教育学部 教授
岩野 雅子	山口県立大学国際文化学部 助教授
伊藤 隆司	山口産業株式会社 取締役相談役
伊藤 實	山口県公立高等学校PTA連合会 会長
沖浦 初孝	山口県公立高等学校長会 会長
永富 康文	山口県教育庁指導課 課長

〔指定校の委員〕

学力向上フロンティアハイスクール校長 9名



目 次

◇ 刊行にあたって	1
◇ 本書の構成及び利用方法・事業概要	3
◇ 学力向上フロンティアハイスクール一覧	4
I 章 学力向上に向けた課題の抽出、学習への動機付けをどのように行うか	
1 一人ひとりの学力をどのように把握するか	8
2 学習に対する意識や学習状況をどのように把握するか	12
3 中学校の学習との円滑な接続をどのように図るか	14
4 学習指導の目標をどのように設定するか	16
5 高校における学び方をどのように学ばせるか	20
II 章 基礎・基本の定着を図り、個性を生かす指導をどのように行うか	
1 少人数指導をどのように行うか	24
2 ティーム・ティーチングや習熟度に応じた指導をどのように行うか	26
3 始業前や放課後の学習指導をどのように行うか	28
4 学習合宿をどのように行うか	30
5 一人ひとりに応じたきめ細かな指導をどのように行うか	32
III 章 総合的な学力をどのように育成するか	
1 学習の基盤となる習慣・規律をどのように形成するか	38
2 読解力をどのように向上させるか① -新聞記事の要約を通じて-	40
3 読解力をどのように向上させるか② -読書活動を通じて-	42
4 表現力をどのように向上させるか① -小論文・ディベートを通じて-	44
5 表現力をどのように向上させるか② -俳句の創作活動を通じて-	46
6 総合的な学習の時間をどのように展開するか① -課題研究を中心として-	50
7 総合的な学習の時間をどのように展開するか② -進路探究を中心として-	54
IV 章 授業改善をどのように推進するか	
1 ICT教材をどのように開発するか	58
2 地域の教育資源をどのように活用するか	62
3 活用しやすいシラバスをどのように作成するか	64
4 生徒による授業評価をどのように行うか① -授業目標と関連させる-	66
5 生徒による授業評価をどのように行うか② -授業改善プランを示す-	70
6 授業公開をどのように進めるか	72
7 学校全体で組織的な授業改善をどのように進めるか	74
V 章 学びの意義や生き方を考える体験や学習をどのように充実させるか	
1 科目の履修指導をどのように行うか	80
2 卒業生による講話をどのように行うか	84
3 社会人による講話をどのように行うか	86
4 大学との連携をどのように進めるか	88
5 インターンシップをどのように行うか① -専門学科-	92
6 インターンシップをどのように行うか② -普通科-	94
VI 章 進路意識を高め、キャリア発達を促す教育活動をどのように展開するか	
1 進路選択のためのガイダンスをどのように充実させるか	100
2 進路相談をどのように充実させるか	102
3 進路指導の在り方をどのように改善するか	104
4 キャリア教育をどのように充実させるか① -普通科-	106
5 キャリア教育をどのように充実させるか② -総合学科-	108
6 キャリア教育をどのように充実させるか③ -専門学科-	112
◇ 事業の総括	116

山口県学力向上フロンティアハイスクール推進協議会長 熊谷 信順

平成15年4月、文部科学省から本県を含む39都道府県が学力向上モデル地域に指定され、本県では、このモデル地域における研究指定校として、鹿野、佐波、防府西、西京、下関西、下関南、下関中央工業、豊北、奈古（須佐分校）の県立高等学校9校が学力向上フロンティアハイスクールに指定されました。

山口県学力向上フロンティアハイスクール推進協議会は、この事業の円滑かつ効果的な推進を図るため、県教育委員会によって設置され、指定校、大学、PTA、産業界、校長会の各関係者により構成され、研究体制の確立や実践研究の推進等に必要な事項に関して、様々な角度から協議や情報交換を行ってまいりました。

各フロンティアハイスクールでは、「学習意欲や学力の実態把握」「指導内容や指導方法の改善・充実」「進路の適切な選択決定のためのガイダンス機能の充実」などを研究テーマとして、県教育委員会や本協議会の指導助言の下、「確かな学力」の向上のための実践研究を積極的に進められるとともに、公開授業・研究発表会の開催や本事業専用のWebページなどを通じて、その成果の普及に努めてこられました。

情報化や国際化など急速かつ急激な変化の渦中にある今日の社会にあつては、知識や技能にとどまらず、学ぶ意欲や、自ら課題を見付け、主体的に思考し、判断し、よりよく問題を解決する資質や能力などの「確かな学力」の育成が求められております。

高等学校においては、現行学習指導要領が実施されて3年が経過しましたが、改めて、「確かな学力」の実現状況の検証と見直しを求められているこの時期に、先進校における優れた実践を収めた事例集が刊行されますことは、誠に時宜を得た、意義深いものであると考えております。

この事例集が、各学校において、学力向上に向けた諸課題の解決を図るために、積極的に活用されることを期待しております。

山口県教育庁指導課長 永富 康文

山口県教育委員会では、「山口県教育ビジョン」の計画期間の中間点に当たり、「一人ひとりの夢の実現」という中期目標を新たに掲げ、その実行計画である「重点プロジェクト推進計画」の一つとして「確かな学力向上プロジェクト」を推進しております。

このプロジェクトに謳う「確かな学力」とは、知識・技能のみならず、学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力などを含めた総合的な学力であり、こうした学力を一人ひとりの生徒に確実に身に付けさせるためには、教材や指導方法、指導形態等について改めて見直す必要があります。そのため、各学校では、「生徒による授業評価の実施」「授業公開・授業研究の推進」「シラバスの改善・充実」を3本の柱として授業改善に取り組んでいるところです。

また、「確かな学力」の育成にあつては、児童生徒の学習をその成長や発達段階に応じて連続的に捉え、校種間の円滑な接続を図ることが重要であることから、小・中・高等学校等の連携した取組みを推進する「学力向上総合プロジェクト事業」を実施しております。高等学校関係では、学力向上フロンティアハイスクール事業をこのプロジェクトの中心に位置付け、わかる授業を展開して生徒の興味・関心や学習意欲を高め、学力の向上を図るとともに、中学校や大学など他校種との連携についても研究を進め、その成果の普及に努めているところです。

平成15年度から17年度までの3年間、それぞれのフロンティアハイスクールでは、「学ぶ意欲を高め、生徒一人ひとりの夢や目標の実現を図る指導と評価の工夫」という本県の研究主題に基づき、各学校の実態に応じて、様々な視点から、学習意欲や学力の向上に関する実践研究に積極的に取り組んでいただきました。

本事例集は、こうしたフロンティアハイスクールの取組みの中から、特色ある事例や効果の高い事例等を抽出し、その実践のポイントをわかりやすく提示することにより、県内の高等学校等における「確かな学力」の向上に資することをねらいとして編集しております。

各学校において、本事例集を十分に活用し、生徒一人ひとりの「確かな学力」の向上をめざす教育活動の一層の充実が図られることを期待します。

I 章 学力向上に向けた課題の抽出、学習への 動機付けをどのように行うか

- 1 一人ひとりの学力をどのように把握するか
- 2 学習に対する意識や学習状況をどのように把握するか
- 3 中学校の学習との円滑な接続をどのように図るか
- 4 学習指導の目標をどのように設定するか
- 5 高校における学び方をどのように学ばせるか



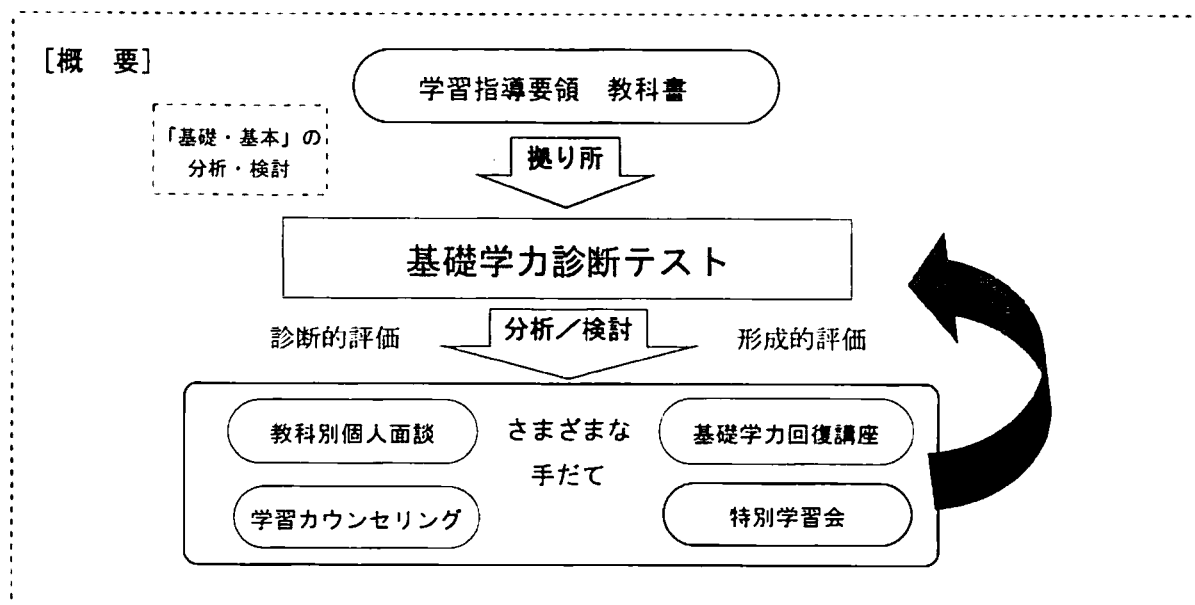
放課後の基礎学習



「朝学」の努力者表彰

生徒の学力を正確に把握し、その後の指導に生かすための 「基礎学力診断システム」を構築する

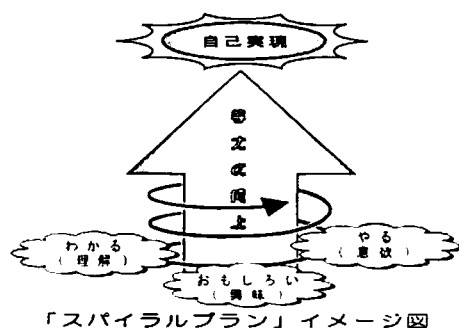
【概要】



学力診断システムを構築し、一人ひとりの課題を明確にして、きめ細かな指導に生かす

本校は、県内でも最小規模の全日制普通科という特色を生かし、生徒一人ひとりの夢の実現のために多様な手だてを講じている。図 I-1-①に示す「スパイラルプラン」に基づき、基礎学力の習得・定着を目指しているが、その効果や改善すべき点を客観的に検証して、よりきめ細かな指導を実現するため、生徒の基礎学力を正確に測定する「基礎学力診断システム」の構築と、その分析結果を踏まえた学習指導の改善に合わせて取り組むこととした。

図 I-1-①



この「基礎学力診断システム」を作成するにあたり、まず、本校における「基礎・基本」とは何かという共通概念について検討した。

その結果、全国レベルの学力も視野に入れながら、学習指導要領を拠り所として、「本校における基礎・基本」について検討し、それに沿った学習目標と評価規準を作成することとした。なお、評価については、学習目標の実現状況の判断と、事後の指導への活用が重要であり、この診断システムにも反映されなければならない。したがって、基礎学力診断システムの内容については、今後も検証と見直しを継続していく予定である。

既習事項の研究

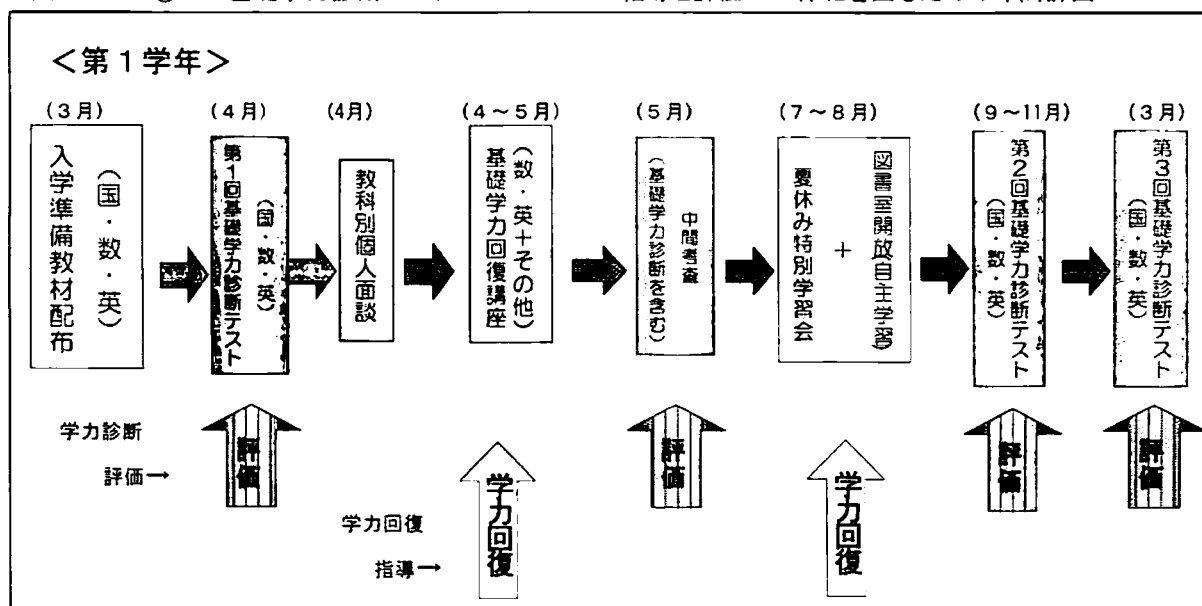
- ◇中学校学習指導要領（何を求めているか）
- ◇近隣中学校の使用教科書（何を学んでいるか）
- ◇観点別学習状況の評価規準（どう評価しているか）

取り組むべき学習内容の設定

- ◇高等学校との接点（入学時の「なめらかな接続」）
- ◇コミュニケーション能力（卒業時の目標）
 - 国語・英語：伝える力や聞き取る力
 - 数学：論理的な見方や考え方

本校の考える基礎・基本

図 I-1-② 基礎学力診断システムのフロー —指導と評価の一体化を図るための年間計画—



基礎学力診断システムは、学習指導要領を踏まえた入学準備教材の作成にはじまる

「基礎学力診断システム」を活用した評価と指導のフローは、図 I-1-②に示すとおりである。平成17年度までは、各学年とも、基本的に1年生の流れに準じている。なお、3年生については、就職、進学の見路別の診断及び学習指導となる。

「基礎学力診断システム」は、3月末の入学説明会における入学準備教材の配付に始まる。この教材は、中学校学習指導要領に示された学習内容、本校の教育目標、教科の指導目標等に基づき、国語、数学、英語の3教科について、教員が自作した課題プリントであり、第1回の基礎学力診断テストは、これに準拠する形で作成する。具体的には、入学準備教材の中から、高等学校で特に必要とされる内容を抜粋して作成する。この問題の原案については、中高連絡協議会において、中学校の先生方からも意見を聞く^{＊1}。

診断テストでは、解答だけでなく、生徒自身の理解度についても回答させる

このテストの特色は、図 I-1-③に示すように、小問ごとに生徒の理解度をA～Dの4段階で自己診断させることにある。

また、第2回、第3回の診断テストについては、第1回の分析結果を踏まえて指導した重点事項に、その後の授業で扱った基礎事項を加えて作成する。

図 I-1-③ 基礎学力診断テスト解答用紙(数学)

第1回基礎学力診断テスト [数学] 解答用紙

◆各問題について自分の理解度を自分で診断する
 A: よくわかる。 B: 自信はないがまあわかる。 C: あまりよくわからない。 D: 全くわからない。

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10

診断結果を個人カードで示し、教科担当教員による個別の学習カウンセリングを行う

基礎学力診断テストの結果は、図 I-1-④のような個人成績カードとして印刷し、生徒全員との個人面談を通して、学習カウンセリングを行う。教科担当教員は、学習の理解度、つまり、学習方法などについて説明をしながら、同時に基礎学力回復講座のクラス分けも行う^{＊2}。この評価は「診断的評価」として位置付けている。

*1 I 章 3 (P15) 参照

*2 I 章 3 (P15) 参照

◆解析 A [診断的評価]

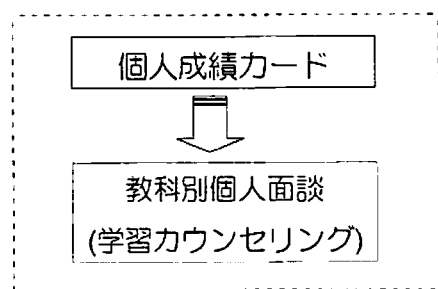


図 I-1-④は数学の「個人成績カード」である。単元（項目）ごとの到達度を A～E の判定で記載する。

生徒が自分で判断している理解度と、実際の解答結果による理解度との比較ができるので、具体的な課題がより明確になる。

なお、生徒による理解度の判断は、正しければ 1、間違っていれば 0 とし集計し、百分率で示すようにしている。

図 I-1-④ 個人成績カード(数学)

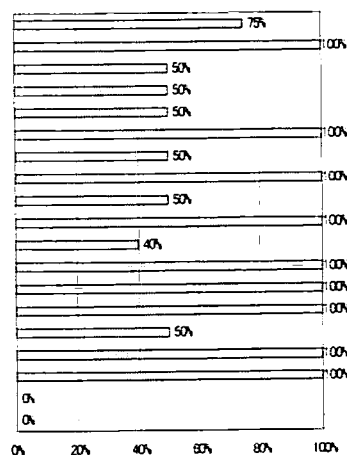
平成16年度 第1回基礎学力診断テスト[数学] 個人成績カード

年組番	1301	氏名	鹿野 太郎
-----	------	----	-------

得点	67 / 100
----	----------

単元別評価

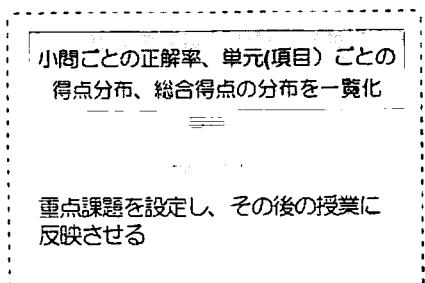
単元	項目	配点	得点	判定
実数	正負の計算	12	9	B
	分数の計算	6	6	A
	指数の計算	6	3	C
	√の計算	12	6	C
文字式	式の値(数値の代入)	6	3	C
	加減(+、-)	3	3	A
	単項式の乗除(×、÷、指数)	6	3	C
	展開	6	6	A
方程式	因数分解	18	9	C
	一次方程式	3	3	A
	二次方程式	15	6	C
	連立方程式	6	6	A
図形	確率の計算	3	3	A
	三角形の基本性質	6	6	A
	三角形と円	6	3	C
	三平方の定理	3	3	A
関数	一次関数	3	3	A
	二次関数	3	0	E
	座標の計算	6	0	E
合 計		129	81	B



※複数の単元項目に重複して該当する問題があるので、単元別評価の得点合計は100点ではありません。

基礎学力診断テストの結果を単元ごとに集計し、指導上の課題を分析・検討する

◆解析 B [形成的評価]



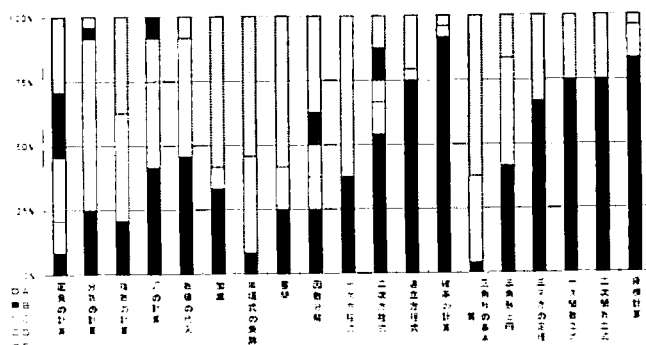
基礎学力診断テストの第二の解析については、図 I-1-⑤のとおりである。「本校の基礎・基本」と位置付けた学習内容ごとの正解率について、学習集団全体の一覧表として示すことにより、教員が指導上の課題を明確にし、その後の指導や授業の改善に生かすことを目的としている。この評価は「形成的評価」として位置付けている。

※「個人成績カード」、「形成的評価一覧」は、

国語・数学・英語の3教科で作成する

図 I-1-⑤ 形成的評価のための一覧表(数学)

2004.4.12																					
単元	項目	正負の計算	分数の計算	指数の計算	√の計算	数式の代入	加減	単項式の乗除	展開	因数分解	一次方程式	二次方程式	連立方程式	確率の計算	三角形の基本性質	三角形と円	三平方の定理	一次関数数直式	二次関数数直式	座標計算	合計
配点		12	6	6	12	6	3	6	6	18	3	15	6	3	6	6	3	3	6	6	129
割合	正答率	12	24	35	28	9	18	4	40	9	35	15	02	48	33	10	08	08	08	55	55
	正答数	12	6	6	9	6	3	6	9	18	3	15	6	3	6	6	3	3	6	11	11
	正答率	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	正答率	7	1	9	0	2	14	13	14	9	15	3	5	1	15	4	8	6	1	2	2
	正答率	8	1	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
判定分布	正答率	6	16	10	4	11	0	9	4	3	0	2	1	0	8	0	0	0	0	0	0
	正答率	3	0	0	8	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	正答率	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	正答率	12	24	35	28	9	18	4	40	9	35	15	02	48	33	10	08	08	08	55	55
	正答率	12	24	35	28	9	18	4	40	9	35	15	02	48	33	10	08	08	08	55	55



各教科で「指導の重点」を明確にすることが
具体的な成果に結びつく

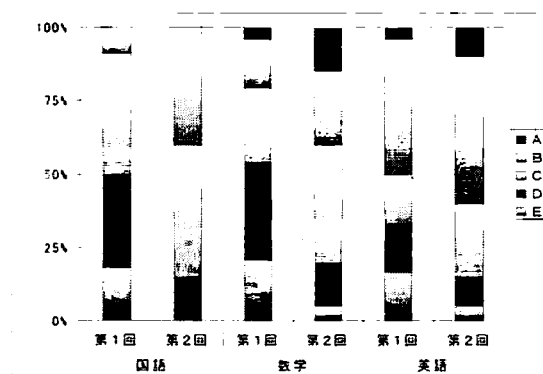
基礎学力診断テストにより、これまでの指導の課題及び重点指導事項を明確化して、学習支援を行った結果、図Ⅰ－１－⑥のとおり、各教科ともランクが上がった生徒が30%～70%と、その成果が認められた。特に、国語に関しては、本校の教育目標である「コミュニケーション能力の育成」、チャレンジ目標である「読書力の養成」など、学習全体により影響を与えているものと考えられる。

また、図Ⅰ－１－⑦のとおり、数学における学習単元（項目）ごとの正解率の変化についても、「図形」を除き、「実数の計算」「文字式の計算」「方程式」「関数」のいずれも向上していることが分かる。

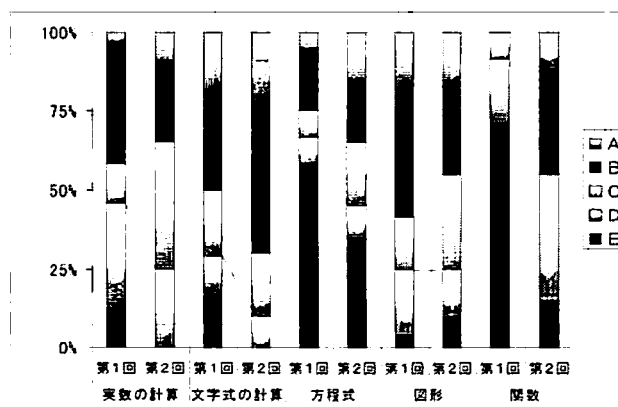
「図形」が低下していることについては、2回の診断テストの間に「図形」に関する学習がなかったためであると分析される。

このような詳細な分析と一人ひとりに応じた教育相談的な学習指導は、「理解」が次の学習への「興味」や「意欲」を喚起するとする「スパイラルプラン」によって学力向上につながるものとして期待している。

図Ⅰ－１－⑥ 基礎学力診断テストの正解率の推移（平15）



図Ⅰ－１－⑦ 各単元（項目）の正解率の推移（数学）

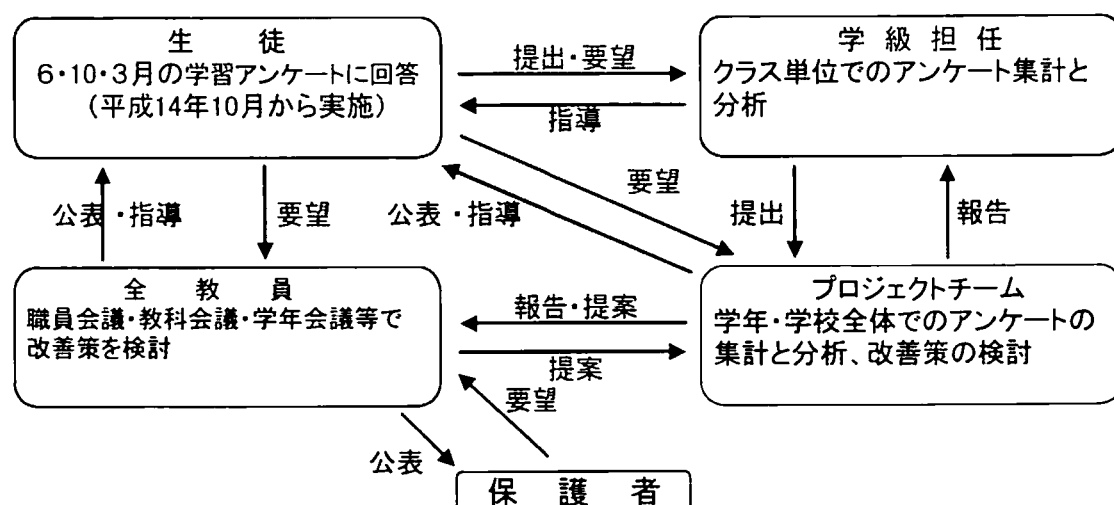


成果と課題

- 基礎学力診断テストの結果をまとめる際に、生徒一人ひとりに対する「診断的評価」、指導の問題点を明確にする「形成的評価」をそれぞれ行うとともに、まとめた結果を教育相談的な学習指導など、指導方法等の工夫改善に生かすことにより、きめ細かな学習指導が実現された。
- 取組みの成果は、教員による内部評価、生徒や保護者による外部評価の両者から高い評価を受けている点からも確認された。
- 「スパイラルプラン」とは、「理解」「興味」「意欲」の三者が相乗効果をもたらし、結果として「学力向上」に結び付くというものであるが、生徒の家庭学習時間の増加につながらない傾向がみられるため、基礎学力の定着に向け、まだ課題が残っている。
- 今後の基礎学力診断テストの結果によっては、各教科の設定目標や比較基準の見直しを検討する必要がある。

生徒の学習に関するアンケートの結果を踏まえ、学校独自のプロジェクトを立ち上げる

【概 要】



学習に関するアンケートの結果から、問題点を改善するためにプロジェクトを立ち上げる

本校では、大学への進学を希望する生徒が多いため、国公立や私立の四年制大学に進学するための力の育成を目指している。

この目標を実現するために、まず生徒の学習状況を把握する必要があると考え、平成14年10月に1回目の「学習に関するアンケート」を実施した。

表1-2-①に示すアンケートの結果から、

表1-2-① アンケート結果 (平成14年10月)

平日の家庭学習を1日平均でどれくらいしていますか。

	1年	2年	3年	全体
人数	79人	79人	118人	276人
ほとんどしてない	39%	57%	20%	39%
30分程度	35%	27%	10%	24%
60分程度	18%	11%	14%	15%
90分程度	3%	4%	4%	4%
120分程度	4%	0%	10%	5%
150分程度	0%	0%	7%	2%
180分程度	1%	1%	5%	3%
210分程度	0%	0%	8%	3%
240分程度	0%	0%	7%	2%
270分以上	0%	0%	14%	5%
平均時間	30分	21分	114分	55分

1・2年次における家庭学習時間の不足と、3年次における家庭学習時間の急増という本校生徒の特徴が現れた。

また、通学区の拡大や少子化の影響、生徒間の学力格差の拡大等により、成績不振者に対する教科や学年での補充的な指導の時間が増えてきており、進学指導の時間確保への影響も危惧されていた。

そこで、従来の指導方法だけでは定着させることができなかった、学習習慣や学力不足の問題を解決し、小規模校ならではの個に応じた指導の充実を図り、生徒の可能性を伸ばすことを考えた。そのためには、教員の指導力を向上させた上で、着実な教育活動を展開することが重要であると考へ、従来の指導方法の見直しや、分掌・教科・学年等の連携強化を図るとともに、成果の検証を多面的に実施することとした。効果的な指導内容や指導方法はマニュアル化し、担当教員の異動後も継続的な指導ができるようにした。

これらを計画的に実践するために、平成15年度に「Nourish 北高PCVプロジェクト」を立ち上げ、現在は17年度プロジェクトを実行中である。

表 I-2-② 「Nourish 北高PCVプロジェクト」の概要

Nourish (学力向上)						
カテゴリー	基礎学力		進路実現に必要な学力	進路実現のための資質や能力		英語の学力
学習活動等	授業	朝学	発展的な学習 課外、課題、添削指導、 小論文指導	総合的な学習	学校行事、日 常の学校生活	英語の学習
栄養素での 例え	Carbohydrate (炭水化物)		Protein (タンパク質)	Vitamin (微量栄養素)		Mineral (無機塩類)
	学習環境の整備					

Nourish 北高 PCVプロジェクト の成果を アンケートによって定期的に検証する

本校では「学力向上」を「Nourish (栄養をつける)」と定義し、表 I-2-②のように、それぞれの学力や資質等を栄養素に例えた「Nourish 北高

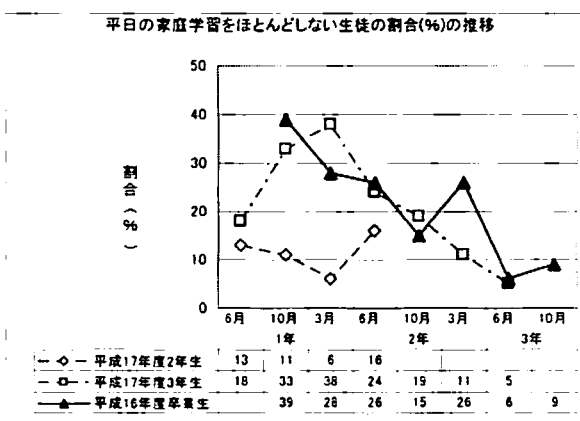
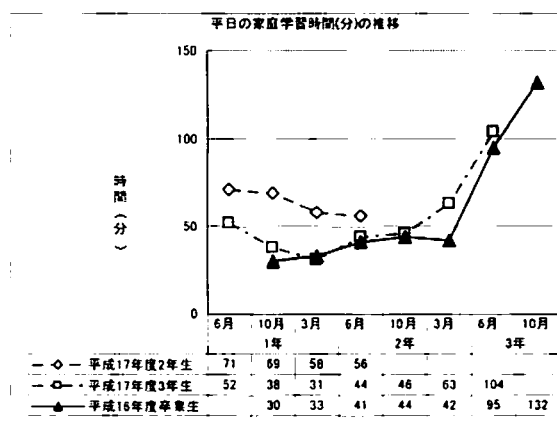
PCVプロジェクト」と命名し、学校をあげて取り組んでいる。

平成14年10月以降、毎学期、定期的の実施してきた学習アンケートの結果を分析したプロジェクトの成果と課題は以下のとおりである。

なお、プロジェクトにおける個々の取組みの内容については、別項で触れる¹⁾。

成果と課題

- 各学年とも、家庭学習の時間が漸進的に増加した。
- 3年時には、ほとんどの生徒が家庭学習の習慣を身に付けるようになった。
- 生徒の学習実態を把握するアンケートは、学力向上の指針を決定する上で、貴重な資料となる。
- 定期的なアンケートの実施により、生徒も自分自身の学習状況の変化を確認することができ、学習への意識が高まった。



- 3年進級までの時期における、家庭学習時間の停滞傾向を解消する手だてを考える必要がある。
- 学習意欲の向上は認められたが、学力の更なるレベルアップを図るため、取組みの一層の工夫改善を図る必要がある。
- 今後もプロジェクト推進の指針となるよう、内容や方法に検討を加えながら、アンケートを定期的
に実施し、検証を続ける。

*1 II章3 (P28～)、IV章5 (P70～)、VI章1 (P100～) 参照

中高連絡協議会を活用して、指導方法等の連携を図る

〔概 要〕

基礎学力診断テスト 《作成・改訂》
学習内容・指導方法 《確認・研修》
進路指導 《情報交換》



高等学校



中高連絡協議会

全体会

教科別分科会

分掌別分科会

研究授業



中学校

教科別分科会や研究授業を組み込んだ
中高連絡協議会を定期的実施する

生徒指導や学習指導等に関して、中学校と高校の連携を密にするための取組みは多いが、本校でも、地域の学校間で協働して指導することの重要性を認識し、学力向上フロンティアハイスクール

の指定を受ける前の平成7年度から、地域の中学校との「中高連絡協議会」を、年3回のペースで実施している。

双方の校種とも全教員が参加し、全体会及び分科会の形式で、様々なテーマを取り上げ、研究協議や情報交換を実施している。

本事業の指定期間を含む、この4年間の協議会の概要は、以下のとおりである。

年度	回	会場校	実施内容及び協議事項
14年度	第1回	中学校	全体会 教科別分科会（中高連携について）
	第2回	高校	全体会（授業参観・研究授業及び補習授業を参観して・中高連携について） 教科別分科会（補習授業を参観して・中高連携について）
	第3回	中学校	全体会（授業参観・中高連携について） 分掌別分科会
15年度	第1回	高校	全体会（中高合同クラスマッチ・高等学校体験入学について、学力向上フロンティアハイスクールについて） 教科別分科会（情報交換を中心とした9分科会）
	第2回	中学校	全体会（中高の教員のTTによる研究授業） 分掌別分科会（情報交換）
	第3回	高校	全体会（中学校・高等学校の特色ある取組みについて）
16年度	第1回	中学校	全体会（中高合同クラスマッチ・中高連絡協議会の取組みについて） 分科会（1学年・進路・その他の分科会での情報交換）
	第2回	中学校	全体会（授業参観：英語・美術・技術・体育・国語・理科） 分掌別分科会（情報交換）
	第3回	高校	全体会（兼 学力向上フロンティアハイスクール中間発表会） （県教育庁指導課、県内学力向上FHS教員、小学校教員参加）
17年度	第1回	高校	全体会（両校近況報告、合同交流会、高校体験入学、学力向上フロンティアハイスクール事業について） 教科別分科会（情報交換を中心とした5分科会）
	第2回	中学校	研究授業（中学校の「総合的な学習の時間」参観）
	第3回	高校	全体会（兼 学力向上フロンティアハイスクール事業報告会）

異校種間の授業研究やチーム・ティーチングに取り組む

中高連絡協議会では、全体会及び分科会（分掌又は教科別）において、中高連携、学習指導、進路指導等についての研究協議や情報交換を行っている。その中で、学力向上に関して中高が連携した取組みとしては、以下のようなものがある。

◆ 入学準備教材の作成支援

新入生に対して、入学準備教材として、「中学校学習指導要領」「近隣中学校の使用教科書」「観点別学習状況の評価方法」を基に作成した自学自習教材を配付しているが、この教材の作成にあたり、中学校における指導内容等を直接聴取することができる。

◆ 基礎学力診断テストの作成支援*

1年生に実施する基礎学力診断テストに関しては、各教科の問題についての意見やアドバイスを得ている。

◆ 中学校での授業参観・授業実施

中学校の研究授業を参観するだけでなく、本校の教員が実際に中学校で研究授業を実施した。このことは、高校の教員のみならず、中学校側にとっても学習指導上の貴重な経験となっている。特に、高校の教員にとっては、中学校で受けてきた学習指導の内容や、生徒の理解度等を十分に把握した上で、入学直後の授業を適切に行うことができるというメリットがある。

これは、1学期中間考査までの期間に、中学までの既習内容を定着させるため、全教科で学

習のつまずきに配慮しながら授業を行う「基礎学力回復講座」にも大いに生かされている。

基礎学力回復講座

入学当初の約1か月間（1学期中間考査まで）、中学校から高校への「つなぎ学習」を強く意識して授業を実施する。

○数学・英語では、習熟度講座別に、オリジナルな基礎教材を準備する。

○他教科についても、基礎事項の確認に重点をおいて授業を行う。

○科目間の連携を図り、他教科の内容・領域にかかわる学習を行う。

・「理科総合」で割合や歩合算の計算を練習（数学）

・「情報A」で英語・ローマ字の表記を学習（英語）

◆ 中学校でのTT授業の実施

平成15年度の中高連絡協議会では、中学校の数学の研究授業を、中・高の教員によるチーム・ティーチングの形態で実施した。まず、事前に、本校の数学担当教員が補助教員として実施し、協議会当日は、中学校教員が補助教員として実施した。この経験は、基礎学力回復講座、夏休み特別学習会だけでなく、日頃の学習指導にも生かされている。以下は、中学校の先生方からの意見や感想である。

○中高間のTTは、教員ばかりでなく、生徒にも良い刺激になる。高校の先生と話すことで中学生の自信につながる。

○学習習慣のない生徒が多いため、中学校でぜひ身に付けさせておきたい。

○体育の授業をぜひ一緒に実施したい。

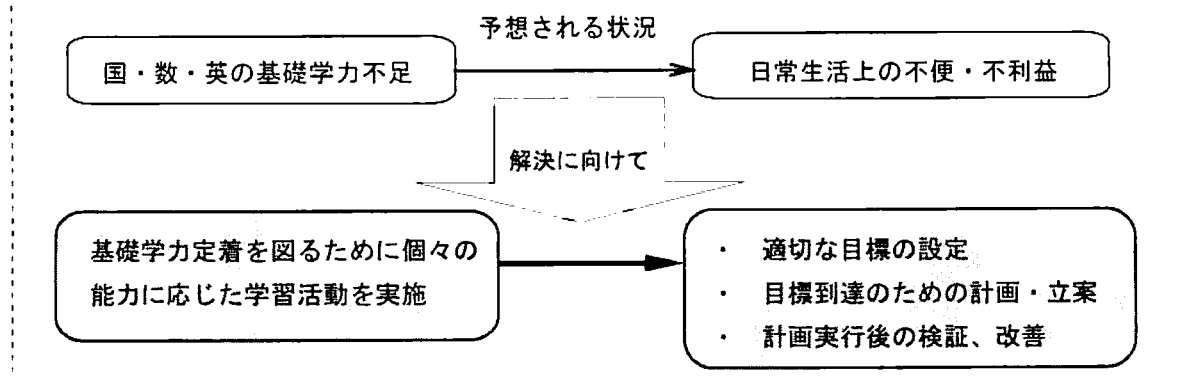
成果と課題

- 中高連絡協議会は、学習指導要領を読むだけではわからない、中学校での学習指導の現状について、直接、情報交換ができ、校種間の円滑な接続を図る上で必要不可欠なものとなっている。
- 相互の授業参観やチーム・ティーチングは、指導内容に加え、指導方法についても研修できるため、教科指導力の質的向上につながる。
- 地域における中・高教員の連携の意識は高まっているが、生徒数の減少により、地元中学校からの入学者が減少傾向にある。

*1 1章1（P8）参照

基礎学力テスト及びアンケートの結果を踏まえ、到達目標を設定する

〔概 要〕



基礎学力の定着・向上を図るため、放課後に「基礎学習」の時間を設ける

本校入学者の中には、基礎学力が不足しているため、授業内容を理解することが困難であったり、日常生活においても不利益を被ったりする者がいるのではないかと心配されていた。

こうした問題を解決するための一つの方策として、平成14年度から、放課後の時間を利用し、全校一斉に「数学の基礎」を定着させる学習活動を始めた。この取組みは、ある程度の成果を上げることができ、生徒にも好評であった。

そこで、平成16年度からは、新たに国語と英語を加え、生徒一人ひとりの理解や習熟の程度に応じて、幅広く基礎学力の定着をめざす学習活動へと発展させた。

一人ひとりの学力を把握するため、基礎学力テストを実施する

生徒一人ひとりの学力を把握するために、高校入学時までの基礎的・基本的な内容で構成した「基礎学力テスト」(図1-4-①～③参照)を実施し、習熟度別クラスを設けた。

図1-4-① 平成17年度基礎学力テスト問題抜粋(数学)

1 次の計算をしなさい。(小数)

$$(1) \begin{array}{r} 7.6 \\ \times 3.5 \\ \hline \end{array} \quad (2) \begin{array}{r} 2.7 \overline{) 16.2} \\ \underline{54} \\ 120 \\ \underline{117} \\ 30 \\ \underline{30} \\ 0 \end{array}$$

2 次の計算をしなさい。(分数)

$$(1) \frac{4}{9} - \frac{1}{3} \quad (2) \frac{8}{15} \div \frac{2}{9}$$

3 次の問いに答えなさい。(速さ)

(1) 270 km を5時間で走る車の時速を求めなさい。

時速 km

(2) (1)の車の分速を求めなさい。

分速 km

7 次の確率を求めなさい。(確率)

(1) 一個のさいころを投げるとき、偶数の目が出る確率を求めなさい。

(2) 二つのさいころA、Bを同時に投げるとき、二つの目の数の和が4になる確率を求めなさい。

8 次の二次方程式を解きなさい。

$$(1) x^2 + 5x + 4 = 0 \quad (2) x^2 - 14x + 45 = 0$$

図 I-4-② 平成17年度基礎学力テスト問題抜粋(英語)

- 下線部に適切な be 動詞を入れなさい。
 - He _____ a baseball player.
 - You _____ very kind.
 - Tom _____ from America.
- 次の文の下線部に適切な疑問詞を入れて、それぞれの対話文を完成させなさい。
 - "_____ did Ken go to Kyoto?"
"Last summer."
 - "_____ do you want to go?"
"I want to go to Rome."
- 日本語を参考にして、下線部に適切な語を入れなさい。
 - _____ I come in?
「入ってもよろしいですか。」
 - I am _____ than Keiko.
「私はけいこより年上です。」
 - I have _____ to America.
「私はアメリカに行ったことがあります。」
- 次の文の () 内の語を適切な形にしなさい。
 - She was (sing) a song when I called her.
 - Have you ever (write) a letter in English?
 - Kyoko (like) playing tennis.
- () 内から正しいほうを選びなさい。
 - (You / Your) cup is over there.
 - Tom, stop (cried / crying).
 - His brothers (is / are) in China.

図 I-4-③ 平成17年度基礎学力テスト問題抜粋(国語)

- 傍線の読みをひらがなで書きなさい。
 - 双方の実力は甲乙つけがたい。
()
 - 一時の衝動に駆られる。
()

- そんなことは日常茶飯事だ。
()
- 傍線のカタカナにあてはまる漢字を、ア～オからそれぞれ選び、記号で記しなさい。
 - 技コウを凝らした作品だ。
 - 強コウ手段に訴える。
 - 時間のコウ束から免れる。
(ア 拘 イ 効 ウ 硬 エ 鋼 オ 巧)
- 次の(1)～(3)の□に共通する漢字を入れて熟語を作りなさい。漢字はア～オから選び、記号で記しなさい。
 - 迫・□縮・□密
 - 支□・□助・応□
 - 点・占□・本□地
ア 拠 イ 濃 ウ 援 エ 局 オ 緊
- 文中の四字熟語の傍線のカタカナを漢字に直しなさい。
 - ムミ乾燥な話でおもしろくない。
()
 - ゼンジン未到大記録だ。
()
 - ショッケン濫用に歯止めをかける。
()
- 次の傍線のカタカナを漢字一字と送りがない(ひらがな)に直しなさい。
(例) 問題にコタエル 答える
 - 必死になって技をキソウ。
()
 - 一段とケワシイ事態を迎えた。
()
 - 新規にイトナンだ事業が急成長した。
()

基礎学力テストの結果を踏まえ、到達目標及び指導内容を設定し、全教員で指導する

年度当初に実施した基礎学力テストの結果により、平成17年度は、習熟度別クラスを2クラスずつ設けた。各クラスとも、高校入学段階までの既習内容を理解することを目標に、年間を通じた学習目標を設定した(表 I-4-①参照)。

表 I-4-① 平成17年度基礎学習クラス及び学習目標

教科	クラス	学年	学習目標
数学	基礎	1・2年	・高校の授業を理解するために必要な数学的知識及び技能の習得 ・将来社会で生きていくために必要な計算技能の育成
	検定	全学年	・数学検定の合格（準2級合格で卒業単位認定） ・数学的な思考力及び社会で生きるために必要な力の育成
英語	基礎	1・2年	・基本的な単語力の強化及び高校の授業を理解するために必要な基礎的知識の習得 ・英語学習への興味・関心の育成
	検定	全学年	・英語検定の合格（準2級合格で卒業単位認定） ・総合的英語運用能力の育成
国語	基礎	1・2年	・基本的な漢字能力の育成 ・高校の授業を理解するために必要な基礎的知識の習得
	検定	全学年	・漢字検定の合格（2級合格で卒業単位認定） ・総合的な漢字能力の育成

※ 3年生は希望進路に沿った進学課外、または一般常識の学習に取り組む。

※ 講義形式または演習形式で行う。



基礎学力テストの実施風景

また、基礎学習の時間には、全教員で指導にあたることとした（表 I-4-②参照）。

表 I-4-② 平成17年度基礎学習予定表(1週間分)

曜日	月	火		水		木			金		
1年	パソコン	数学		数学		国語			英語		
		基礎Ⅰ	基礎Ⅱ	基礎Ⅰ	基礎Ⅱ	検定	基礎Ⅰ	基礎Ⅱ	検定	基礎Ⅰ	基礎Ⅱ
		○	☆	○	☆	○	☆	☆	○	☆	☆
教室	模擬実	2年	1年	2年	1年	図書	2年	1年	図書	2年	1年
2年	数学		パソコン	数学		国語			英語		
	検定	基礎Ⅰ		基礎Ⅱ	検定	基礎Ⅰ	基礎Ⅱ	検定	基礎Ⅰ	基礎Ⅱ	
○	○	☆	○	○	☆	○	☆	☆			
教室	図書	2年	1年	模擬実	図書	2年	1年	図書	2年	1年	
3年	一般常識	一般常識	検定	一般常識	検定	一般常識	検定	一般常識	検定	一般常識	
教室	3年	3年	図書	3年	図書	3年	図書	3年			
課外	英語	国語	英語	数学	国語						
教室	理科	理科	理科	理科	理科						

○・・・教科担当
※ ☆・・・教科担当以外の教員

生徒対象のアンケートを実施し、学習活動についての検証・改善を図る

学期末に生徒対象のアンケートを実施し、学習についての自己評価を促すとともに、学習活動についての検証・改善を行った(表 I-4-③参照)

表Ⅰ-4-③ 「基礎学習」アンケート結果 (1学期)

【1・2年】 クラス選択人数

クラス 教科	基礎Ⅰ	基礎Ⅱ	検 定
国語	16人	9人	11人
英語	18人	12人	6人
数学	17人	15人	4人
パソコン	36人		

【3年】 クラス選択人数

クラス 教科	検 定	課 外
国語	4人	3人
英語	1人	4人
数学	4人	3人
一般常識	15人	

(アンケート回答者数 51人)

Q1 基礎学習に対する自分の取組について

まじめに取り組めた	26人
大体まじめに取り組めた	25人
取り組めなかった	0人

100%

Q2 まじめに取り組めた理由について

苦手なところを克服したかったから	27人
基礎学習は大切に意味があると思ったから	19人
自分の将来に役立つと思ったから	15人
学校側で決められたことだから	9人

Q3 基礎学力の向上について

向上したと思う	38人
変わらないと思う	13人

74%

Q4 自分の苦手な単元項目について

国語	漢字	19人
英語	単語	19人
	文法	6人
数学	分数計算	4人
	面積・体積	3人
	方程式	3人
	文章問題	5人

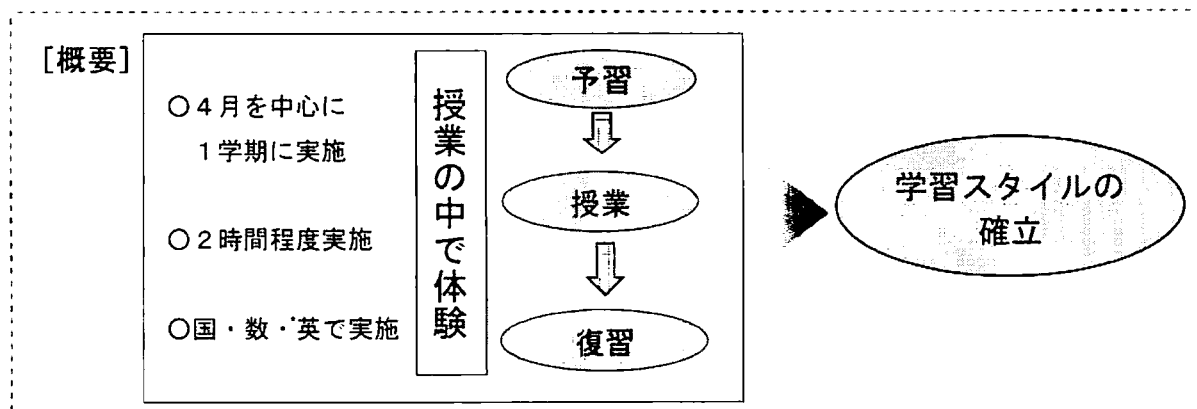
Q5 感想

基礎からできたのでわかりやすかった。
無駄話が多いので、もう少し静かにしたいと思う。
面倒だけど、ためになるので良い時間だと思う。
学力が上がるからやった方がよい。
時々休みがほしい。
検定クラスも20分間にしてほしい。
生徒が苦手なところをやってほしい。
忘れていることを思い出すことができる。
よくわからないので少しつらい。

成果と課題

- 習熟度に応じた教材を提供することにより、生徒が意欲的に学習に取り組むようになった。
- 資格取得など、個々の関心に応じた学習活動を通じて、生徒一人ひとりの学習目標が明確となった。
- 全教員の協力体制が整い、到達目標の達成に向けて、きめ細かな指導を行うことができた。
- 学習内容の定着を図るために、「基礎学習」の時間の実施形態を検討する必要がある。

新入生の学習スタイルを「学び方学習」を通して確立する



新入生の学習習慣の実態を踏まえ、高校での学習スタイルを身に付けさせる方法を探る

本校に入学する生徒の実態として、家庭での学習習慣が確立していないことが、以前から課題となっていた。

本事業の実施にあたり、平成15年度入学生に対して中学時の家庭学習時間を調査したところ、平日においては半数を超える生徒が、休日においても3分の1の生徒が、家庭学習を「ほとんどしない」又は「30分以内」という状況が明らかとなった。また、国語・数学・英語の各教科の調査においても、「学習方法がわかっていない」「予習や復習をしていない」という状況が明らかとなった。

表1-5-① 中学時の家庭学習時間

平日	ほとんどしない	25.0%
平日	30分以内	27.5%
休日	ほとんどしない	24.5%
休日	30分以内	9.5%

表1-5-② 国語・数学・英語の学習に関する調査

国語科	学習方法がわからない	48.0%
	辞書を引かない(古典)	63.5%
	予習しない(古典)	51.0%
	宿題のみで復習しない	75.0%
数学科	学習方法がわからない	5.0%
	予習しない	65.5%
	塾の課題を学習する	52.5%
	授業内容の確認・宿題をする	27.5%
英語科	学習方法がわからない	16.0%
	予習しない	14.5%
	宿題のみで復習しない	65.5%

これらの調査結果をもとに、「新入生に学習習慣を身に付けさせるためにはどうしたらよいか」について研究研修部や各教科で検討した結果、実際の授業の中で「予習－授業－復習」といった学習サイクルを体験させることが重要であるという結論を得るに至り、学習オリエンテーションの取組みを国語科・数学科・英語科で行うこととした。

授業の中で「予習－授業－復習」の学習サイクルを体験させ、学習習慣の定着を図る

平成15年度は、初めての取組みということで、研究研修部から以下のような提案を行い、宮崎県立宮崎西高等学校の事例を参考にして、各教科で実施方法を検討した。

各教科で検討した結果、3教科とも提案に沿った形で、年度当初に2時間連続の授業を設定し、その中で実際に「予習－授業－復習」の学習サイクルを体験させることにした。

【提 案】

- ①担当者から授業の受け方や予習・復習の方法について話す。(従来どおり)
 - ②従来、話だけで済ませていたことをプリントにして示す。(一層の定着を図る)
 - ③「予習に取り組む→授業を受ける→復習に取り組む」という学習方法を体験させる。
- ※1コマ100分(連続授業の形態)で1日に3コマ実施…英語・数学・国語

例えば、国語科では、以下のような取組みを行った。

国語科 国語総合（古文）

ガイダンスとして、古文とはどういうものか、学習方法（副教材の使用等）について説明をした。

そして、実際の学習方法として、音読・ノート作り、辞書の引き方等について指導した。

他教科も、このような形で年度当初に一律に実施したが、実際に学習方法を体験させたことに対して、実施後のアンケート結果から、生徒の反応は非常に良かったことがうかがえる。

一方、教員側からは、以下のような実施上の問題点が指摘された。

- ・実施時期が適切でない。
- ・教科の特性として、実際に授業を進め、基礎知識を身に付けてからでないと、予習に臨めない。
教科によって、実施するタイミングは違うように感じる。
- ・特別時間割により一度に実施したので、担当者の負担が大きい。

表Ⅰ-5-③ 生徒へのアンケート結果

問	今回の試みについてどう思いましたか。
	良かった 72.9%
	何ともいえない 27.1%
	良くない 0%

問 来年度も、教科学習についてこのようなオリエンテーションを実施したほうがよいと思いますか。

思う	82.4%
何ともいえない	14.6%
思わない	3.0%

それぞれの教科の特性に応じて
「学び方指導」の工夫・改善を図る

こうした問題点を考慮して、2年目以降は、各教科で実施しやすい時期に、実施しやすい形態で行うこととした。

以下に、平成16・17年度の実践の中から、国語科を例に、具体的な実践を挙げる

（例） 国語総合（現代文）

国語科では、1学期当初にシラバスの説明とともに予習・復習の仕方を説明したが、学力の実態に合わせた学習の仕方ということに着目して、2学期当初を中心に、以下のような形で実施した。

実施形態としては、2時間分の授業をあて（ただし連続授業ではない）、「予習－授業－復習」の学習スタイルが身に付くように取り組んだ。

【1時間目】

- ① まず、予習・復習の必要性をプリントにして説明し、その大切さを改めて強調するとともに、模擬試験の結果等をもとに、既習内容の理解や今後の学習に必要な力について説明した。
- ② そして、実際に予習の仕方を説明し、生徒に組み合わせた。内容は、以下のとおりである。

- 漢字の読み方をどう調べるか（漢和辞典の使い方など）
- 言葉の意味をどう調べるか（辞書の意味と文脈上の意味）
- 教科書への書き込みをしよう
 - ・指示語とその内容
 - ・接続語の扱い（言い換え・対比・因果関係）
 - ・言い換え言葉を探そう
繰り返される言葉がキーワード
 - ・対比されている言葉を探そう
論説文の基本は「比べて評価する」こと
- ノートの使い方を工夫しよう
 - ・上段に内容のまとめを書き、下段に言葉調べを書き込み、図にして表そう
 - ・図にしたことを要約文にまとめよう

【2時間目】

- ③ 板書形式の授業を初めに行った。授業では、生徒を指名して、応答形式による範囲の音読や予習内容に沿った質問と板書を行った。
- ④ 残りの時間で、復習と次時に向けての予習の取組みを行った。復習の内容は、以下のとおりである。

- 教科書への書き込みや訂正
- ノートの訂正や整理

2年目以降の生徒の反応は、教科により様々であったが、実施後のアンケート結果から、概ね良好な印象であったことがうかがえる。

また、教員側においても、教科・科目の特性に

合わせた実施ということで、概ね好評であったが、このオリエンテーションだけでなく、実際に「予習－授業－復習」が定着していくための工夫が必要であるという意見も出された。

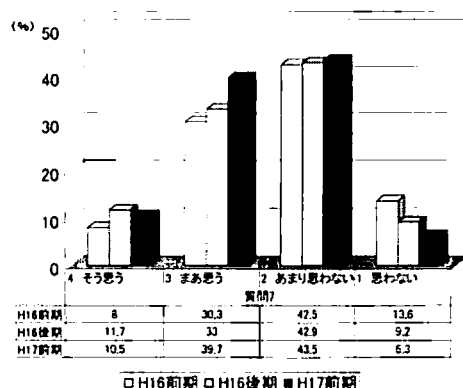
以上のような取組みを国語科・数学科・英語科で実施することによって、中学時代に身に付いていない学習習慣の定着を図り、高校生としての学習習慣を育てることに取り組んできた。その結果、予習・復習の重要性が理解され、実際に予習に取

表Ⅰ-5-④ 生徒へのアンケート結果

問	今回の試みについてどう思いましたか。 (3教科平均値)	
良かった	58.0%	
何ともいえない	39.3%	
良くない	2.7%	

り組む生徒も、次の授業アンケートの結果にみられるように、年々増加している。

質問 私は、授業の予習・復習ができている。



成果と課題

○ 家庭における学習習慣の必要性について、生徒の理解が深まった。

学習オリエンテーションに対する生徒の感想・意見より

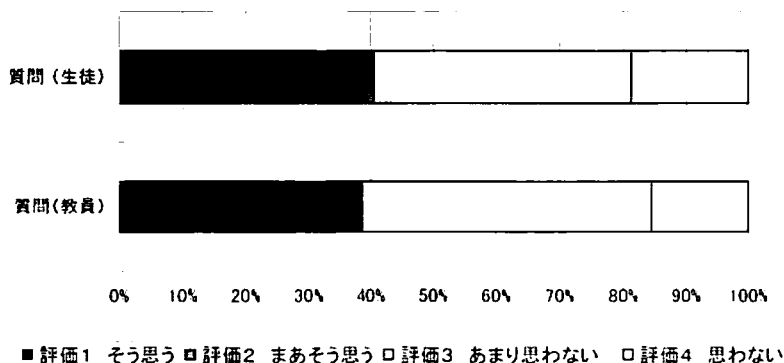
- ・予習をしたら授業がスムーズで分かりやすいと分かった。
- ・予習の仕方などがよくわからなかったけど、お陰で予習の仕方がよくわかった。
- ・予習復習の大切さが再確認できてよかった。
- ・学習方法の再確認ができた。
- ・中学では予習などをしていなかったなので、このような時間はあった方がいいと思う。
- ・このような時間があれば、もっと授業が分かり、参加していける感じがする。

○ 「予習－授業－復習」の一層の定着を図る手だての工夫が必要である。

「学力向上フロンティアハイスクール事業アンケート」の結果より

質問(生徒) 入学時学習オリエンテーションは、あなたの家庭での学習習慣の定着に生かされていますか。

質問(教員) 生徒の家庭での学習習慣は十分に定着していると思いますか。



Ⅱ章 基礎・基本の定着を図り、個性を生かす指導をどのように行うか

- 1 少人数指導をどのように行うか
- 2 ティーム・ティーチングや習熟度に応じた指導をどのように行うか
- 3 始業前や放課後の学習指導をどのように行うか
- 4 学習合宿をどのように行うか
- 5 一人ひとりに応じたきめ細かな指導をどのように行うか

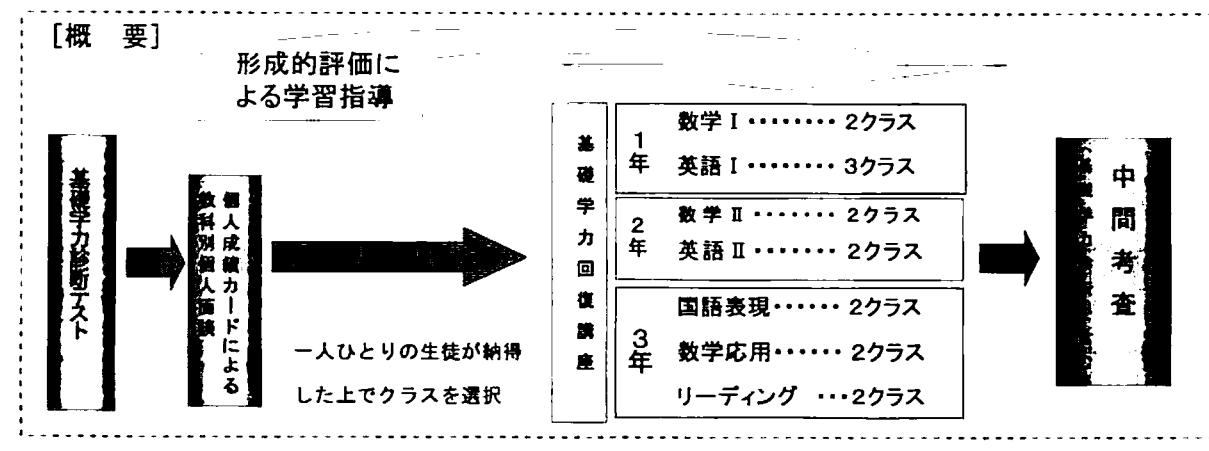


校外施設での学習合宿



数学科の少人数指導

少人数の「基礎学力回復講座」により基礎基本の定着を図る



学力診断テストの結果と本人の希望を踏まえて
国・数・英の少人数指導クラスを編成する

基礎学力診断テストの結果は、生徒別のデータである「個人成績カード」と項目別データである「形成的評価」の2種類に集計する¹⁾。教科担当教員は、「個人成績カード」をもとに、生徒一人ひとりと個人面談を行い、学習カウンセリングとともに、学習面でのつまずき箇所を効果的に指導するための基礎学力回復講座のクラス分けを行う。

このクラス編成の特色は、成績によって一方的にクラスを決定するのではなく、あくまで生徒と相談をしながら決定することにある。

これは、「理解できる喜び⇒学習への興味⇒授業への参加意識の高揚」等により学力向上を図る「スパイラルプラン」の趣旨に基づくものであり、したがって、各クラスの生徒数は一定ではない。

また、クラスは固定したものではなく、診断テストや定期考査の成績、授業中の観察等により、1年次においては、編成後に1、2回の見直しの機会を設けている。なお、各教科の科目別クラス数は上記の[概要]のとおりであり、3年次に関しては希望進路別のクラス分けも含まれる。

基礎学力回復講座における少人数指導の成果を
年3回のPDCAサイクルにより評価する

このクラス分けは、PDCAサイクルのP（計画）にあたる。その後、中学校の既習内容の定着と学習のつまずきを解消するため、1学期中間考査まで「基礎学力回復講座」を行う。国語、数学、英語については自作教材を中心に指導を行う。また、他教科についても、高校への橋渡し期間としての認識で授業を行う。これがD（実行）になる。

中間考査は「基礎学力回復講座」のC（評価）という位置付けとし、その結果は中間考査以後のA（改善）につなげる。なお、「基礎学力診断テスト」は、3年生を除き、各学期1回の年3回ほど実施するため、それぞれをPDCAサイクルのCと位置付け、Aを経て、その後のPにつなげる。

学力の回復が十分でない生徒に対しては
「夏休み特別学習会」を実施する

1学期末考査の結果において、1年生で、「基礎学力回復講座」の評価が十分に満足できる状態になかった生徒、或いは、2・3年生で、進級や卒業に不安を抱える生徒がいた場合には、本人及び保護者の意向を確認した上で、10日程度の「夏休み特別学習会」を実施している。

会場は、生徒の移動等に配慮し、学校あるいは公民館等の施設とし、自作教材による教育相談的な学習指導を行いながら、学習のつまずきの原因究明、学習方法の個別指導等を行っている。

*1 1章1（P8～）参照

アンケートを行い、少人数指導等に対する生徒の評価を確認する

次のアンケートは、1年生を対象に1学期末に実施したものである。

アンケートの結果によると、「基礎学力診断テスト」によって、自分の学習のつまづきがどこにあるかについては、約9割の生徒がわかったと回答しており、それぞれの学習における課題が明確になっているといえる。また、この診断テストの結果に基づいて行う少人数編成の「基礎学力回復講座」についても、ほぼ全ての生徒が「あった方がよい」と回答しており、高校への橋渡しとして一定の役割を果たしているものと思われる。

図Ⅱ-1-① 「基礎学力回復講座」等に関するアンケート
(2005年度・1年生対象)

○ 本校では入学直後に「基礎学力診断テスト」(以後「診断テスト」と呼ぶ)を実施し、よく理解できていないところをはっきりさせようとしています。「診断テスト」によって自分がよく理解できていないところが分かりましたか。		
①よく分かった	25%	□ 88%
②まあまあ分かった	63%	
③あまり分からなかった	4%	
④分からなかった	8%	
⑤その他	0%	
○ 入学直後から、すぐに高校の学習内容に入るより、しばらくは基本的なことを確認する「基礎学力回復講座」がある方がよいと思いますか。		
①とてもよいと思う	67%	□ 96%
②まあまあよいと思う	29%	
③あまりよいと思わない	0%	
④よいと思わない	4%	
⑤その他	0%	
○ 「診断テスト」の結果により、どれくらい理解できているかでクラス分けをしています。この「基礎学力回復講座」によるクラス分けは、すでに理解できているところは簡単に、理解できていないところはしっかりと説明を受け、理解を深めるのに都合がよいと思いますか。		
①とても都合がよいと思う	21%	□ 92%
②まあまあよいと思う	71%	
③あまりよいと思わない	8%	
④全く思わない	0%	
⑤その他	0%	

こうした結果からも、生徒一人ひとりの学力の実態を踏まえながら、生徒の希望を尊重したクラス編成による少人数指導は、本校においては、有効な指導方法の一つになっていると考えられる。

しかし、一方で、生徒の学習習慣の形成については、十分でない状況も明らかになった。そこで、平成17年度は、適切な課題の提出や家庭学習の指示をするなど、全教員で校内指導体制の改善に取り組んでいるところである。

○ クラス分けがされた授業では、中学校の時と比べて、分からない点などの質問はしやすいですか。

①とてもしやすいと思う	25%	□ 92%
②まあまあしやすいと思う	67%	
③あまりしやすいと思わない	8%	
④しにくい	0%	
⑤その他	0%	

○ 「基礎学力回復講座」によって、無理なく高等学校の学習にはいれたと思いますか。

①とてもそう思う	17%	□ 88%
②まあまあそう思う	71%	
③あまり思わない	4%	
④思わない	0%	
⑤その他	0%	

○ 高校入学後、中学校時代よりは勉強しようという意欲が高まりましたか。

①とても高まった	4%	□ 71%
②まあまあ高まった	67%	
③あまり高まっていない	17%	
④全く高まっていない	13%	
⑤その他	0%	

○ 1学期を振り返ってみて、中学時代より今の方が勉強がしやすいと思いますか。

①大変勉強しやすい	17%	□ 71%
②少しはしやすい	54%	
③あまり変わらない	29%	
④少ししにくい	0%	
⑤勉強しにくい	0%	

○ 高校に入って、家庭学習の時間は変化しましたか。

①かなり増えたと思う	8%	□ 37%
②少し増えたと思う	29%	
③変わらない	50%	
④少し減った	0%	
⑤大幅に減った	13%	

○ 今あなたの家庭学習の時間はどれくらいですか。

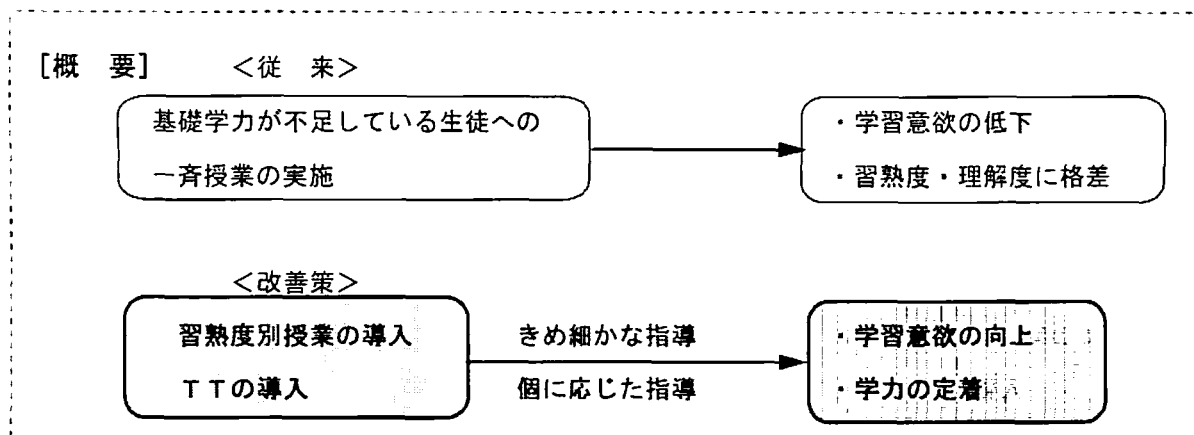
①0分	38%	□ 92%
②0～30分	21%	
③31～60分	33%	
④61分～90分	4%	
⑤91～120分	0%	
⑥121～150分	4%	
⑦151～180分	0%	
⑧181分以上	0%	

成果と課題

- 教科担当による個人面談の状況を踏まえてクラス分けを行った少人数授業は、「中学時代に比べて質問がしやすくなった」など、主体的に参加できる授業形態となっている様子が伺える。
- 「理解」「興味」「意欲」の相乗効果によって学力向上をめざす「スパイラルプラン」により、約7割の生徒が学習意欲の高まりを感じている。
- 家庭学習時間については、約6割の生徒が、中学時代と「変わらない」又は「減少」しており、その時間も、約9割が「60分以内」、約4割が「全くしていない」状況にある。基礎学力の定着には、家庭での学習習慣の確立が不可欠である。



英語・数学について、新入生へのTTと、2年間の習熟度別授業を実施する



基礎学力の身に付いていない生徒に対応するための効果的な教科指導の方法を探る

例年、本校には、数学や英語の基礎・基本が十分に定着していない生徒も入学してくる。

入学後は、本校の教育課程に従って授業を実施するが、数学における基本的な計算力や英語における基礎的な単語力等が不足しているため、計画どおりに指導が進まない状況が見受けられた。また、数学や英語の嫌いな生徒も多く、単位修得が困難になることも少なくなかった。

そこで、定員20人という少人数クラスの特徴を生かし、きめ細かな指導を展開して、前述の数学、英語嫌いや単位修得が困難な生徒に対応するため、数学と英語において、習熟度別指導及びTTを実施することとした。

1・2年次で発展性をもたせた教育課程を編成し、習熟度別授業を行う

本校では平成14年度から単位制を導入し、教育課程を改編した。これにより、それまで一斉授業を行ってきた数学と英語の授業において、1年次から習熟度別授業を導入することとした。また、1年次に選択履修した科目により、2年次の履修

科目が自動的に決まる方法を導入した。このことにより、前年度と次年度の学習内容に関連性を持たせた指導が可能となった。

また、平成15年度入学生から新教育課程となったため、さらに実施科目の検討を行い、現行の教育課程を新たに編成し、実施している（表Ⅱ-2-①参照）。

表Ⅱ-2-① 平成17年度及び18年度教育課程における数学及び英語の履修方法（すべて4単位）

年度 \ 科目	数 学		英 語		
平成17年度 1年次 教育課程	数 学 Ⅰ	数 学 基 礎	英 語 Ⅰ	基 礎 英 語	ニ ケ ー シ ョ ン Ⅰ オ ー ラ ル ・ コ ミ ュ
	[7 人]	[13 人]	[6 人]	[14 人]	
平成18年度 2年次 教育課程	↓ 数 学 Ⅱ	↓ 数 学 Ⅰ	↓ 英 語 Ⅱ	↓ 英 語 Ⅰ	



数学科の習熟度別授業

中学校と高校の学習の連結を重視し、1年次の1学期中間考査まではTTを導入する

現行の教育課程において習熟度別授業を実施している数学と英語の各科目の目標（一部抜粋）を、表Ⅱ－2－②に示す。

従前は、習熟度別クラスを編成する場合、学力検査時の関係科目の得点を参考にし、生徒本人の希望も考慮して編成を行っていた。しかし、一方で、編成後に所属したクラスの授業についていけない生徒も毎年数名はいるため、指導方法の工夫改善を図る必要が出てきた。

そこで、平成17年度は、従来の編成方法によりクラスを決定した後、1年次の1学期中間考査まではクラスを分離せず、2名の授業者によるTTにより、中学校までの学習内容の復習を徹底的に行った。これにより、各科目とも高校段階の学習内容にスムーズに接続させることが可能となった。

表Ⅱ－2－② 習熟度別授業実施科目の学習目標の一例

科目名	学習目標
数学基礎	数学と人間とのかかわりや、社会生活において数学が果たす役割について理解させ、数学に対する興味・関心を高めるとともに数学的な見方や考え方を認識させ、数学を生活において活用する態度を育てる。
基礎英語	中学校での学習内容の定着を図るため、基礎的な文法、単語等を整理、復習し、2年次の英語1へとつなげていく。この授業を通して、基礎的な英単語や英文を聞き、声に出して発音し、読んで理解し、書いて綴りを確認し、使える言語として習得させる。また、英語圏の文化に親しもうとする態度を育てる。



TTによる英語の授業風景

成果と課題

- 新入生に対し、1学期中間考査までチーム・ティーチングを実施することにより、中学校における学習内容の定着を図ることができた。
- 習熟度に応じた授業を実施することにより、生徒は「わかる喜び」を体感することができた。また、苦手意識を払拭して、検定に合格する生徒も現れた。
- 学習目標の一つに「興味・関心の喚起」を掲げ、授業を展開することにより、数学嫌いの生徒が減少した。
- 習熟度に応じた授業をより効果的に展開できるよう、クラス編成の方法をさらに検討する必要がある。

基礎・基本の定着を図るCS指導と、進路希望に応じたPS指導のバランスに留意して、授業外の指導計画を立てる

【概要】

CS (Constant Study) …基礎学力向上のための学習

校内

CS(朝学等)指導

校外

フレッシュマンキャンプ

PS (Power Study) …進路実現に必要な学力向上のための学習

校内

PS(課外)指導

校外

PS(学習)合宿

継続的なCS(朝学等)指導により、学習習慣の定着と基礎学力の向上をめざす

本校では、平成14年10月に実施した「学習に関するアンケート」の結果、課題として浮き彫りになった「不十分な学習習慣」と「基礎学力の不足」の克服をめざして、CS (Constant Study) 指導を実施している。ここでは、主に朝学指導(朝のSHR前の学習指導)について記すこととする。

朝学指導は、クラス単位や学年単位で実施していたが、平成15年1月から全校での取組みとした。また、平成15年度からは始業時間を5分早め、8時25分からの10分間を朝学指導の時間として活用することとし、各学年とも英単語の学習を中心として、漢字の学習、読書(新聞を含む)、自由課題など、各学年の実情に応じた取組みを行っている。

英単語テストは20点満点とし、16点以上で合格とする。不合格者及び未受験者は再試・追試を翌日の昼休みに受け、前回不合格者は20点、前回未受験者は16点以上で合格としている。不合格者並びに2回とも未受験の者には課題を必ず提出させ、その提出をもって合格とする。英単語テストの成績

は教科の評価に加え、課題提出を含めて、合格すれば、必ずプラスの評価とする。

朝学テストを行わない日にも、始業前に単語帳を開くことが生徒の日常的な習慣となり、朝の10分間が学習の時間として定着した。

英単語学習の成果を一層確実なものにするため、各学期末には「英単語選手権」を開催し、各学年の成績優秀者10名を表彰しており、生徒にとっても励みとなっている。

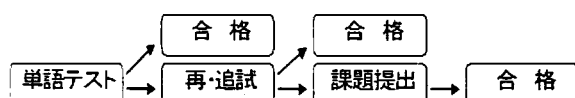
また、英単語の継続的な学習は、英語科における発展的な指導を行う際にも有益であった。

CS指導としては、この朝学指導のほかに、成績不振者に対する個別指導を継続して行っている。小規模校としての利点を生かし、個に応じた指導により基礎学力の向上をめざしている。

フレッシュマンキャンプにおいて、高校での学習方法を学ぶ

平成16年度から、新入生を対象として、4月に1泊2日の日程で、国語・数学・英語の学習指導、進学ガイダンス等を中心とした「フレッシュマンキャンプ(集団宿泊指導)」を実施している。高校生活の入門として、学習面だけでなく、良好な人間関係の形成にも有効であることから、内容を精選し、今後も引き続き実施する予定である。

図Ⅱ-3-① 英単語テストの流れ



*1 Ⅰ章2 (P12～) 参照



フレッシュマンキャンプでの学習指導風景

PS（課外）指導を行い、進学に必要な学力を養成する

CS指導を実践する一方で、進学に必要な発展的な学習として、PS（Power Study）指導も行っている。

校内におけるPS指導は、早朝・放課後・長期休業期間中の「課外指導」が中心で、平成17年2学期には、1・2年生は古典・数学・英語の3講座、3年生は現代文・古典・数学・英語（発展）・英語（基礎）・日本史・現代社会・政治・経済・生物・物理・化学・小論文の12講座を演習・添削・課題提出等の形式で実施した。

この課外指導よりもさらに発展的な指導を希望する生徒には個別指導も行っており、受験希望先の過去の問題を解説するなど、一人ひとりの進路希望に応じた指導となるよう留意している。

年2回のPS（学習）合宿を実施することにより、進路に対する意識の高揚を図る

学校外でのPS指導としては、「PS合宿」を実施している。進学に対する意識の高揚を図るとともに、集団生活を通して、自主性・社会性及び協調性を養うことを目的として、平成16年度から年に2回、1学期と3学期に実施している。回を重ねるごとに、参加者も増加しており、学校行事として定着してきた。

PS合宿は、2泊3日の日程で行い、英語・数学・国語を中心とした自主的な課題学習に多くの時間を当てる。引率教員には、必ず国語・数学・英語の教員を含めており、生徒が自由に質問ができるよう配慮している。

表Ⅱ-3-① PS合宿概要(平成17年度)

期 間	7月8日（金）（15：30に学校発）～7月10日（日）
場 所	山口県セミナーパーク （山口市秋穂二島）
参加者	生徒53名（1年14名、2年12名、3年27名）及び教員6名
内 容	予備校講師による進路講演会 自主課題学習

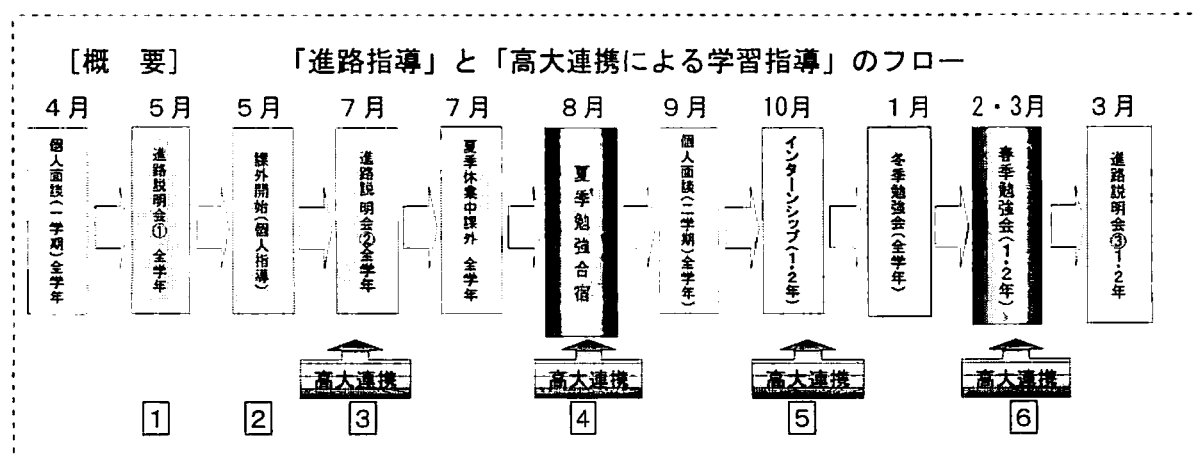
【生徒の感想】

- 3日間これほど集中して勉強をしたことは、今までになく、達成感があった。（1年女子）
- 講演会はよい刺激となり、ためになった。
（2年男子）
- 受験のためだけではない、もっと先のことに
対する力が身に付いた気がする。（3年女子）

成果と課題

- 成績不振による補充指導の対象生徒が減少し、平成16年度末には対象生徒が一人も出なかった。
- 朝学テストを実施しない日においても、始業前の10分間が学習の時間として定着した。
- 授業以外の教員の指導時間をどのように確保するかが課題である。
- 学力格差を縮めるために、基礎学力の一層の向上を図る効果的な指導法の研究と実践をどのように進めていくかが課題である。

大学との連携による勉強合宿により、進路意識と学習意欲の向上を図る



図Ⅱ-4-①

高大連携による「進路指導」と「学習指導」
を有機的に結び付けた計画を立てる

本校では、生徒一人ひとりの夢の実現に向けて入学時から様々な形で進路指導を行っているが、進学希望者の指導については、上の図Ⅱ-4-①に示す流れになる。

毎年4月に、全生徒に対して進路希望調査を実施した上で、進路課で個人面談を行う。その後、全学年を対象とした進路説明会（図Ⅱ-4-①の①、以下、図中の番号のみを示す）をPTA総会の際に開催し、生徒、保護者がそろって、進学について興味・関心のある分野の説明を受けるとともに、疑問点等を質問することによって、進学への動機付けを図る。

②の課外指導は、個人指導を基本としている。進学希望者については、部活動や各種委員会の活動など、生徒の活動の支障とならないように配慮しながら、年間を通して、生徒一人ひとりの進学希望先や学力を考慮しながら行う。

③の進路説明会は、生徒の進学希望に応じて、大学・専門学校から講師を招き、専門分野に関する情報収集や説明を受ける機会としている。

進学希望者については、毎年、夏季休業中に、現役大学生を講師に招いて、1泊2日の日程で、④の夏季勉強合宿を実施する。また、⑤のインターンシップについては1年次及び2年次に実施しているが、2年次には進学希望先の大学や専門学校に依頼して、体験授業や説明会を実施している。

学習会については、④の夏季勉強合宿のほか、1、2年生については、春季休業を有効に過ごし、次年度に向けての学習意欲の向上を図るため、現役大学生を講師に招いて、⑥の春季勉強会も実施している。



勉強合宿（2003年度）（徳地少年自然の家）

現役大学生を講師に招いて、夏季と春季に
学習合宿を実施し、総合的な指導を行う

夏季休業期間中の課外授業は、全学年の希望者を対象として、7月に約10日間実施する。その後、山口大学教育学部の協力を得て、現役大学生あるいは大学院生を講師に招いての勉強合宿を1泊2日の日程で実施している。

対象教科は国語・数学・英語の3教科とし、本校教員が、参加生徒の学力を勘案した上で大学入試センター試験レベル程度までの学習教材を作成し、大学生に学習の支援を受ける形式で行っている。

学習教材は事前に生徒に配布しており、生徒は予習をした上で勉強合宿に臨む。そして、合宿中

は、わずか1～4年前に大学入試を乗り越えた大学生に対し、正答や解法の確認、疑問点に対する質問等を直接行うことができる。

学習指導については、それぞれの専門教科の大学生が中心となるが、全員が各学年を分担して、学習の援助を行う。本校からも、各教科の担当教員が参加するが、大学生からの質問に答える、指導内容について確認する、あるいは勉強合宿の運営を行うことなどを主な業務とする。

また、大学との連携による勉強合宿を行う利点として、生徒が、現役大学生から、受験勉強の方法や大学で学ぶことの意義、将来の夢、大学生活の実状など、学校説明会とは異なる視点からの生きた情報を直接聞くことができ、学習意欲や目的意識の向上を図ることができる点があげられる。



夏季勉強合宿(2005年度) (徳地少年自然の家)

夏季勉強合宿 日程

【1日目】

9:30～10:00 入所式・オリエンテーション
10:00～10:30 勉強法についてアドバイス
10:45～12:15 英語
12:15～13:00 昼食
13:05～14:20 数学
14:35～16:00 国語
16:15～17:45 講話(大学生活や受験勉強ほか)
17:45～19:30 夕食・入浴
19:30～20:30 自習時間
20:30～22:00 一般教養試験勉強及び質問時間
22:00 就寝

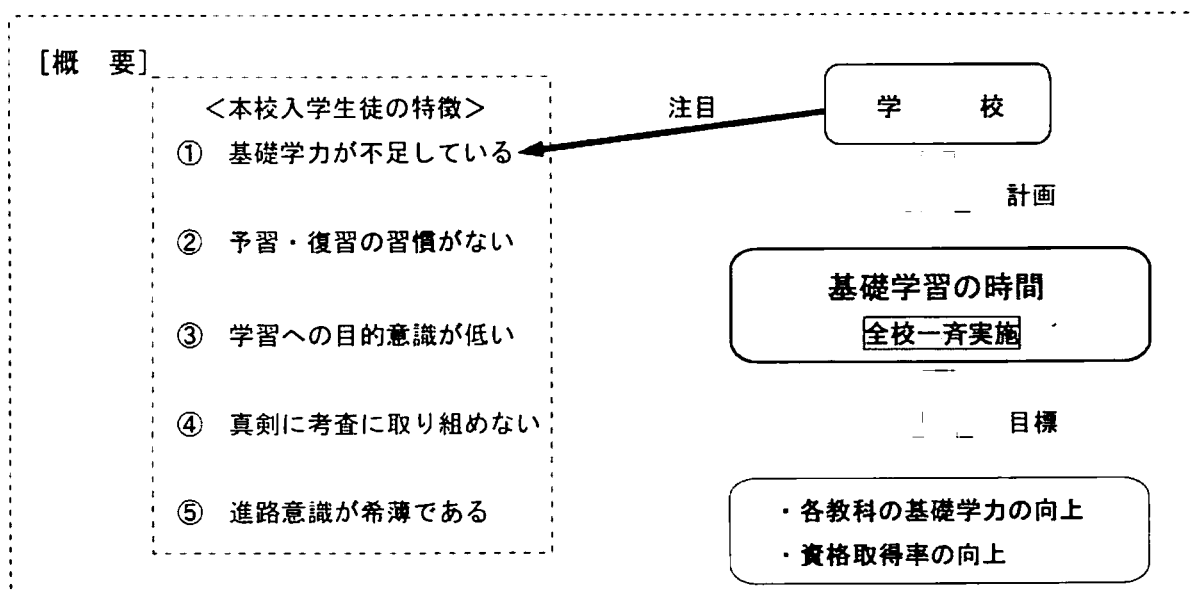
【2日目】

～ 8:00 起床、朝の集い、清掃、退所準備
8:00～8:45 朝食
8:45～10:15 英語
10:30～12:00 数学
12:00～13:15 昼食・休憩
13:20～15:00 国語
15:15～16:45 質問等(大学生を囲んで)
16:45～17:00 清掃
17:00～17:15 退所

成果と課題

- 家庭学習の習慣が定着していない生徒にとって、2日間、真剣に学習に専念する勉強合宿は、貴重な体験となっている。
- 大学生活の様子、将来の夢、学部の情報など、大学説明会とは違った視点による情報を、現役の大学生や大学院生から得ることができる。
- 生徒と年齢が近く、最近、大学入試を経験した大学生から、その勉強方法や合格体験談を聞くことは、自分自身の取組みと比較しながら、学習意欲を高めることにつながる。
- 高大連携による勉強合宿を継続していくためには、高校、大学の両者にとってメリットがあることが望ましいが、教員をめざす教育学部の大学生にとっても、実際に生徒への学習指導を体験できる、高校の現状や課題について情報を得られるという利点がある。
- 課題としては、講師として招く大学生との日程調整、経費等の問題がある。

進路実現に向けて、全校生徒による放課後の基礎学習を実施し、資格取得の奨励と技能審査による単位認定を行う



学力の向上を図るため、毎日、10分の朝読と20分の基礎学習に、生徒全員で取り組む

本校は、全校生徒60人の全日制普通科高校である。以前は、大部分が就職希望者であったが、近年は進学希望者の割合も増加してきている。しかし、学習に関しては「読・書・算」に代表される基礎学力の低下が年々進行している。そこで、平成14年度から、生徒が自ら選定した本を毎朝10分程度読む「朝読」や、毎日放課後20分間の「基礎学習」に、生徒全員で取り組むこととした。

学習面に関して、本校の抱える問題点を整理すると以下ようになる。

- ・ 基礎学力が定着していないため、授業内容が十分理解できない。
- ・ 予習・復習の習慣が身に付いていない。
- ・ 学習への目的意識が低く、課題等の提出期限が守れない。
- ・ 定期考査が近づいても勉強する姿勢が見られない。
- ・ 進路に対する意識が希薄である。

これら5つの問題点について、基礎学力の定着がすべての解決につながるという仮説に基づき、具体的な指導内容と方法を検討し実施した。

年度ごとに基礎学習の指導方法を立案・実行し、年度末に点検・改良する

「基礎学習」の指導内容や指導方法については、前年度の反省を踏まえながら、毎年改良を加えてきた。

◆平成14・15年度の指導方法

平成14・15年度は、数学の「基礎学習」を週5日指導した。

まず、年度当初に基礎学力判断テストを行い、その成績と本人の希望を考慮して、習熟度別のクラス分けを行った。クラス分けについては、数学検定5級程度の学習をする「Aクラス」、数学検定4級程度の学習をする「Bクラス」、数学検定3級程度の学習をする「Cクラス」とした。

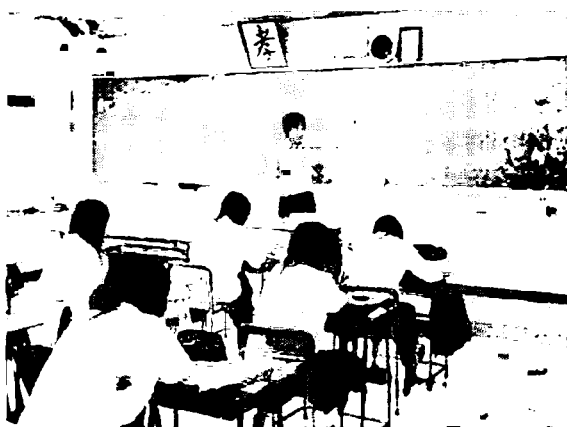
それぞれのクラスに応じた問題をプリント形式で出題し、年間で計2回、同一の問題を演習・解

答させ、内容の定着を図った。

また、必要に応じて、学習内容に関する講義も行ったが、B及びCクラスの講義を含む指導は主に数学科教員が担当し、Aクラスの講義等は他教科の教員が担当するなど、全教員の協力体制の下、指導を展開した。

運営上の問題としては、毎日放課後、全教員が各教室で講義と演習指導、採点を実施するため、特に数学科以外の教員の負担が大きかった点があげられる。

また、数学力の向上には国語の文章読解力も必要であり、さらに英語に関しても基礎学習を行う時間が必要であると考え、これらの科目を指導内容に加えることを検討した。



基礎学習「数学」の指導風景

◆平成16年度の指導方法

平成16年度は、数学（週3日）、国語（週1日）及び英語（週1日）の指導を行った。

以下は、各科目の実施内容である。

数学

前年度と同様の方法で、習熟度別のクラス分けを行った。運営方法としては、初日に講義、二日目に講義内容に関する1回目の演習・解答、三日目に質疑応答も含めた2回目の演習で締めくくるスタイルにより、すべてのクラスで行った。また、講義については、全クラスとも数学科の教員が行い、基礎・基本の理解と定着を確実に図るよう心掛けた。

なお、他教科の教員は演習時の採点のみを担当し、前年度までの負担軽減に努めた。

国語

本人の希望を考慮し、漢字の読み書き及び漢字検定受験に向けての習熟度別クラス分けを行った。

まず、クラス分けについては、基本的な常用漢字の読み書きを学習する「基礎クラス」と、高度な常用漢字の読み書きと漢字検定合格に向けての演習を行う「検定クラス」とした。

漢字検定の受験希望者は、原則として、自分の受験希望級の問題集を購入し、学習を進め、国語科教員が指導する。

また、漢字検定を受験しない者については、授業に関するプリントを演習し、他教科の教員が指導する。

英語

本人の希望を考慮し、基礎的な単語の読み書き及び英語検定受験に向けての習熟度別クラス分けを実施した。

クラス分けについては、英語検定の到達目標に沿った演習を行う「検定クラス」と、基礎的な単語の読み書きを行う「基礎クラス」とした。

検定受験希望者は、原則的に自分の受験希望級の問題集を購入し、学習を進め、英語科教員が指導する。

また、単語練習の者は、基礎的内容の単語について演習し、他教科の教員が指導する。

複数科目を導入したことで、教員、生徒ともに、目先が変わり取り組みやすくなった。また、数学に関しては数学教員による講義を展開したことで、内容に対する生徒の理解度が向上した。

しかし、科目ごとの学習時間が減少したことにより、基礎的な計算能力の定着は、前年度までに比べると、やや不十分であった。

さらに、担当科目が増加したことにより、当該教科の担当者をはじめ、他教科の教員の負担も依然として大きかった。

◆平成17年度の指導方法

平成17年度は、前年度の数学・国語・英語に加

え、一般常識・パソコン・資格取得課外・進学課外を実施した。

各科目の実施状況については、以下のとおりである。

1・2年生

自らの達成度に応じた数学・国語・英語の演習問題・パソコンの基礎技術(ワープロ等)に取り組ませる。

3年生

自らの進路希望に応じた「進学課外」または「一般常識問題」に取り組ませる。同時に資格取得希望者は検定課外を受講することも可能とした。

数学・英語・国語及び資格取得・進学課外については前年度までと同様、各教科担当が問題を作成し、講義・演習・採点等は全教員で担当する。なお、パソコン指導は商業科教員が担当し、ワープロ・表計算・パワーポイント等、通常授業において即座に対応できるスキルを身に付けさせることを目的に実施した。



基礎学習「パソコン演習」の学習風景



基礎学習「進学課外」の学習風景

数学

基礎クラスにおいては、20分のうち、15分はプリントを用いての講義及び演習を行い、残り5分で小テストを実施するというスタイルをとったが、講義の後に小テストを実施することで、計算問題については、昨年度に比べ定着率は向上した。

しかし、出題数が多く、時間が足りないこともあった。

学期末の学力定着度を確認するテスト結果(表Ⅱ-5-①参照)では、全体的に正解率は高かったものの、依然として小数や分数の基礎・基本的な計算でミスをする生徒もみられた。また、文章問題で問題の意味を理解していない生徒も目立った。

英語

基礎コースでは、中学校で学習する基礎的な単語学習を行ったが、毎時間の設問のうち、3割は前時の演習問題を抽出して出題し、学習内容の定着を図った。

検定コースでは、各自が受験する級の問題集に取り組ませた。家庭でも同様の学習に取り組むよう課題も準備した。

学期末の学力定着度を確認するテスト結果(表Ⅱ-5-②参照)では、中学校で学習する範囲で出題したところ、2年生の正解率が1年生を上回った。これは、昨年度の基礎学習の成果であると考えられる。

しかし、今年度の出題内容については、定着率の低さが目立った。

表Ⅱ-5-① 学期末確認テストのコース別正解率(数学)

	基礎Ⅰコース (17人) 正解率	基礎Ⅱコース (15人) 正解率	検定コース (4人) 正解率
1年	70%	85%	
2年	91%	84%	68%

表Ⅱ-5-② 学期末確認テストのコース別正解率(英語)

	基礎Ⅰコース (18人) 正解率	基礎Ⅱコース (12人) 正解率	検定コース (6人) 正解率
1年	55%	78%	50%
2年	73%	92%	73%

卒業までに修得させる単位として「技能審査による単位認定」を導入する

「基礎学習」の時間帯に実施している資格取得について、生徒の意欲の向上を図るため、本県の公立高等学校では初めてとなる、卒業までに修得させる単位としての「技能審査による単位認定」を導入した。

◆ねらい

- 生徒の学習意欲を高め、優れている能力を一層伸ばす。
- 資格取得で進路選択の幅を広げる。
- 関連する科目の授業内容をより深く理解させ、成績を向上させる。

◆運用及び実績

技能審査によって認定された増加単位を、本校の卒業要件単位である74単位の修得に新たに加える。

平成16年度は単位認定に該当するレベルの資格を取得した生徒は4人であり、過去最高となった。

「基礎学習」の効果を検証するため、アンケートによって生徒の意識を把握する

◆自己評価(学力面)

- ・学力が向上した・・・75%
- ・学力は変わっていない・・・25%

◆生徒の感想(平成15～17年度抜粋)

- ・基礎学習をすることで、今まで分からなかった問題が分かるようになった。
- ・計算事務のそろばんの効果もあって、計算力が上がったと思う。
- ・計算が速くなった。授業で難しい問題も解けるようになったのは、基礎学習で鍛えられたからだと思う。
- ・苦手な部分はまだ残っていて、それを克服できていないのが残念である。

◆教員の感想(平成15～17年度抜粋)

- ・算数の初歩から理解できていない。実生活に即した事例を提示しないと、なかなか頭の中でイメージできない。
- ・数学的用語(立方体・辺など)を含め、問題文そのものの意味が十分に理解できていない。
- ・計算の正確さやスピードが十分でない。
- ・最低限、四則計算はマスターさせたい。
- ・学習態度は非常に良く、集中して取り組んでいた。
- ・単純な計算についての基礎学力は向上がみられる。(加減乗除、九九 等)

成果と課題

- 当初、放課後に実施する「基礎学習」については、生徒がまじめに取り組まないのではないかと、いう不安があったが、実際には前向きに取り組む生徒が非常に多く、本校の学習指導として定着した。
- 「基礎学習」は、毎日実施するため、平素の学習態度に良い影響を与えていると考えられる。
- 年度当初と年度末の到達度確認テストの結果を比較すると、わずかであるが学力の伸長がみられた。
- 「基礎学習」の準備に携わる教員の負担が大きい。また、生徒側も放課後の時間が過密となり、他の活動に支障を来す者もいる。

Ⅲ章 総合的な学力をどのように育成するか

- 1 学習の基盤となる習慣・規律をどのように形成するか
- 2 読解力をどのように向上させるか①
- 3 読解力をどのように向上させるか②
- 4 表現力をどのように向上させるか①
- 5 表現力をどのように向上させるか②
- 6 総合的な学習の時間をどのように展開するか①
- 7 総合的な学習の時間をどのように展開するか②



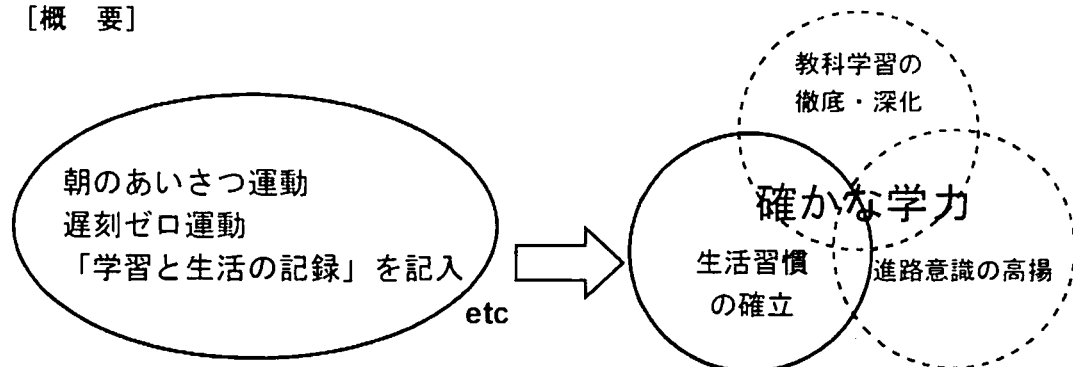
「課題研究」でのディベート



「総合的な学習の時間」の研究発表会

「遅刻をしない」「日々の記録をつける」など、ごく身近で、習慣化できることから学習意欲の高揚を図る

〔概要〕



1日の始まりの大切さを意識させ、授業へのスムーズな導入を図る

本校では、過去、遅刻者が多く、始業チャイムが鳴っても平気で遅刻し教室に入るなど、1日の始まりに対する意識が希薄で、1時限目の授業にも支障を来す時期があった。この状況を改善するため、6年前から生徒の発案による「遅刻ゼロ・あいさつの励行」運動を開始した。

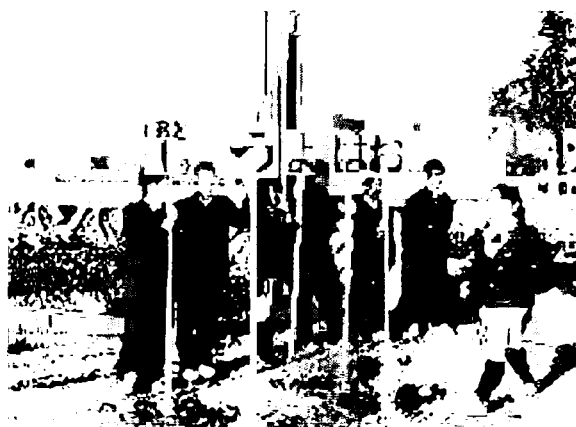
3年前に、本事業の指定を受けるに当たって、学力向上のためには、1日の開始を大切にすること意識や校内での明るい雰囲気づくりが欠かせない要因であると考え、これまでの取組みを継続しながらも、さらに深化させることを考えた。

従来の取組みは、毎朝、生活委員5～6人が校門であいさつの声かけをし、その傍らで教員2人が立番をし、さらに、毎月9の付く日には生徒会役員も加わり遅刻ゼロを呼びかけるといった形のものであった。熱心な活動により、遅刻については減少傾向にあったが、職員室の教務黒板に示されるのは遅刻者数のみで、誰がどういう理由で遅刻したか、いつ登校したかはわからないまま授業を受ける、さらには所在不明の生徒がいてもリアルタイムの状況がわからないなどの問題が生じた。従来のハード面の活動を維持しつつも、生徒指導

上の問題の未然防止を含め、遅刻の根本原因を断つことや遅刻をさせないための工夫が必要になってきた。

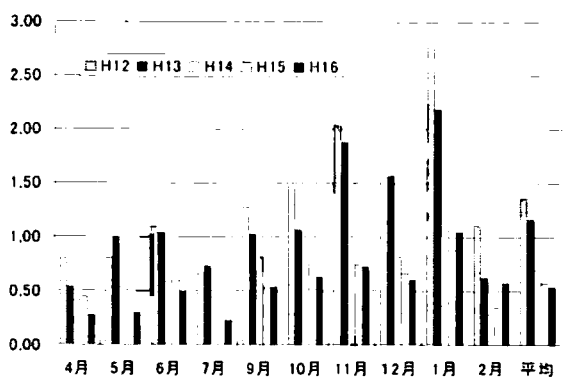
そこで、昨年度から新しく「出席状況板」「連絡メモ」を導入し、遅刻・欠席者はもちろんのこと、連絡のない生徒をすべての教員が把握できるようにした。また、遅刻生徒は従来直接教室に入っていたが、いったん職員室に出向き、登校の確認を受けさせることとした。

従来の生徒主体の活動と新しい企画の協同により、次のような成果を得た。①朝の時点で所在不明の生徒をゼロにし、1時限目からきちんとした授業体制を整えることができた。②朝のホームルーム直後の担任の素早い対応や家庭との連携が可能となり、怠慢を主たる理由とする遅刻常習者が減少してきた。



校門での「朝のあいさつ運動」

(三)



「遅刻ゼロ運動」を開始した翌年から効果は出始め、平成14年度は年平均値0.7人（1クラス・1日あたりの遅刻者数、以下同様）まで減少していたが、研究開始の平成15年度は0.57人と大幅に減少し、平成16年度も0.55人、今年度は7月現在の比較で0.23人（平成15年度は0.5人、平成16年度は0.33人）と減少し続けている。始業チャイム時には校門付近に生徒の姿がほとんどなく、意識が確実に高まっている。

「あいさつの励行」については、従来どおり生徒の声かけが根気強く行われているが、昨年度から生徒部の担当者も毎朝加わり、あいさつ励行を呼びかけた。今は、このように自発性を引き出すために生徒が生徒に呼びかけをするという地道な活動を毎朝欠かさず熱心に行っている。

「学習と生活の記録」をつけることにより、
学習習慣の大切さを意識する

本校は研究指定校となった3年前、学習に対する生徒の意識を把握するため、実態調査を行った。その結果、ほとんどの生徒について、日常の家庭学習時間が確保されていないという実態が浮かび上がった。そこで、学習時間の確保を目的とした日々の生活習慣の改善及び学習に対する意識改善を図ることを目的に、「学習・生活の記録」をつけさせる試みを始めた。これは図Ⅲ-1-②のとおり、1週間分の教科ごとの予習・復習の実施時間や宿題実施状況の記録、土・日の生活状況を記録し、その反省を自己変革に役立てるものである。

対象は研究最初の年度は1年生のみとし、翌年からは全校生徒とした。記録後の指導や活用については、担任の裁量に任せることとした。

本校は、学習意欲のある生徒の学力向上を目的とした「学力養成クラス」を設置している。このクラスでは、記録記入をこまめに実施している。熱心な指導を続けた結果、平日におけるクラスの平均学習時間が約30分伸びた（5月と11月を比較）という実績も出てきた。学習に対する姿勢が良くなり、進路実現への取り組みも積極的になっている。

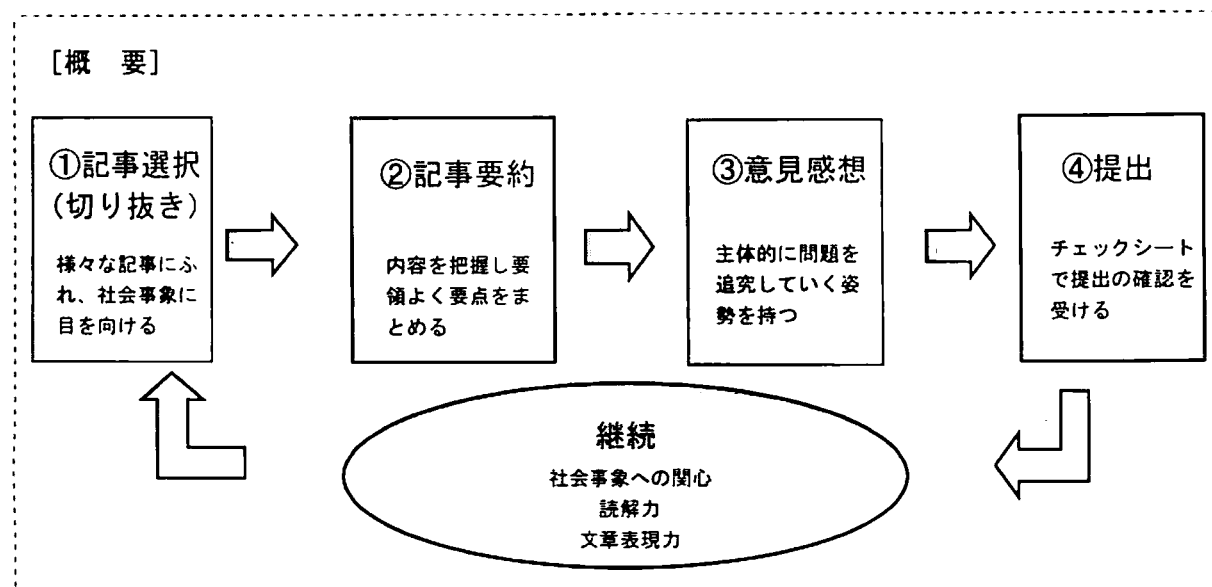
図Ⅲ-1-② 学習と生活の記録（記入例）

○日 (金)	宿題はありましたか?	宿題をやりましたか?	国()h	数(1.5)h	英(1)h	理()h	社()h	その他(2)h	合計	感想・反省																																																																																																																																																																
	はい いいえ	はい いいえ	・予習・復習 ・読解集・塾 ・その他()	・予習・復習 ・読解集・塾 ・その他()	・予習・復習 ・読解集・塾 ・その他()	・予習・復習 ・読解集・塾 ・その他()	・予習・復習 ・読解集・塾 ・その他()	・ピアノ ・読書 ・その他()	(4.5)h	今日、宿題ができなかったので明日しようと思う。																																																																																																																																																																
時	午前												午後												夕												夜																																																																																																																																					
日(理)	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12																																																																																																																														
△日 (土)	睡眠	朝食他	学校生活												余暇												復習												食事入浴他												数学演習問題												英語下段												睡眠												暇												1.0h												1.3h												3.0h												0.3h												0.4h												6.0h											
	反省 実力テストが近づいた。古典文法の習理、確認をこの機会にやろう。																																																																																																																																																																									

成果と課題

- 遅刻が確実に減少し、1 時限目の導入がスムーズに行われるようになった。
- 生徒、保護者とも学校の始業への意識は確実に高まっており、その意識は、始業以後の学習や活動の意欲にもつながっていると思われる。
- あいさつの励行が広まっており、あいさつを交わす生徒が増えてきたことで、校内の雰囲気もよくなっている。
- 始業直前に登校する生徒も依然としてみられるので、余裕をもって登校させる工夫を講じる必要がある。
- 始業前の学習に取り組む姿勢を育む方向への移行を図る方策の検討が必要である。
- 「学習と生活の記録」を記入する習慣の確立とその効果的な活用が課題である。

国語科、地歴・公民科が共同で新聞記事の要約に取り組む



新聞を読んで、社会事象への関心を高めるとともに、読解力・文章表現力の向上をめざす

本校では、年3回（4月・10月・2月）にわたり、到達度テスト及び生活実態調査を実施している。その分析結果から、生徒の学習習慣が確立されていないことが、大きな問題として浮き彫りとなった。この点について、各教科で、また、教科の枠を越えて検討を行ったところ、様々な改善案が提案された。

地理歴史・公民科では、家庭での学習習慣を身に付けさせる手だての一つとして「新聞の切り抜き」を提案した。日常の教科指導の場面や、小論文などを書かせる際、生徒の社会問題への関心の低さが課題となっていたが、新聞の切り抜き作業を継続して行うことにより、時事問題に対する関心を高め、社会常識・一般教養を身に付けさせたいと考えた。

また、記事を読み、内容要約や意見を書くことにより、読解力・文章表現力の向上をねらった。課題のでき具合よりも、まずは継続して記事に触れ、文章を書く習慣を付けさせることに重点をお

いて取り組みを開始し、少しでも効果的な指導とするため、国語科とのタイアップを図った。

長期休業中の課題から定期課題へと発展させた

平成15年度の冬休みの課題として、まず1年生に対し、国語科と地理歴史・公民科で新聞切り抜きを課した。その後、1月から双方の科が隔週で課題として提出させた。次年度からは、学年進行で順次実践を拡大していった。ワークシートは図Ⅲ-2-①の形式を使用した。国語科の場合は縦書き、地理歴史・公民科の場合は横書きとした。

切り抜きの手順は次のようにした。

- ①新聞から記事を選び、切り抜いて用紙に貼る。
テーマについては特に限定しないが、スポーツ記事・芸能記事・3面記事については認めない。ただし、あるスポーツ選手にスポットを当てた特集などはよい。
- ②記事の内容を200字程度で要約する。
- ③メモ欄は、図を書いたり、関連した資料などをメモしたり、自由に使う。
- ④コメント欄に記事についての自分の意見を書く。
この学年は「総合的な学習の時間」でも新聞の

切り抜きを行っており、戸惑いはなかった。負担感も少なく、毎週ほとんどの者が提出していた。

図Ⅲ-5-① 地歴・公民科用ワークシート(横書き)

NEWSの記録 〔 〕年〔 〕月〔 〕日 〔 〕頁 〔 〕部 〔 〕名 〔 〕		記事の要約 200字程度 ※要約を要する
テーマ 〔 〕 年 月 日 出典〔例 新聞名〕 ここに記事を取り付ける(入りきらない場合は折って)		220字 ※メモ欄(図を書くなど自由に使って良い)
		コメント(自分の意見を簡単に 文-2文=40字～60字程度で)

になり、時間を取られることも少くない。今回の場合、できるだけ長期にわたって生徒に作業させることを主眼としており、負担のかから

ない次の方法をとった。

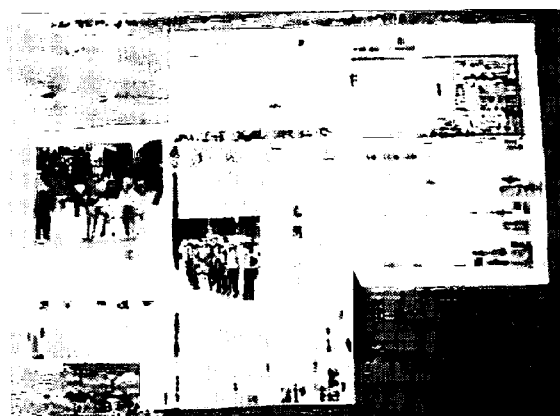
- ①クラスに提出用トレイを用意し、毎週末までに、できた者からそこに提出する。
- ②代議員は、週末の点呼終了後、出席番号順に並べ替え、提出チェック表(厚紙に名票を貼ったもの)に記入し、担当教員に提出する。
- ③担当教員は、チェック表と提出物を照合し、検印を押して月曜日に返却する。

長期継続をめざし、回収・チェック方法を工夫する

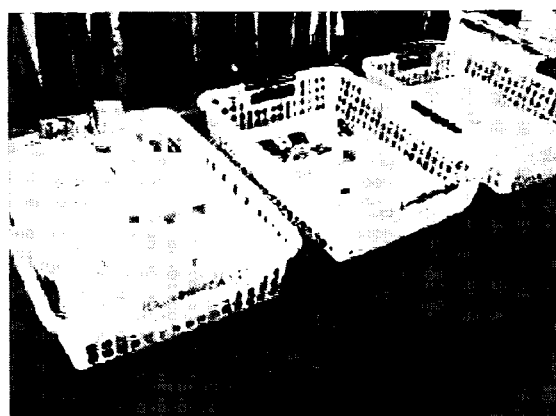
地理歴史・公民科、国語科それぞれで、提出状況を評価に反映させる。

- ④返却後は、「総合的な学習の時間」用のファイルに保存させる。

生徒に課題を与えた場合、その後の処理が煩雑



生徒の作品例

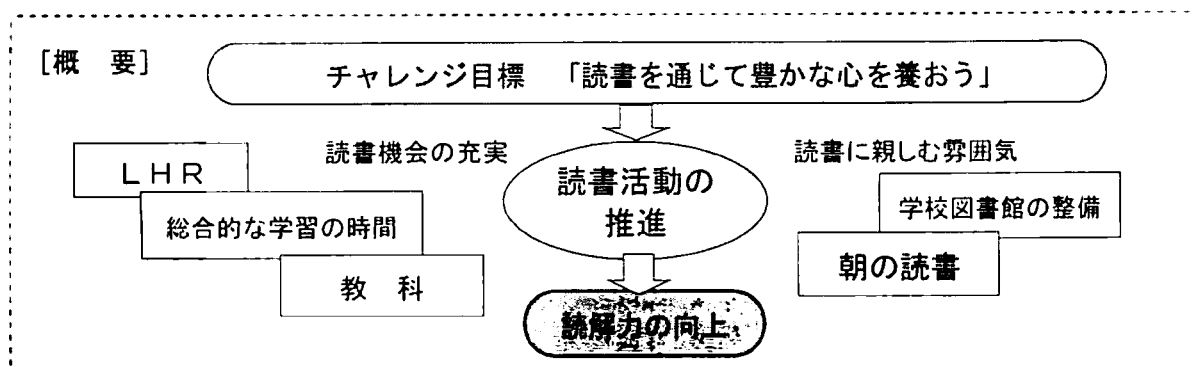


提出用トレイ(各クラスごと)

成果と課題

- 継続的な取組みにより、少しずつ社会事象に対する関心が高まり、生徒の選ぶ記事の内容に変化がみられ、安易な選択が減少してきた。
- 「文章を書く」という作業に慣れさせることができた。
- 3年間の継続的な取組みにより、以前と比較して、コメントの内容が質の高いものとなった。また、記事に対して、自分なりの意見を表現できるようになってきた。
- 新聞の切り抜きに対して消極的な生徒に対する指導が課題となっている。
- 新聞の切り抜きを出発点とし、これをより発展的な取組みにつなげていく方策の検討が必要である。

「豊かな心」「読解力」の涵養をめざし、読書活動を推進する



学校のチャレンジ目標として「読書」を掲げる

本校生徒の多くは、一部の読書好きの生徒を除き、概して「食わず(＝本を読まず、本を選ばず)嫌い」である。例えば、昨年度の本校図書館の貸出冊数は一人あたり0.7冊と少ない。また、「朝の読書」については、本さえ用意していない生徒も多かった。

このような生徒たちにとって、読書に親しむ姿勢の習慣化をめざすことは、豊かな心を養うと同時に、読解力をつけるための第一歩としても有効である。そこで、図書課では、「読書を通じて豊かな心を養おう」というチャレンジ目標の達成を支援するための具体的な方策について検討した。以下は、そのうちの一部である。

- ・ 図書委員会を中心とした、「読書しない人間ゼロ運動」を提唱すること。
- ・ どの生徒の好みにも対応できるよう、学校図書館の図書の種類を増やすこと。
- ・ 学級文庫を設置し、いつでも本が手に取れるような読書環境を整備すること。
- ・ LHRでの読書指導を支援すること。

「朝の読書」の活性化に取り組む

「朝の読書」については、昨年度は朝のホームルームでの連絡に費やされる時間との区別が明確でなかったため、すべてのクラスで毎日実施する

ことは難しかった。

この反省をもとに、教務課主導により、朝のSHRの5分間を必ず読書に充てることとしたため、読書に取り組む時間は、昨年度に比べて確保できている。

また、1学年では、多くの生徒が中学校で「朝の読書」を経験しているため、その習慣を持続できている。他の学年でも、連絡事項の少ない日に読書時間を7分、8分と延ばせば、生徒が読書に集中しやすいという手応えが感じられ、「朝の読書」については、「短時間でも毎日少しずつ継続すること」の効果が出つつあるものと思われる。

しかし、一方で、朝のSHRは、担任がクラスの生徒と接することのできる貴重な時間であり、読書以外のことに取り組みたいとの声も上がっている。また、各学年とも漢字テストや英単語テストを週に1・2回は行うため、「朝の読書」は毎日実施できない。今後も、教員からの具体的な意見を把握し、校時の変更など、改善すべき点を検討することが必要である。

LHRで「読書のすすめ」「一斉読書」を行う

LHRにおいては、「読書のすすめ」と称する時間を、1学期中間考査終了後に、各学年とも1時間ずつ設けた。

「読書の効用」についての紹介、学校図書館に入った話題の本についての「ブックトーク」「読み聞かせ」などについて、図書課が指導案を作成し、

各クラス担任が実施した。さらに、11月には「全校一斉読書の時間」を実施した。

ホームルーム活動では、読書についての主題を計画的、継続的に取り上げることが望ましい。選書指導を考慮すれば、学校図書館の充実との連携も必要となる。

「総合的な学習の時間」の最初の時間に
学校図書館オリエンテーリングを実施する

2学年の総合的な学習の時間「未来プランニング」においては、年度当初に、「学校図書館オリエンテーリング」と称する時間を設けた。

学校図書館の書架の配置や資料の利用の仕方を生徒に知らせることで、調べ学習や読書へいざなうことを目的としている。

何か調べたいことがあると、手軽なインターネットに頼ってしまう生徒が多いが、書籍を使って調べ物をする方法を知らせることで、自ら考えたり、取捨選択したりする力も育成できると思われる。総合的な学習の時間の中で、学校図書館の利用や読書を促す学習活動をさらに増やせるとよい。

国語科の授業では「読書ノート」を記録させる

国語科で指導している「読書ノート」に、生徒が記録してくる本は、映画やドラマの原作、ライトノベル、小・中学生でも読める児童書等が多く、いわゆる文学作品など読み応えのあるものに挑戦しようとする生徒はごく一部である。また、同じ作家の作品に偏っている生徒もいる。

教科の授業としては、国語科が読書ノート・読書感想文を、芸術科（美術）が読書感想画を課題として指導を行い、読書活動の推進を図っている。

また、教科の授業における学校図書館の利用は、増加している。1年次の「国語総合」の時間を使った「学校図書館オリエンテーション」をはじめ、

理科や情報、保健体育、総合的な学習の時間等の調べ学習で活用されている。

将来は、各教科の「授業担当者」と「司書教諭」とで、学校図書館におけるティーム・ティーチングにも取り組みたいと考えている。

利用しやすい学校図書館の在り方を模索する

図書委員会の活動を生かし、新刊紹介やおすすめの本紹介ポスター、図書だより等を校内に掲示し、図書館の資料の存在を広く知らせることを心掛けている。また、選書に当たって、生徒が今どんな本を必要としているか、どんな本ならば読んでみようという気になるのか、といった情報は、生徒との何気ない会話の中から得られることが多いので、些細な時間でも生徒とのふれあいを大切にするよう努めている。さらに、各教科の調べ学習に対応できるよう、教員に協力を求めて、最新かつ多岐にわたる分野の資料を購入するための情報を収集している。

授業に関する本の貸し出しを含め、学校図書館の貸出冊数は確実に増えている。特に、読書に関するLHRの後や、各教科やクラス担任の教員が本について紹介した直後は、来館者が増え、貸出数も増加するという傾向がみられる。

生徒にとっては、友人や先生など、自分の身近な存在によって紹介された本は、大いに興味を引くようである。統計上、来館者数（授業での利用者数は除く）は減っているようにみえるが、いわゆる「おしゃべり」目的の利用者は少なくなり、静かに読書する生徒が増えてきている。

表Ⅲ-3-① 学校図書館の利用状況の比較

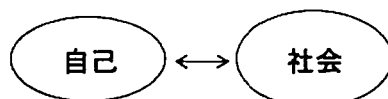
	貸出冊数	来館人数	開館日数
平16(3月)	633	4.515	155
平17(10月)	753	1.761	116

成果と課題

- 読解力の育成の準備段階として、読書は大切なものであるという雰囲気ができつつある。
- 生徒との些細なやりとりの中で、読書の大切さを伝えていくことを継続することが大切である。

小論文・ディベートに取り組んで表現力を高める

【概 要】 社会の仕組みを理解し、その問題点を見極めて、自己と社会とのかかわりについて考える。



小論文

論理的な文章で表現することにより、自分の考えを客観化し、他の人に理解してもらうための表現力を身に付ける。

ディベート

相対する考えを戦わせることで、物事の理解を深め、物事のもつ多面性を認識した上で自分の考えを確立していく。

統一テーマとテーマグループ別的小論文にそれぞれ取り組む

事前に小論文講演会を実施して講義を聴き、演習にも取り組む。

◆ 統一テーマでの小論文

全員が「環境問題」をテーマにした小論文に取り組む。

- ① テーマ理解 ② 構想
- ③ 下書き ④ 清書
- ⑤ 評価（相互・自己）

それぞれ1時間ずつ、計5時間で構成する。

◆ グループ別小論文

興味・関心の強いテーマグループを選択し、その中で自分のテーマを決めて小論文を書く。

以下に、グループ名と、生徒が書いた小論文の具体的なテーマの例を示す。

〔国際〕 国際協力は必要か

〔現代社会〕 古いものとの共存について

〔文化文明〕 若者の文化や人間関係の特徴

〔福祉〕 現在の日本の福祉の在り方について

〔教育〕 日本の教育について

〔情報・メディア〕 デジタル・デバイド

〔思想・哲学〕 自分の可能性

〔科学技術〕 著作権と科学技術

〔政治・経済〕 イラクへの自衛隊派遣について

〔医療〕 現代における医療の問題点について

指導担当で優秀作品を選び、印刷・配布し、生徒や教員の参考にしてもらう。

クラス内ディベートから始めて、学年全体でのクラス対抗ディベートで盛り上げる

ディベートについての学習を進め、まず、クラス内でのディベートを実施し、さらにクラス対抗ディベートに取り組む。

以下、その流れの概略を示す。

なお、(1)～(8)のうち(7)のみ2時間、他はそれぞれ1時間で実施する。

(1) ディベートの概要を知る

ディベート入門及び昨年度実施のビデオを見せて、ディベートの流れを理解する。

(2) 模擬ディベート

模擬ディベートを行い、各役割の生徒が原稿を読んでいく中で用語や流れの確認を行う。

(3) クラス内ディベートの準備

チームづくり、ブレインストーミングシートとリンクマップの説明を受け、それぞれ作成する。

(4) 原稿作成・シミュレーション

各チームリーダーで肯定側か否定側かを決め、立論・質疑・応答・第一反駁・第二反駁の役割及び司会を決める。リンクマップと役割に応じたシートを作成し、シミュレーションを実施する。

(5) クラス内ディベート1

机の配置を整え、フォーマットの時間割を板書して、ディベートを行う。論題は「西高はアルバイトを自由化すべきである」とした。

(6) クラス内ディベート2

前回のディベート担当と審判担当を入れ替えて実施する。

(7) クラス対抗ディベート

武道場・体育館・学校図書館を利用し、トーナメント形式で実施する。

2時間続きの時間割を組む。

論題は、次の中から事前に決定した。

- ① 日本は夫婦別姓を認めるべきである。
- ② 日本は炭素税を導入すべきである。
- ③ 日本は原子力発電所の新規建設を止めるべきである。
- ④ 日本は死刑制度を完全廃止すべきである。
- ⑤ 日本は外国人労働者を受け入れるべきである。

(8) クラス対抗ディベート決勝戦

予選を勝ち抜いた2チームで決勝戦を行い、2年生全員でディベートの学習を締めくくる。

論題は「日本は安楽死を法的に認めるべきである」であった。



クラス対抗ディベート決勝戦(1)



クラス対抗ディベート決勝戦(2)

成果と課題

【小論文】

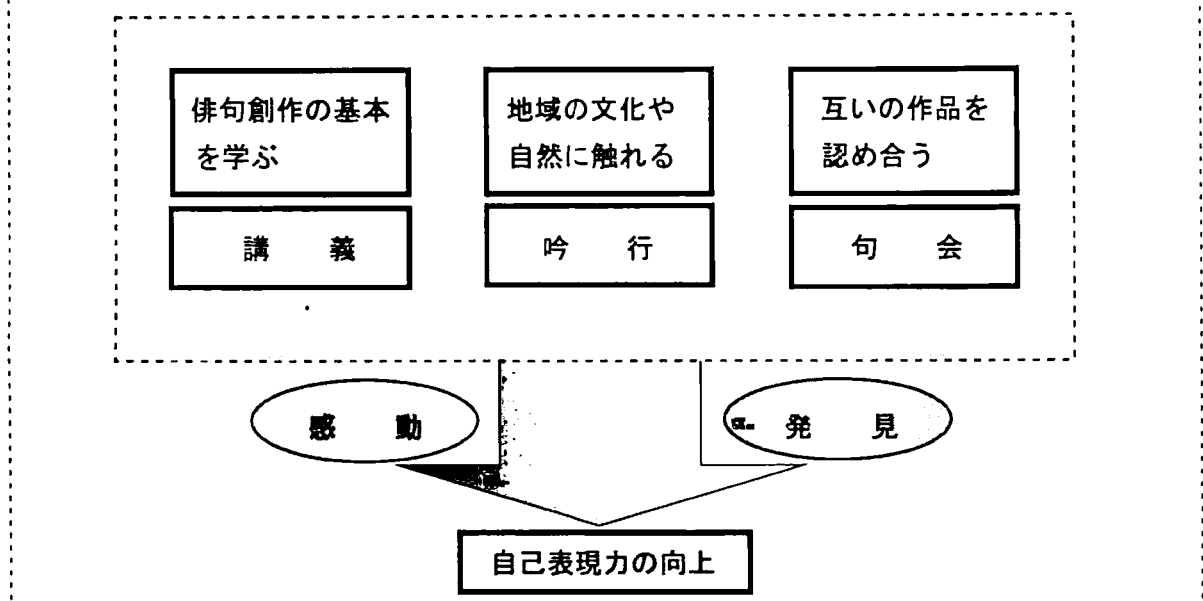
- 自分の考えを論理的な文章でまとめるための基礎・基本を学ぶことができた。
- 平成16年度のアンケートで、「ためになった」「ややためになった」と答えた者が7割程度おり、多数の生徒が「小論文」に関する学習の意義を感じている。

【ディベート】

- 当初は、戸惑いを感じる生徒もみられたが、次第に盛り上がり、その難しさを乗り越えて、「楽しかった」と答えた生徒が多かった。
- 「資料準備の大切さ」「反対意見を予測する想像力の必要性」「相手の反論に素早く対応することの難しさ」「自分とは異なる見方の多さ」等を学ぶことができたという、生徒の意見や感想を得た。
- ディベーターとして参加できない生徒がおり、クラス内ディベートでは、全員がディベーターとして発言できる場がつかれるように計画する必要がある。

外部講師と国語科教諭のチーム・ティーチングによる 俳句の創作指導を通して、表現力向上に取り組む

【概 要】 外部講師と国語科教諭のチーム・ティーチングによる俳句の創作



ことば選びをとおして、ことばについて考え、
自己を表現する力を身に付ける

俳句創作のためのことば選びをとおして、ことばについて考え、自らの思いをことばで表現する力を身に付ける。また、自己のもつ感性を生かした俳句創作を行う。

具体的な取組みとしては、普通科2年生対象の「国語表現Ⅰ」の授業の中で、以下の①～⑦の指導を行っている。外部講師と国語科教諭とのチーム・ティーチングにより、実践的できめ細かい指導を行う（指導計画の詳細は別表のとおり）。

- ①国語科教諭による俳句創作事前指導
- ②夏季休業中の俳句創作課題
- ③外部講師による②の作品の添削
- ④外部講師と国語科教諭による俳句の基本指導
- ⑤外部講師と国語科教諭の指導による吟行
- ⑥外部講師と国語科教諭の指導による句会
- ⑦国語科教諭による継続指導

サポートバンクを活用して、地域の指導者を
招き、俳句創作の基本を学ぶ

山口県学校サポートバンク制度を活用し、地域在住の優れた指導者を招へいすることにより、実践的に俳句創作の基本を学ぶことができる。

地域の文化や自然に触れ、自己表現の素材に迫る

本校のある町は、古い歴史や文化、美しい自然に恵まれている。

このような条件を生かし、吟行により俳句の題材を地域に求めることによって、自らの生きる世界を見つめ直し、地域への理解を深める。

互いの作品を認め合い、次の表現へと自己を導く

句会でお互いの作品を吟味し合い認め合う中で、次の表現へと繋がることばの力を育む。

大会への応募等により創作の成就感をもたせる

◆俳句創作事前指導

夏季休業前の授業において、俳句創作に関連したビデオ視聴などを取り入れ、俳句を創作するための基本指導を行っている。

◆俳句創作課題

2学期の授業に備え、事前指導の内容を踏まえて、夏季休業中に俳句を創作させる。提出された俳句は外部講師に添削していただく。

◆俳句大会への応募

授業で創作した俳句は、毎年山口県俳句大会に応募する。

これまでに多くの生徒の作品が入選している。

〔生徒作品〕

君の顔うつしだしたる大花火

(平成16年度教育長賞受賞作品)

晴天に黒髪なびく秋の風

鯉の背の水面で遊ぶ紅葉かな



授業風景

成果と課題

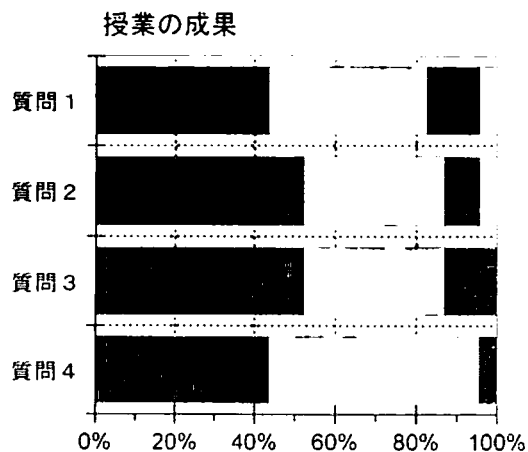
- 外部講師の専門的指導により、生徒の創作意欲が高揚した。
- 吟行の実施により、表現することへの興味・関心が一層喚起された。
- 反復指導により、基礎的な知識や技能が定着した。
- 「国語表現Ⅰ（普通科2年生）」以外の講座での実施を検討する必要がある。

【授業を受けた生徒の感想】

- ・俳句のポイントが分かりやすく、授業が楽しかった。
- ・吟行を行い、秋の素晴らしさを感じ取ることができた。

【数値データ】

俳句創作時に実施した「授業の成果について」のアンケート集計結果



【質問】

- 質問1 必要に応じてノートを取ったりメモを取ることができた。
- 質問2 積極的に俳句の創作に取り組むことができた。
- 質問3 俳句の基本原則が理解できた。
- 質問4 基本原則を踏まえて俳句を創作することができた。

【回答】

- A よくあてはまる
- B ややあてはまる
- C あまりあてはまらない
- D あてはまらない

【別 表】

[評価規準および学習計画（指導と評価の計画）]

	関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	知識・理解
内容のまとまりごとの評価規準 国語表現Ⅰ	・国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。	・自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。	・自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切かつ効果的に文章に書く。	・表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身につけている。
題材・単元の評価規準	・俳句について積極的に理解しようとしている。	・他者の作品や自分の作品に関して、相手を尊重しながらお互いが向上するための建設的な話し合いを進めている。	・俳句の表現効果について吟味したことを自分の創作に生かしている。	・俳句の特質を理解している。
	・積極的に俳句の創作に取り組んでいる。		・語句を正確に記し適切に用いている。	・表記や語句、語彙の知識を身につけている。
学習活動における具体の評価規準	① ノートを取ったり、必要に応じてメモを取ったりしている。	① 自分の意見を簡潔に発表することができる。	① 基本原則を踏まえて俳句を創作している。	① 俳句の基本原則について理解している。
	② 積極的に俳句の創作に取り組んでいる。	② 他者の意見を正確に聞くことができる。	② 俳句を記すに当たって、語句を正確に記し用法も適切である。	② 俳句に用いる語句の意味・用法などを理解している。
評価方法	・ワークシート ・自己評価表 ・発表内容 ・ノート ・作品 ・活動状態 ・定期考査			
努力を要すると判断される生徒への手だて	・生徒の言動や表情を観察し随時援助する。			

学習計画（指導と評価の計画）

時	学習内容・学習活動	関	話	書	知	評価方法 ○努力を要すると判断される生徒への 手だて
1	1 単元の学習のねらいを理解する。 2 俳句の基本原則を確認する。	① ① ①				・活動状態 ①・発表内容 ①・自己評価表 ①・定期考査 ・ノート ○生徒の言動や表情を観察し随時援助する。
2	1 吟行の目的や方法・留意点について理解する。 2 学校周辺で吟行する。	② ②	① ① ①	① ① ①		・活動状態 ・創作した作品 ・自己評価表 ○生徒の言動や表情を観察し、随時援助する。
3	1 前時に引き続き吟行する。 2 図書館の資料を参考にして素材を吟味する。 3 俳句を創作しワークシートに記入する。	② ② ②	① ② ①	① ② ①		・活動状態 ・ワークシート ・創作した作品 ・自己評価表 ○生徒の言動や表情を観察し、随時援助する。
4	1 本時の学習のねらいを理解する。 2 添削された生徒作品を用いて俳句の基本原則や表現技法を理解する。 3 他者の作品に触れ、感想を発表する。	① ① ① ①		① ① ① ①		・活動状態 ・発表内容 ・自己評価表 ・ノート ○生徒の発言状況や表情を観察し、随時援助する。
5	1 前時に引き続き添削された生徒作品を用いて俳句の基本原則や表現技法を理解する。 2 他者の作品に触れ、感想を発表する。	① ② ① ① ① ①	② ① ② ② ② ②			・活動状態 ・発表内容 ・自己評価表 ・ノート ○生徒の発言状況や表情を観察し、随時援助する。
6	1 添削された自分の作品を用いて俳句の基本原則や表現技法を理解する。 2 前時と本時の学習活動を受け、ふりかえりをワークシートに記入する。	① ② ① ① ①	② ① ① ① ①			・活動状態 ・ワークシート ・自己評価表 ・ノート ○生徒の発言状況や表情を観察し、随時援助する。

「産業社会と人間」との連携を図る「総合的な学習の時間」の効果的な指導法の創造に取り組む

【概 要】 ◆「未来プランニング」のねらい

- （自らのライフプランに基づき）自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- （個人研究、グループ研究、研究成果の相互評価をとおして）学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、（未来に向けた）自己の在り方生き方（＝主体性）、（集団の中における自己の在り方生き方＝協調性）を考えることができるようにする。

※（ ）以外は学習指導要領から



「未来プランニング」の構造

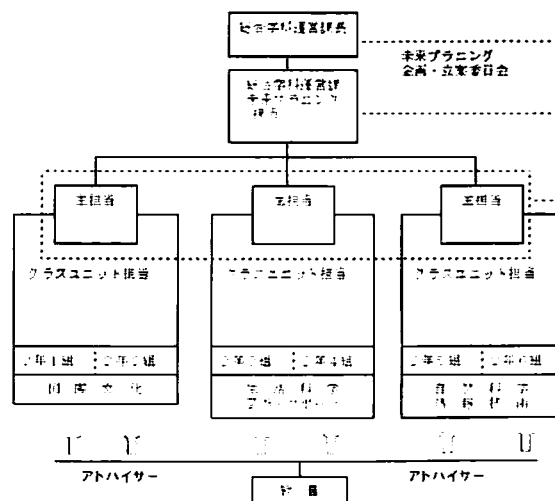
「未来プランニング」って何？

本校では、「総合的な学習の時間」の趣旨を生かし、生徒にとって有益な学習活動とするため、2年次（2単位）、3年次（1単位）で実施する「総合的な学習の時間」（以下「未来プランニング」と称す）と、1年次の科目「産業社会と人間」とを連携させた、3年間の長期的・継続的な進路指導を実施できるシステムを構築した。この「未来プランニング」を実施する中で、問題解決能力及び自己表現能力の育成を含め、総合的な「学習力」の向上を目指して実践を重ねてきた。

なお、本校の「未来プランニング」は、カリキュラム編成上、2クラスが同一時間帯で実施せざるを得ない状況が生じている。つまり、当該学年生徒の一斉指導ができないというデメリットがある。しかし、それを前提に実施計画を作成し、工夫しながら効果的な学習活動ができるように取り組んできた。

未来プランニングの指導は全校体制で取り組む

- 進路希望別に編成した2クラス（およそ80名）ずつを「クラスユニット」と称す。
- 各クラスユニットは、正副担任及び学年の総副担任をあて、4～5名を各クラスユニットの担当とする。各クラスユニット担当者のうち1名を主担当とし、総合学科運営課・未来プランニング担当とともに、年間指導計画に即して、個々の企画・立案にあたる。
- 上記の企画・運営にあたる組織を未来プランニング企画・立案委員会と称す。

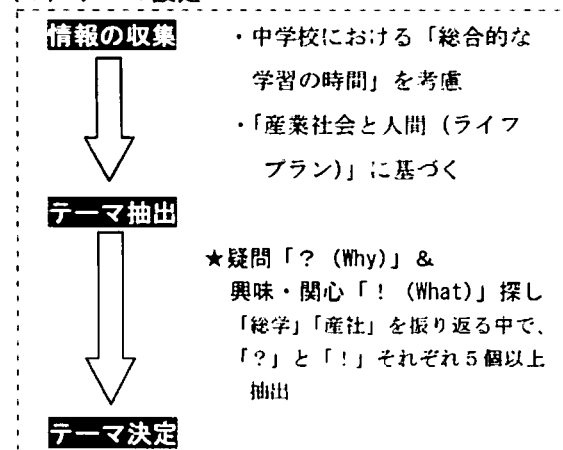


- 研究を進めるにあたり、調べ方や研究方法について専門的な指導・助言を行うアドバイザーは、生徒5～6名を担当し、指導は放課後等を利用して行う。学習評価については、評価規準に基づき、クラスユニット担当者及びアドバイザーが行い、学年会で最終決定する。

最初に、「個人ミニ研究」に取り組む

◆「個人ミニ研究」における指導法と実施状況

(1) テーマ設定



(2) 調査研究…図書・インターネット・新聞

(3) 成果発表…モノシート（レジュメ）を利用した発表

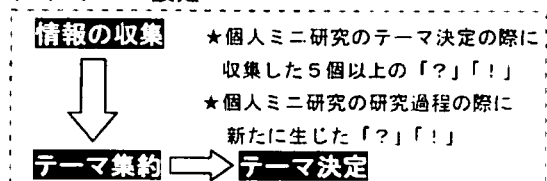
【実施状況】

- ・テーマは、自由発想法を適用して設定。
- ・クラスユニットごとに、生徒のテーマに対応できるユニット担当者が指導。
- ・「未来プランニング」授業時及び放課後に図書室やコンピュータ教室を利用して情報収集を行った後、ワークシートを使ってまとめ作業を実施。
- ・クラスユニットごとに発表会を実施。
(プレゼンテーションは大判用紙を使用)

次に、「グループ研究」に取り組む

◆「グループ研究」における指導法と実施状況

(1) テーマ設定



(2) 研究計画作成・グループ内役割分担決定

(3) 調査研究…図書・インターネット・新聞・フィールドワーク

(4) 成果発表…プレゼンテーションを利用した発表

【実施状況】

- ・グループは、「個人ミニ研究」の内容及び進路目標に応じてユニット担当者が編成。
- ・テーマは、ブレイン・ストーミングによるグループ討議を行い決定。
- ・クラスユニットごとに、各グループのテーマに対応できるユニット担当者が指導。
- ・「未来プランニング」授業時及び放課後に図書室やコンピュータ教室を利用して情報収集。
- ・夏季休業中にフィールドワーク（一部の生徒）を行った後、ワークシートを使ってまとめ作業。
- ・クラスユニットごとに発表会（作品提示及び実演を含む）を実施。
- ★フィールドワーク
 - 主な活動内容は、職場での体験学習及び対外的なアンケート調査。主体的に希望してきたグループに、趣旨等を申請書に記入させた後、許可証を発行している。

グループ研究の終了後、個人課題研究の前に大学等と連携した講演会や模擬授業を実施する

◆趣旨・目標

実学に基づいた知識・技能等に触れることにより、将来の自分の生き方と職業生活の関わりについて考える。また、「個人課題研究」への動機付けを新たにし、進路実現への自覚を深めていく。

◆内容・方法

各クラスユニットの特質に応じて、講演会形式や模擬授業形式など、フレキシブルな招へい計画を立てた。講師の選定及び招へいは、生徒の進路ニーズを最もよく把握している各ユニット担当者の要望に即して、総合学科運営課が行った。

この結果、11月18日～30日までのほぼ3週間にわたり、「未来プランニング」及び関係科目の授業時間を利用して、総勢45名の講師（アシスタントも含む）による講演会及び模擬授業が実現した。

生徒は自己の進路希望及び興味・関心に基づい

て2講座を受講できるようにした。開講中は、当該講座を希望していない生徒は、コンピュータ教室や図書室で課題研究を行うという方法をとった。

【実施状況】

- ・会場担当の教員を1人ずつ配置した。教員の役割は会場での出欠チェックにとどめ、講演会を生徒が主体的に受講できるようにした。
- ・受講生徒に対しては、誘導、司会、質問、謝辞といった役割を割り当てたが、事前に役割の内容を伝えただけである（生徒の主体性を尊重し、誘導時のあいさつ・司会の言葉・質問内容及び謝辞の文言指導も含め、教員による事前チェックは一切しないという方針で臨んだ）が、服装及び受講態度など、TPOをわきまえた言動が各会場で見られ、要点メモ等もきちんとまとめることができた。
- ・会場担当教員及び講師からも賛辞をいただいた。

これまでの学習成果を生かして、「個人課題研究」に取り組む

◆個人課題研究における指導法と実施状況

(1) テーマ設定

情報の収集

個人ミニ研究及びグループ研究の成果をもとに行う

テーマ集約

テーマ決定

- (2) 年間研究計画（3年次に卒業課題として完成させるために、1年間の研究項目を計画）
- (3) 調査研究…図書・インターネット・新聞・フィールドワーク
- (4) 成果発表…プレゼンテーションを使用した発表

【実施状況】

- ・テーマは、これまでの取組成果を生かせるものを各自が考え、アドバイザー等の助言のもとに設定。
- ・生徒個々のテーマに対応できるユニット担当者を中心に、担当生徒を決め、全教員をアドバイザーとして指導（ユニット担当者は平均7～8人、アドバイザーは平均3人の生徒を担当）。なお、授業時にはユニット担当者が指導にあた

り、アドバイザーは、休み時間や放課後等を利用して指導。

- ・「未来プランニング」授業時及び放課後に図書室やコンピュータ教室を利用して情報収集を行った。収集後は、ワークシートを使ってレポートのまとめ作業。
- ・クラスユニットごとに発表会（作品提示及び実演を含む）を実施。プレゼンテーションは全員がコンピュータを使用して実施。
- ・クラスユニット別発表会后、生徒の相互評価及び当該学年会にて代表者を決定。
- ・学年全体で個人課題中間発表会を実施。

「発表会」も、生徒が中心となって運営する

平成16年2月13日に「未来プランニング個人課題研究中間発表会」を、来賓（教育事務所、県内総合学科高校及び学力向上フロンティアハイスクール事業指定高校及び近隣中学校関係者、学校評議員、同窓会会長、PTA役員）及び保護者（25名）を迎えて実施した。

今回の発表会は、この1年間、1年次の「産業社会と人間」の授業の総決算として作成したライフプラン（将来設計）に基づく課題研究の中間発表を行うものであり、個人研究10名、グループ研究2グループ及びピアノ演奏3名の計18名の代表者が「自分の夢」を具体化するための研究発表を堂々に行った。

また、当日の運営は、生徒の主体的な活動にゆだねるという方針で行った。



「未来プランニング」 中間発表会

【来賓評価】

- 自分の課題であるので、意欲をもって継続的な学習ができており、問題解決能力が育成されていると感じました。すばらしい発表でした。総合学科の成果を見せていただきました。
- 生徒の皆さんが、やらされているのではなく、自ら進んで学習している姿がたのしく思えました。このような取り組みが力をつけ、生きる力を養うと思いますし、生徒が変わり、学校も活性化すると思います。
- 生徒自身の手で行っているところが、高校生らしく、すばらしい。一つの行事を成功させるためには、何が必要か、実際の場面では準備や予想を超える事態も生じるが、これに、どのように臨機応変に行動しなければならないか、実際に学ぶ、よい機会であったと思う。また、これを見る生徒も、前で緊張しながら進行や発表を行う友人から学ぶ点は多かったと思う。
- やはり、将来の夢や目標を抱かせる教育が、求められると思います。そういう意味で、それを実践的に研究されている貴校の取り組みに感銘を受けました。この中間発表会をもとに、さらに前進・飛躍されることを祈っています。

【生徒評価】 (事後アンケートの結果より)

a:大変よかった b:よかった c:よくなかった d:その他

【1】個人課題研究の代表者の発表の内容はどうでしたか？

a:86% b:13% c:0% d:1%

【2】発表者の態度（声、アイコンタクトなど）は、どうでしたか？

a:55% b:44% c:0% d:1%

【3】自分の課題研究と比較して、どうでしたか？

a:82% b:17% c:0% d:1%

【4】グループ研究の発表は、どうでしたか？

a:79% b:21% c:0% d:0%

【5】発表会の中で、一番印象に残ったことを書いて下さい。

- ファッションショー (37%)
- ピアノ演奏 (24%)
- 着付け実演 (16%)
- 発表 (8%)

3年次の学習では、さらにスキルアップを図る

◆3年次の「個人課題研究」における指導法

2年次とは異なり、全員が同一時間帯に一斉学習を行うことになる。

そのため、調べ学習やまとめに必要なパソコンを全員分確保することが不可能であり、授業での調べ学習は困難であるが、学力向上フロンティアハイスクール事業における実践研究の中核をなす「未来プランニング」を有効に活用し、最終学年での進路指導の充実を図っている。

具体的には、2年次に積み上げてきた「課題研究」への取り組みをグレードアップするとともに、進路意識の向上を学力の向上へと直結させるため、スキルアップのための方策として、「自己実現支援講座」を実施している。

コミュニケーション能力、自己表現能力、論理的思考能力、問題解決能力の養成を主眼とした15の講座を開設し、生徒一人ひとりの進路目標に即した、きめ細かな学習指導を展開している。

成果と課題

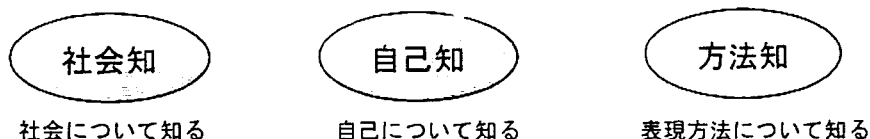
- 以下の三つの成果については、生徒間で多少の温度差は生じているが、当初の予測を超えて達成できた。

①進路意識の向上 ② 問題解決能力の養成 ③自己表現能力の育成

- 「産業社会と人間」との連携による「未来プランニング」の実施効果として、生徒一人ひとりの進路意識の向上とともに、それぞれの進路目標を達成するための学力の向上がみられた。今後とも、進路意識と結び付けて学力向上を図る指導に重点をおいていく必要がある。

進路研究を軸にした3年間の体系的な学習プログラムに基づいて、総合的な学習の時間を展開する

【概 要】 3年間をととして、進路探究や知的生産に必要な3つの「知」を育む内容を骨組みとする計画を立てて授業を展開する。



取り組むべきテーマの流れや時期を考えて
3年間の計画を立てる

各学年で扱う内容、時間数、担当は次のとおりである。

表Ⅲ-7-① 総合的な学習の時間の計画（抜粋）

No	内 容	時	担 当
〔1年〕			
①	オリエンテーション ー3年間のシラバス	1	総合部
②	情報収集法 ー図書館での情報収集法	1	図書部・副担任
③	学部・学科研究	5	副担任
④	小論文講演会ー講義・演習	2	学年
⑤	職業研究 ーレポート作成・発表会	5	副担任
⑥	キャリアセミナー ー職業人講話	3	進路部・学年
⑦	統一小論文ー環境問題	5	副担任
⑧	テーマグループ別小論文	6	学年
〔2年〕			
⑨	ディベート	8	副担任・学年
⑩	進路研究 ー志望理由書	6	副担任
⑪	課題研究 ーテーマ設定・資料収集	12	学年
〔3年〕			
⑫	課題研究ー論文作成	20	副担任・学年

職業研究や大学研究においては、文献あるいはインターネットを利用した調べ学習の他に、現在活躍中の職業人から直接話を聴いたり、オープンキャンパスへの参加に学年で取り組んだりして、より具体的なイメージがつけられるように配慮している。

この過程で自分の興味・適性を確認するなど、自己を深く見つめることになる（自己知）。また、小論文やディベートにおいては、社会の抱える問題などを分析し（社会知）、それに対する自分の考えをまとめて表現する力を養う（方法知）。

さらに、興味・関心の高い事柄を自分のテーマとして課題研究を行い、この総合的な学習の時間のまとめとしている。

なお、左表の①～⑨についてはⅢ章4（P44～）で、⑩についてはⅥ章4（P106～）で触れる。

副担任を中心として、学年全体で指導を展開する

指導原案は「総合部」で作成し、担当者（副担任または学年全体）との打ち合わせを行う。内容によっては会議を開き、細かい調整を行う。

生徒一人ひとりの実施記録は、授業記録シートに記入され、担当者がそれをチェックする。また、生徒がこの時間に扱った資料やレポートなどは、すべてポートフォリオ化され、担当者はポートフォリオ及び授業記録シートを基に評価を行う。

課題研究は、生徒の進路希望に応じた系統別のグループを編成して実施する

2年次の後半から3年次にかけて行う課題研究は、生徒の希望進路に応じて、次のようにグループ分けをする。

- | | | |
|--------|-------|-------|
| ①教育 | ②人文科学 | ③社会科学 |
| ④芸術・体育 | ⑤工学 | ⑥理学 |
| ⑦生物農学 | ⑧医療保健 | ⑨生活科学 |

テーマの設定や発表活動など、節目の活動はこのグループ単位で行い、調査や論文作成の活動についてはクラス単位で実施する。

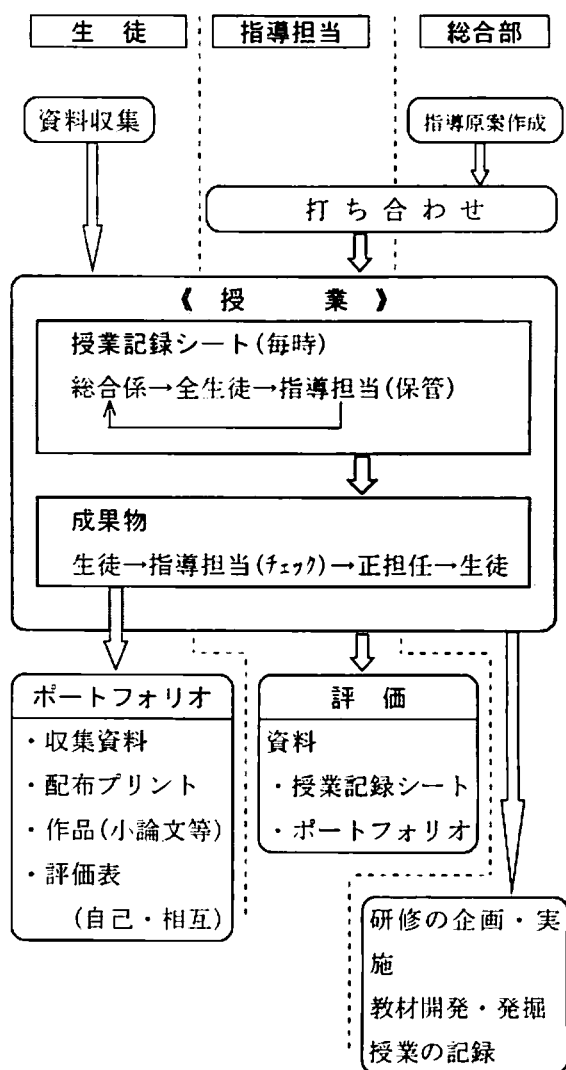
2年次にはテーマ探し・資料収集を行い、3年次に本格的に取り組む。

参考のため、以下に授業記録シートの様式と指導展開のフロー（流れ図）を示しておく。

図Ⅲ-7-① 授業記録シート

年 組 番 氏 名 ()						
回	実施日	出欠	活動内容	活動場所	自己評価	印

図Ⅲ-7-② 指導展開のフロー



成果と課題

- 多くの生徒が総合的な学習の時間にまじめに取り組んでおり、その意義を感じている。
- 総合的な学習の時間の授業が始まって、欠席率・遅刻率が以前に比べて半減している。学習動機への自覚が高まり、主体的に行動できる力が備わってきたと評価できる。
- すべての教員が協力して成り立つ授業であるため、教員全体の理解と支持が必要である。
- 調べ学習が十分できるような環境を整える必要がある（学校図書館・インターネット等）。

表Ⅲ-7-② 「総合的な学習の時間」に関するアンケート結果（平成16年度・1年生）

テーマ 評 価	学部学科 研 究	キャリア セミナー	テーマ別 小論文
ためになった	41%	56%	28%
ややためになった	46%	37%	47%
あまりためにならなかった	12%	6%	22%
ためにならなかった	1%	0%	3%

IV章 授業改善をどのように推進するか

- 1 ICT教材をどのように開発するか
- 2 地域の教育資源をどのように活用するか
- 3 活用しやすいシラバスをどのように作成するか
- 4 生徒による授業評価をどのように行うか①
- 5 生徒による授業評価をどのように行うか②
- 6 授業公開をどのように進めるか
- 7 学校全体で組織的な授業改善をどのように進めるか



オープンスクール



外部講師とのチーム・ティーチング

コンピュータの有効利用により学習意欲を高める

【概 要】

本校は総合学科高校に改編し、授業は2時間続きのユニットで実施している。2時間続きであっても、生徒の学習意欲を低下させず、継続させることができる授業の工夫、教材の工夫をする必要性を痛感している。「情報」の授業も必修になり、コンピュータ環境も整備されつつある状況の中、本校の現状も踏まえて、「生徒も主体的に学べるICT教材」開発の必要性を鑑み、以下の要件を満たすようなコンピュータによる教材開発に取り組んだ。

作成例は、地理歴史科のものを掲載している。

開発要件

見て学べる
自分で学べる
作業を通じて学べる

ICT教材 ⇒

- ① 数種類の市販ソフトで作成できる
- ② 教材作成が比較的容易で、操作も簡単
- ③ 完成後にも、適宜、修正・編集が可能

* ICT…情報・コミュニケーション技術 [Information and Communications Technology]

「見て学べるICT教材」の開発に取り組む

実物提示、写真等のスライド上映、ビデオ・DVD視聴、プレゼンテーション形式での教材提示等は、各学校でなされている取組みで、すでに一般化されている。ここでは、これらのバリエーションの一部を事例として取り上げることとする。

◆頭出し自在なDVD教材

既存のDVDではなく、自分で撮影した動画（国内及び海外での取材旅行で撮り溜めたもの）を編集して、授業内容に即した構成のDVDを作成し、授業で使用した。著作権を侵害しないためにも、実際に撮影した動画が必要である。従来の自作ビデオを映写機で投影（あるいは、テレビで放映）しての授業という形態と同じだと思われるであろうが、教材ビデオをデジタル化（DVD化）するメリットは、授業進度に合わせて、必要な部分がすぐに頭出しできること、特に重要な画面は静止状態にして説明を加えられる点などがあげられる。実際に授業で使用しているが、生徒の興味を喚起

でき、授業理解への起爆剤ともなっている。

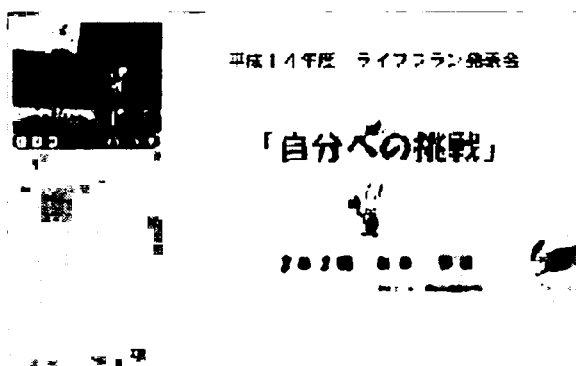
より効果的なビデオを作成するためには、ビデオ編集ソフト、オーサリングソフトとともに、注釈や小タイトル画像の挿入を行うために、グラフィック（レタッチ、ペイント・ドローの各種）ソフトを使用することを推奨する。

◆動画とスライドを同時に提示できるプレゼンテーションソフトの活用

既に、各学校では、総合的な学習の時間をはじめとする発表会等で、生徒及び教員が定番の発表用ソフトを使用してプレゼンテーションを行うということが普通となってきた。本校でも、「情報」の授業を筆頭に、各教科で、プロジェクタとパソコンを持ち込み、発表用ソフトを使用した授業が日常的に行われている。

そこで、さらに一步工夫して、定番の発表用ソフトに同梱されているソフトを使用した教材を考えてみた。このソフトは音声とスライド画面及び動画とスライド画面を同じ画面に表示して見せることができる。

これを有効に活用すれば、実験を伴う理系の科



図Ⅳ－１－①

目や実習（実技・作業）を伴う科目の事前説明、発表会等の事前指導等で効果を発揮するであろう。

図Ⅳ－１－①の左側は動画、右側はスライド画面である。

科目「産業社会と人間」のライフプラン発表会の事前指導の一環として、前年度の生徒の発表状況と使用プレゼンテーションを同期させて、１年生に提示した。生徒及び教員とも、興味深く視聴していた。生徒からは、発表というものの雰囲気や内容の示し方がよくわかったという感想があった。

◆対話的操作が可能なアニメ作成ソフト

使用するのは、某社のインタラクティブアニメーションツールである。時間軸にそって画像や動画を配置してムービーを作成する点では、通常のアニメ作りに似ているが、要所要所に観る者や発表者が自由にクリックできるボタンを配置しており、より対話に近いプレゼンテーションが可能である。操作ボタンを配置することによって、閲覧者によるアニメの操作が可能であるというメリットを利用して、「自分で学べる」教材の作成にも利用できる。ある意味では、定番の発表用ソフトよりもプレゼンテーション作成時の自由度が大きい。本校では、中学生への学校概要説明等でそのソフトを使用したプレゼンテーションを使用し、好評を博している。

図Ⅳ－１－②で例示したのは、ホームページに貼り付けた状態のアニメ画面である。画面上の各項目の文字をマウスでクリックすることで、その項目に関するアニメ画面にリンクし、画面が切り



図Ⅳ－１－②

替わる。作成時に、特殊なスクリプトを使用すれば、さらに高度な動きを演出することができる。

「自分で学べるICT教材」「作業を通じて学べるICT教材」の作成にも挑戦する

「見て学べるICT教材」の冒頭に述べたような方法論でコンピュータを活用しようとする、たとえ、その授業内容に興味・関心を覚えても、ほとんどの場合、生徒は受け身で過ごさなければならない。そこで、生徒が主体的に学習活動が行えるICT教材を簡単に作れないだろうかと考えてみた（市販ソフト及びフリーソフトの中にも、自分で学習できるものが幾つか存在する。市販ソフトは生徒全員分となると経費面で、難しい問題が生じる。フリーソフトの場合は、授業内容に即した適当なものがない）。

◆ホームページ教材Ⅰ

現在、各学校では、学校紹介のホームページを作成し、ネット上で閲覧できるようにしている。また、総合的な学習の時間での課題研究も、インターネット利用による調べ学習が日常的に行われている。要するに、ほとんどの場合ホームページは見せる、あるいは見るだけの効果しか生じていないということである。そこで、逆に、ホームページを自学自習できるようにできないか、つまり生徒が主体的に操作することで学習効果が測れる教材はできないかと考え、ホームページ作成ソフトを利用して、簡単な教材作成を試みた。幸いにも、定番のホームページ作成ソフトのバージョン

8から、e-ラーニング機能が追加されている（以前は、教職員が、ソフトメーカーのホームページ上で登録申請する必要があった）。これを使用すれば、小テストをワープロで作る感覚で、ホームページ上での問題作成が可能となる（テスト時間及び配点も自由に設定できる）。加えて、パソコン上で各種問題（選択肢問題・文章完成問題）を解いたのちに、採点ボタンを押せば、すぐに自動的に採点が行われるという利点もある。これを作成して、授業時に各パソコンにコピーしておけば、多くの生徒が同時に自学自習ができ、しかも採点までしてくれるので、各単元の終了後、定期考査用の確認テスト等に利用できる。

さらに、このテストホームページをネットにアップロードしておけば、生徒は自宅でも自学自習ができ、その採点結果は指定したメールアドレスに送付される。また、担当教員は自宅で、関係生徒の学習活動を把握することが可能になる。

【e-ラーニング実物（選択問題）例】

日本史B古代史Ⅰ 自学用問題

100 点満点（合格点 80 点）
残り時間 03時00分00秒

[テスト開始](#)

テストを開始するには「テスト開始」ボタンを押してください。

初期画面。テスト開始ボタンを押す。

問題 1

627年 11月15日新羅軍を阻止 反乱を鎮めた人物は誰か。

☐ 新羅
☐ 新羅
☐ 新羅
☐ 新羅

問題 2

上記の反乱を鎮めた人物の地位を答えよ

☐ 皇主
☐ 村主
☐ 国司
☐ 伴造

テスト画面が表示される。

正解と思われる項目にチェックを入れる。

最後の問題の正解と思われる項目にチェックをいれたら、左下に配置された採点ボタンを押す。

聖武太子が645年に定めた「新羅では新羅人の才能・功績による人材登用の制度を同じくする。

☐ 官位十二階制
☐ 八色の姓制
☒ (正解) 位階十二階制

問題 11

上記の位階制度で、最高位は何か？

☒ (正解) 大連位
☐ 大に位
☐ 大連位
☐ 大連位

問題 12

604年には、官吏への政治的選定制度として、国司の職掌が成立したが、それを何というか？

☐ 郡縣制
☐ 貢納式
☒ (正解) 貢納式
☐ 貢納式

お疲れ様でした。「採点」ボタンを押して採点してください。

採点後「送信」ボタンを押して結果を送信してください。

結果

自動的に全ての問題の正誤及び正解例が提示され、採点集計が行われる。

◆ホームページ教材Ⅱ

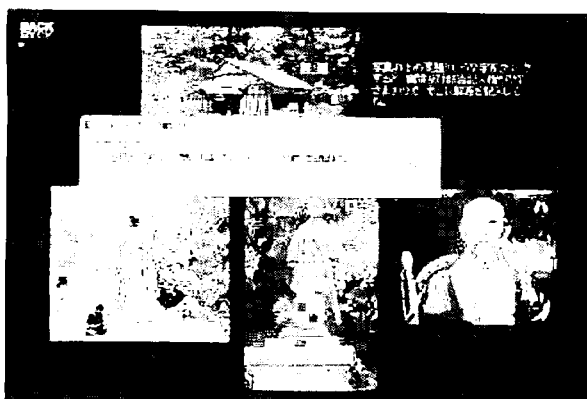
前述のホームページ教材Ⅰ（Ⅰの場合は、e-ラーニングのテスト作成ウィザードに従って必要事項を記入すれば、簡単に作成できる）の作成言語であるジャバ・スクリプトを利用して、別種の自学自習用問題を数種類作成してみた。

本事例集には2例を掲載している。なお、画面中の画像については、教育研修所のホームページで公開されているフリー素材を使用している。

【パターン1】



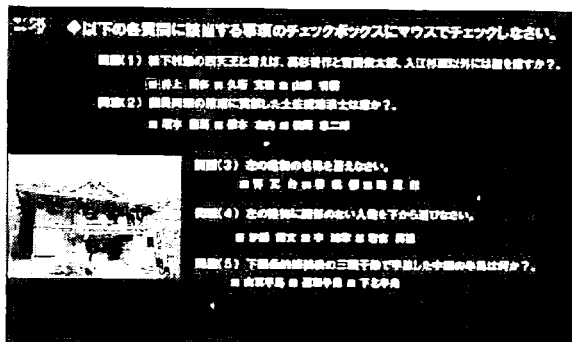
画面上の「問題」という文字をクリックする。



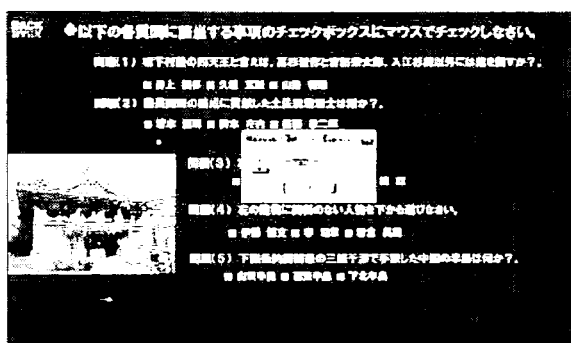
解答用ボックスが現れ、その解答ボックスに答えを記入すれば、正解あるいは誤答をボックスで提示してくれる。



【パターン2】



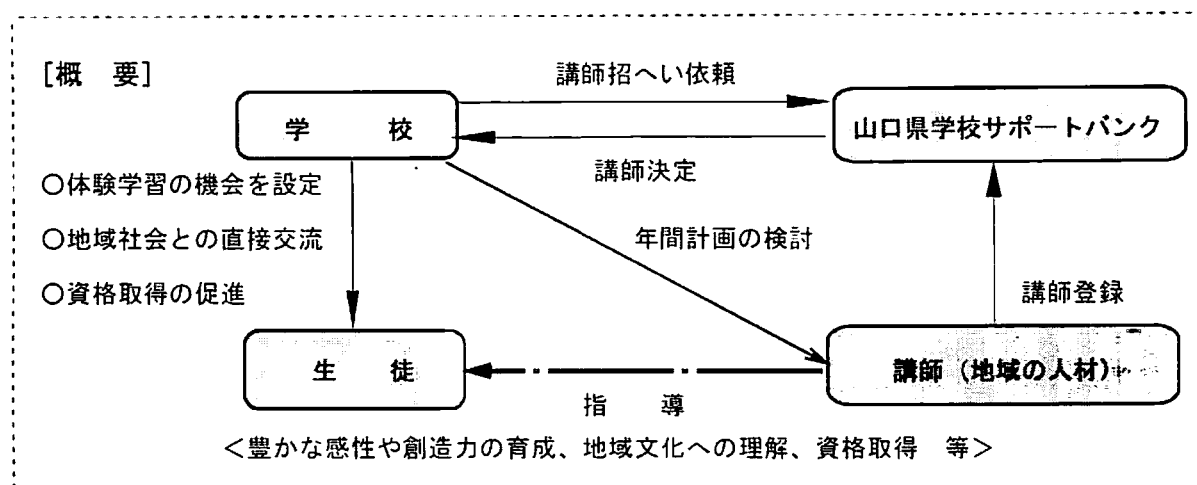
各問題の正解だと思う項目にチェックを入れると、正解あるいは誤答をボックスで提示してくれる。



成果と課題

- 生徒の興味・関心を引き出し、授業内容の理解度を測るという観点から、ICT教材の開発に取り組んできた。コンピュータ教室の使用状況の問題等により、この事例で述べた教材を全て授業で実践しているわけではないが、実施した際には、生徒は良好な反応を示している。
- 現在、地理歴史科のみが作成している段階であり、教科ごとに体系的な教材を作り上げている状況にはない。今後は、教科ごとに体系的な教材を作成すること、他の教員にもノウハウが伝えられる方法や手段を構築していくことが課題となっている。
- 今後の課題も含め、強調したいことは、ICT教材があればいいということではなく、そのICT教材をどのように日常の教育に活用するかであり、教師がどのような教材を作れば、生徒が授業内容をイメージ化しやすいのか、理解を深められるのかということを常に模索し、工夫・改善を図らなければならないということである。まだ、授業で利用していない教材もあるので、今後は、機会あるごとに使用して生徒の反応等を観察し、よりよいICT教材の開発に生かすことにより、学習意欲の向上を図りたい。

サポートバンクを活用し、地元講師による地域関連科目等を開設する



県の学校サポートバンクを利用し、商業・芸術系科目の指導者を選定する

本校では、平成14年度から単位制を導入し、教育課程を改編したが、特に商業及び芸術科目に特色ある学習内容を多数盛り込んだ。また、指導者の選定にあたっては、優れた知識や技能を有する地域人材に関する情報を、県内の公立高等学校に対して提供する目的で平成12年度からスタートした「山口県学校サポートバンク（以下、サポートバンクと記す）」^{＊1}を利用することとした。

学校設定科目を新設し、地元出身の陶芸家による伝統文化「須佐唐津焼」の指導を行う

◆ 校内準備

本校では、地域の人々と直接交流を図る様々な体験活動を授業内容に盛り込むことを意図し、平成14年度から、既存科目である「美術Ⅰ」において「須佐唐津焼」の実習を学習内容に取り入れ、校内に設置した陶芸窯等で指導する体制

を整えた。さらに指導者として、本校芸術科非常勤講師に加え、技術指導者として地元出身の陶芸家に講師を依頼し、平均して週1回程度、指導していただいている。

◆ 指導内容

平成15年度からは「須佐唐津焼」を本格的に学ぶための科目「陶芸A」及び「陶芸B」を教育課程に設定し、前述の地元陶芸家に指導をお願いしている（表Ⅳ-2-①参照）。

「陶芸A」及び「陶芸B」では、焼き物の歴史、材料の加工と成形、作品の使用や鑑賞といった内容を学習する。年度当初は慣れない手つきで学習していた生徒が、美術講師と地元陶芸家のTTによるきめ細かな指導により着実に技術を学び、立派な作品を作れるようになった。

表Ⅳ-2-① サポートバンク講師関連科目と来校数

年度	平成15年度		平成16年度		平成17年度	
科目	美術Ⅰ	陶芸A・B	美術Ⅰ	陶芸A・B	美術Ⅰ	陶芸A・B
講師来校数	49 (実施回数)		53 (実施回数)		51 (予定回数)	

＊1 山口県学校サポートバンク：優れた知識や技能を有する地域の人材による学校支援を促進するため、これらの人材を登録し、その情報をインターネットにより公開するもの。国際・生活・福祉・産業・環境・科学・文化・スポーツ等の分野から約300名を登録



陶芸実習風景

また、サポートバンク講師には、通常の授業だけでなく、部活動（美術・陶芸部）での作品制作に対する指導や、学校説明会における体験授業の指導など、本校の特色ある学習活動の推進に多大な貢献をさせていただいており、現在では欠かすことのできない存在となっている。

地元出身の珠算指導者を招へいし、商業科の科目におけるＴＴを実施する

◆ 指導内容

平成13年度から、サポートバンク事業を活用し、須佐近隣の田万川地区より珠算塾経営の講師を招へいしている。本校商業教員とサポートバンク講師とのＴＴで、科目「課題研究」等において珠算資格取得の指導を行っている。また、通常授業以外にも、長期休業中等に資格取得に向けた課外を担当していただいている。

◆ 指導実績

珠算関係科目の履修者数は、平成15年度は17人、平成16年度は4人、平成17年度は14人であったが、それぞれ表Ⅳ－２－②のとおり指導していただいている。

表Ⅳ－２－② サポートバンク講師関連科目と来校数

年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
科目	計算事務	計算事務	課題研究
講師 来校数	52 (実施回数)	46 (実施回数)	53 (予定回数)

各年度とも、担当教諭とサポートバンク講師の熱心な指導により、生徒が意欲的に学習活動に取り組んでおり、着実に成果があがっている（表Ⅳ－２－③参照）。

表Ⅳ－２－③ 最近3か年の珠算検定受験状況

年度	平成15年度		平成16年度		平成17年度	
	受験者	合格者	受験者	合格者	受験者	合格者
合計	36	25	12	5	37	26

（注：平成17年度は11月末現在のデータ）



珠算指導風景

成果と課題

- 珠算指導については、講師によるきめ細かで熱心な指導の結果、生徒の資格取得への意欲と取得率が年々着実に高まっている。
- 陶芸については、本校でしか学べない科目という認識が生徒間に浸透し、受講者数の増加、技術の向上等の成果がみられる。
- 交通の不便な地域に位置する本校にとって、常に質の高い教育を生徒に提供することができるサポートバンク制度は、いまや本校にとって不可欠な要素となっており、引き続き活用していきたい。

自分で学習計画を立て、自主的に学習を進めるのに役立つシラバスを作成する

【概 要】

学年別に編集

シラバス（学習内容及び時期）

- ・当該学年のシラバス
- ・3年間の授業計画概要（1年生用）

+

学習方法（各教科）

- ・予習→授業→復習 の流れ
- ・ノートの取り方 など

学習内容とともに学習の進め方の基本について記述し、「自学」の指針とする

本校では、生徒自らが明確な進路目標をもち、その実現のために自主的・主体的に学習を進められるような環境を提供できるよう努めている。シラバスの作成にあたっては、自主的な学習に役立つよう、授業内容にとどまらず「勉強の仕方の基本に関する各教科からの助言」を加えており、これをもとにして、自分なりの勉強スタイルを確立してほしいと考えている。また、「書き込み可能な年間カレンダー」を入れ、定期考査や模擬試験の位置を確認し、学習計画を立てやすいように工夫した。さらに、1年生用には「3年間の動きが見通せる授業計画概要」を盛り込んでいる。

教員にとっても、授業計画の確認等に利用でき、実施した授業の記録や気づき・反省を書き込むことで、次年度の計画作成に生かせると考えている。

アンケートの結果を参考にして、内容の改善を図るとともに、作成のOA化を進める

2学期にシラバスについてのアンケートを実施し、生徒及び教員から使いやすさや改善点についての意見をまとめている。その結果を示して、次年度の編集方針を確認した後は、各教科が責任を

もって原稿を作成する。校内LANを利用し、今年度の原稿を取り出して修正を加え、次年度用のフォルダに入れるという作業を各教科に依頼することで担当者の負担は軽減される。

これで学年ごとの原稿が電子ファイルの形でまとまるので、印刷については、そのままMOに移し替えて印刷業者に依頼している。

以下、内容等の参考資料を示す。

◆内容

学習方法の基礎（例：数学）

①予習：予習をして授業に臨むこと。

- ・教科書を一とおり読み、教科書の問題を演習し、疑問点をはっきりさせておく。

②授業：学習の中心は授業である。

- ・集中して、時間中に理解する。そのためには、疑問点はどんどん質問する。
- ・ノートは、ぎっしり書かないで、自分の解いた問題の解答の誤りを訂正したり、別解を書き込んだりできるように、余裕をもっておくこと。

③復習：その日のうちに復習すること。

- ・宿題はその日のうちにする。
- ・内容がきちんと理解できているかどうかを確認するため、習った範囲の問題を演習する。
- ・解けた問題と解けなかった問題をはっきりさせておき、疑問点は、翌日友達や先生に聞く。
- ・常に自分の“手と頭”を働かせることが必要である。

表Ⅳ-3-① 3年間の授業計画概要(例 理科)

学 年	月	普通科 (2年次より文理コース選択)									
		文系					理系				
		授業 内容	授業 内容	授業 内容	授業 内容	授業 内容	授業 内容	授業 内容	授業 内容	授業 内容	授業 内容
1 年	4	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)	理科 総合 A (2)
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										
	10										
	11										
	12										
	1										
	2										
	3										
2 年	4	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)	化学 I (2)
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										
	10										
	11										
	12										
	1										
	2										
	3										
3 年	4	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)	化学 II (2)
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										
	10										
	11										
	12										
	1										
	2										
	3										

● は選択を、※ は特編授業を表す。

◆仕様について (平成17年度版作成用資料)

(1) 体裁

ア B5判70ページ (今年度はA4判であったが、生徒が扱いにくいのでB5判に変える)

イ 紙質(表紙も含めて)は今年度と同程度

(2) 内容

ア 平成16年度の内容に準ずる。

イ 1年生の手引きには、3年間の授業計画概要を加える。

ウ 定期考査・模試の日程などが書き込めるような年間カレンダーを加える。

エ 生徒アンケートも参考にして、より利用しやすいものをめざす。

(3) 原稿

ア ワープロ・表計算ファイルで提出

次のフォルダに入れて下さい。

全日フォルダ¥教務部¥高校生活の手引¥平成17年度手引原稿¥1年(2年・3年)

なお、今年度の原稿は、平成16年度手引原稿¥1年(2年・3年)に入っています。

イ フォントは明朝体に統一(原稿そのままの形が印刷されると考えてください。)

ウ 仕上がりはB5判であるが、原稿は昨年度と同じA4判用のままでよい。(印刷業者が縮小)

エ プリントアウトしたもの(A4判)も提出願います。(教科主任がまとめる)

オ 各教科でページのまとまりを作っていただけると助かります。

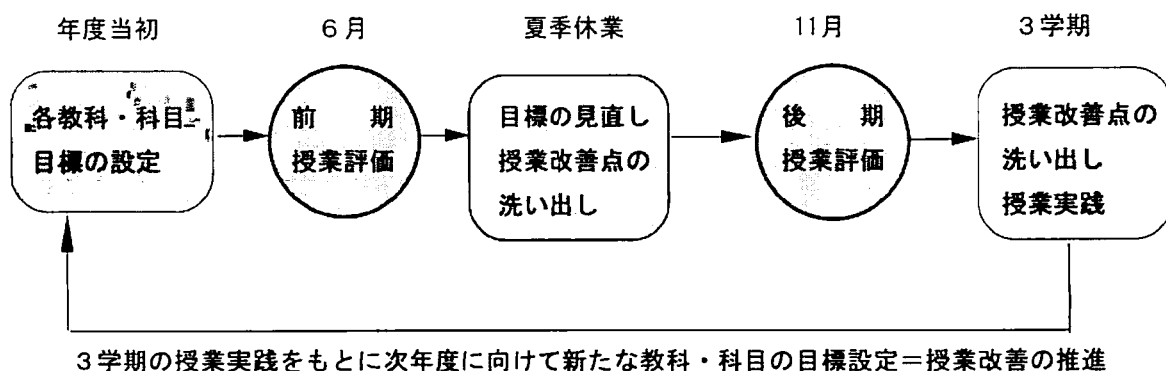
カ 参考になる生徒のノートコピー等も原稿に加えていただいて結構です。

成果と課題

- シラバスは、文系・理系の選択や履修科目の選択について指導する際にも、各学年で活用している。
- 他教科の指導計画が確認できるので、関連教科の授業内容や実施時期等の調整がしやすくなる。
- 日常的な活用度は高いとは言えないが、「役に立っている」と答えた生徒も多くいるので、生徒の学習活動により密着したものになるよう、一層の改善を図りたい。
- アンケートの結果を参考にしながらも、作成の基本方針がぶれないように注意して、形を整える必要がある。
- 原稿の作成時期に教材が確定してないことから、授業内容の提示が大まかなものとなることを避ける工夫が必要である。

授業目標の実現状況を「生徒による授業評価」で検証する

〔概 要〕



授業改善をめざして、アンケートによる
年2回の授業評価を計画・実施する

本校では、単位制への移行を念頭においたスクールアイデンティティづくりの一環として、平成13年度から授業評価を実施しているが、本格的に開始したのは、本事業の指定を受けた平成15年度からである。この年、授業評価の実施計画を策定するにあたり、まず評価と授業改善を結びつけるために、どのように授業評価を進めていくかを検討した。その結果、まず、前期に授業評価を行い、その結果をもとに教科で検討会を行い、後期の授業改善に生かす。さらに、後期にも授業評価を行い、その結果をもとに次年度に向けた検討を行うこととした。評価については「授業の満足度」という指標でアンケートを実施し、各教科・科目の良い点・改善してほしい点を記述させることにした。結果は、図IV-4-①のとおりである。

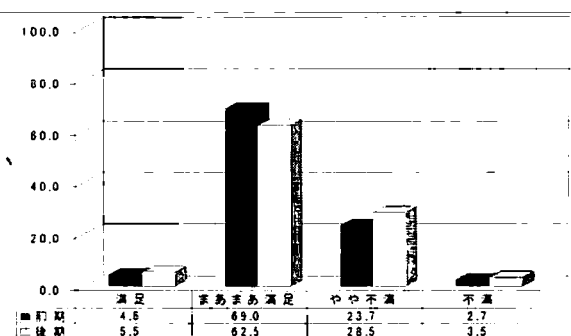
全体的な傾向としては、70%以上が「満足」「まあまあ満足」ということで、授業全体の状況としては良好といえるが、課題として「授業がわからない」、「目的がわからない」といった意見が満足度にかかわらず目に付くことが挙げられた。

また、学年があがるほど、受験を意識した授業であるかないかという点で、満足度は分かれてい

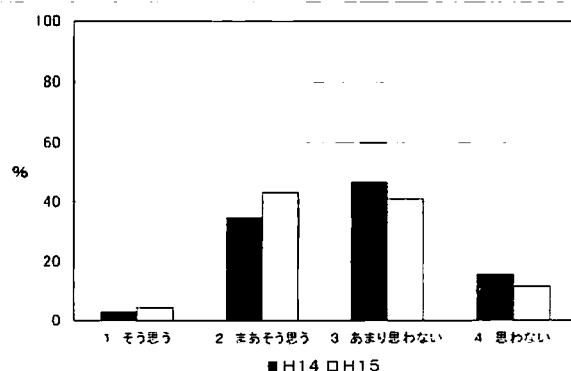
ることがわかった。

さらに、図IV-4-②の平成15年度学校アンケートにおける生徒の回答で、2年連続して授業に関する項目の数値が低いことも、必ずしも授業について満足のいく状態ではないことを示していた。

図IV-4-① 「これまで受けてきた南高の授業は、全体としてどうですか」



図IV-4-② 「内容がわかりやすく充実した授業が多いと思いますか」



次年度に向けた授業改善の参考資料とするという点では、今回、指標とした「満足度」がやや抽象的であることに加えて、授業の良い点や改善点に対する回答を全て記述式としたことなどから、何が課題なのかを整理できない状態も出てきた。そのため、次年度に向けての教科の話し合いが十分深められなかった。

また、アンケートを、無記名及び記述式中心の様式とすると、授業担当教員に対する、生徒の個人的な要望が書かれるだけになるという意見も多く出されたため、平成16年度に向けて、この授業評価の方法そのものを見直す必要も出てきた。

教科・科目の目標を掲げ、生徒の授業評価を授業改善に生かす

平成16年度に入り、前年度の反省をもとに、授業改善に生かせるものに改善していくという視点で授業評価の方法を再検討した。その結果、でき上がったアンケートが、表Ⅳ－４－①である。

平成16年度の授業評価の大きな特徴は、全教科共通の質問事項を設定する、全て記号による回答とする、生徒にも日頃の授業態度を自己評価してもらうという3点である。

表Ⅳ－４－① 授業アンケート（平成16年度）

生徒の皆さんへ

このアンケートは、南高の授業をよりよいものにしていくためのアンケートです。授業について尋ねるものですが、授業は教員側だけの努力で成立するものではありません。君たちが予習・復習をきちんとし、授業に対して真剣な態度で臨んで初めて成立するものだということも頭に入れてアンケートに答えてください。決して、先生の好き嫌いとか、自分たちの状況を無視して答えないようにしてください。教科によっては裏もあります。

以下の質問で「1」をつけた場合には、右側にその理由を書いてください。

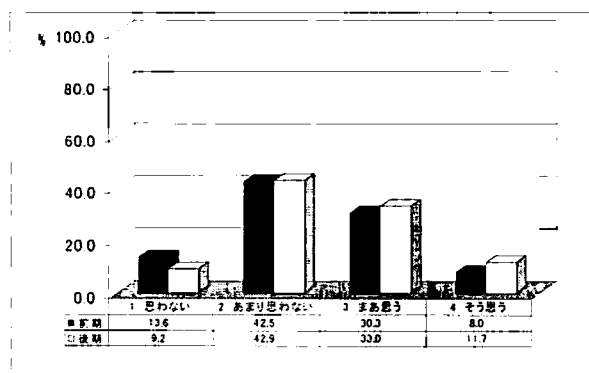
実施日	月 日	年・組	年 組
授業名		授業担当者	
基準	4…そう思う 3…どちらかといえばそう思う 2…どちらかといえばそう思わない 1…そう思わない		
質問項目	あなたの意見	「1」をつけた理由	
①私は、チャイムが鳴ったときに着席している。	4-3-2-1		
②私は、チャイムが鳴ったとき机の上に教科書など授業を受ける姿勢は整っている。	4-3-2-1		
③私は授業に関するものをきちんと持ってきている。	4-3-2-1		
④私は、授業中、私語をしない。	4-3-2-1		
⑤私は、授業中、居眠りをしない。	4-3-2-1		
⑥私は、授業中、別のことをしない。	4-3-2-1		
⑦私は、授業の予習・復習ができています。	4-3-2-1		
⑧私は、自らの予習・復習を踏まえて授業が理解できています。	4-3-2-1		
⑨先生の説明の仕方は、わかりやすい。	4-3-2-1		
⑩先生の授業の進め方（スピード）はちょうどよい。	4-3-2-1		
⑪シラバスをこの授業の年間計画を理解する上で役立たせている。	4-3-2-1		
⑫シラバスをこの授業でどう評価されるのかを理解する上で役立たせている（後期のみ）。	4-3-2-1		

この授業評価表により、生徒は日頃の授業の振り返りができ、そのことが授業改善にも役立った。また、共通の質問項目を設定したことにより、図Ⅳ-4-③に示すような学校全体の課題についても明らかになった。しかし、教科・科目ごとの授業改善につなげていくには、教科に関連した質問が不十分であることや自由記述がないことなどが課題としてあげられた。

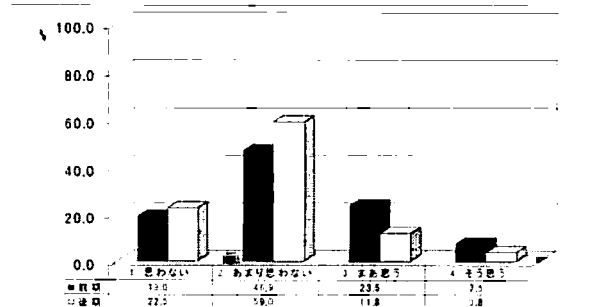
そこで、平成17年度に向けて、授業評価を各教科・科目でさらに生かしていくために、昨年度の共通質問事項に加えて、年度当初に設定している年間授業目標と関連付けて質問して評価を行うことにした。この結果、授業で目標とするところが

図Ⅳ-4-③ 授業アンケート結果（平成16年度）

「私は、授業の予習・復習ができています」



「シラバスをこの授業の年間計画を理解する上で役立たせている」



テーマ学習での発表風景

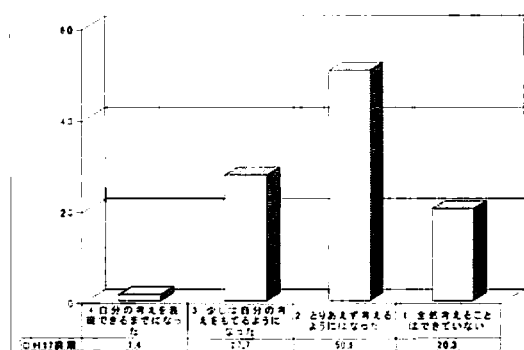
実際にはどうなのか見ていくことができるようになり、学校全体の課題とともに、各教員の指導上の課題を把握できるようになった。以下、例として世界史の授業評価の流れを見ていくこととする。

◆「世界史」の授業目標

- (1) 歴史的思考力の育成
- (2) 入試に対応した学力の育成

◆授業評価（前期）における結果

「考える世界史・歴史的思考力を身に付けるという教科の目標に関して、入学以前と比べて力は付きましたか」



◆教科検討会

レポート等により、3割弱の生徒は考えるようになったが、授業の中でさらに考える場面を設定する。

◆その後の授業実践における工夫

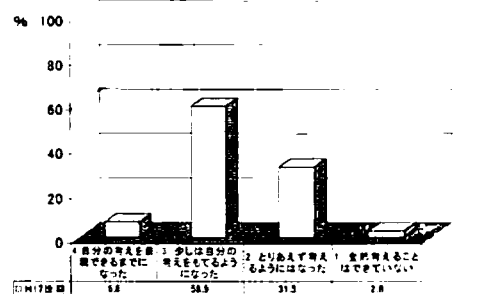
日常の授業の中で、図版やグラフの読み取りを通じて、「なぜ？」を大切にすることで歴史的背景や原因などを考えさせることができた。研究授業の「世界恐慌とファシズム」では、次ページの指導案における評価の観点に示すように、思考・判断に重点を置いた展開を心がけた。これは日常の授業でも心がけている点である。

「WORLD HISTORY-A」の発行により、現在の社会について自ら考え、表現する取組みを行った。授業の初めに解説することで世界史とのかかわりにも気付かせることができた。

テーマ学習「現代から考える植民地」では、調べる－討論する－模造紙に書く－発表するという作業を通して、考えることに重点を置くことができた（左の写真はその発表風景）。

◆授業評価（後期）における結果

多くの生徒が考えるようになってきたと言える。更に日常の考える作業が大切だと考える。



以上のように、3年間にわたり、授業評価に取り組んできた。

1年目は実施することに重点を置き、全教科・科目で実施することができた。

2年目には一定の形式ができあがり、学校全体の課題の発見を行うことができた。

3年目には教科の目標を掲げ、それを授業評価に結びつけることにより、一人ひとりの教員の授業改善を促すことができるようになったものと考えている。

「世界史」指導案（抜粋）

導入・展開	ウォール街の暗い木曜日	○なぜ世界恐慌が起きたのかを考えさせる。	・1920年代と関連付けて世界恐慌を考えようとしているか。 (関心・意欲・態度)
	世界恐慌期の各国の工業生産の推移のグラフから、世界への拡大の様子をみていく。	○世界恐慌がアメリカで起きた背景について理解させる。 ○グラフの読み取りをさせる。	・世界恐慌発生の背景を多角的に考察しているか。 (思考・判断)
		○アメリカで起きた事が世界に拡大した理由を考えさせる。	・グラフの読み取りができているか。 (資料活用の技能・表現)
			・恐慌拡大の理由を多角的に考察しているか。 (思考・判断)

成果と課題

- 授業アンケートの導入により、生徒の学習意欲を高める授業展開が進み、授業を意欲的に受ける生徒が多くなった。
- 授業アンケートの結果を受けた授業改善の状況については、生徒と教員との間で意識に差がある。

学力向上フロンティアハイスクール事業アンケート結果より

質問1（生徒）

あなたは意欲的に授業を受けていますか。

質問2（生徒）

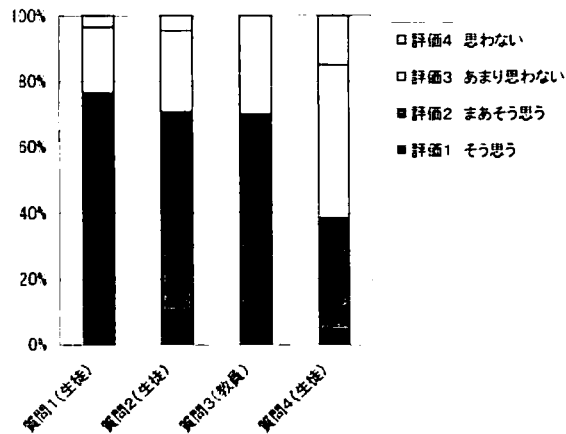
先生方は、学習意欲の向上に努めた授業展開をしていますか。

質問3（教員）

授業アンケートは、授業改善に生かされていますか。

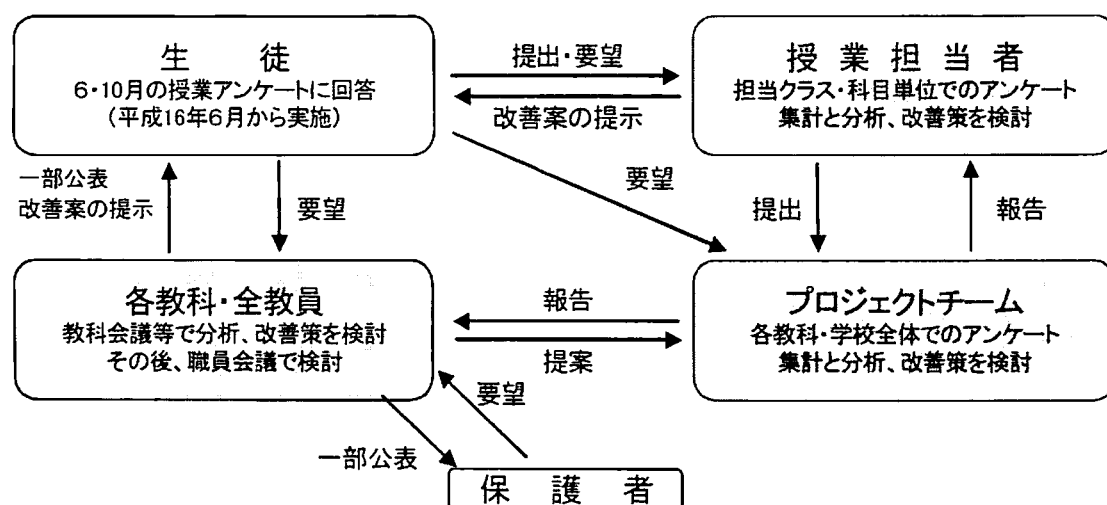
質問4（生徒）

授業アンケートによって、先生方の授業改善が行われていると思いますか。



「生徒による授業評価」の結果を分析し、具体的な授業改善プランをフィードバックする

【概 要】



年度内の授業改善を進めるため、6月と10月に授業評価を実施する

生徒の学力向上をめざす上で、教員の資質向上と授業改善は必須要件である。そこで、生徒による授業評価を各教科で実施し、教員一人ひとりが自発的に意識と指導力の向上を図ることにした。

平成16年5月に外部講師を迎え、授業評価に関する校内研修を行った。同年6月には各教諭の担当科目のうち任意の1科目で試験的に実施、さらに同年10月と翌年6・10月には、全科目でアンケートを実施し、今後も各年度の6月と10月に継続実施する予定である。アンケートの実施時期としては、生徒に具体的な改善策を示し、授業改善を実践するためにも6・10月が適当であると考えた。

当初は、生徒に記名させていたが、現在は無記名で提出させている。無責任な評価はほとんどみられず、より自由に要望等が記述されるようになった。今後も無記名で実施する予定である。

生徒による授業評価の結果を踏まえ、各教科で具体的な授業改善の方法を示す

アンケートの結果については、各教科・全教員のデータとして集約し、生徒・保護者に公表している。改善策については、生徒の要望に応えられるよう、各授業担当者で検討し、教科会議等の後、各授業において口頭で説明したり、「生徒からの要望に対する教員の回答」(表Ⅳ-5-②)として、生徒に提示している。

表Ⅳ-5-① 平成16年10月と平成17年6月のアンケート結果

授業に関するアンケート比較表 全体(％表示)

項 目	詳 述	平成16年2学期	平成17年1学期	増減
①質問の大きさ、話し方はちょうどよいですか。	そう思う	69	63	-6
	どちらかといえばそう思う	27	33	6
	どちらかといえばそう思わない	3	3	0
	そう思わない	1	0	-1
②説明の仕方は、わかりやすいですか。	そう思う	47	47	0
	どちらかといえばそう思う	44	45	1
	どちらかといえばそう思わない	8	7	-1
	そう思わない	1	1	0
③授業の進め方は(スピード)はちょうどよいですか。	そう思う	45	44	-1
	どちらかといえばそう思う	45	48	3
	どちらかといえばそう思わない	9	7	-2
	そう思わない	1	1	0
④板書の仕方は、ノートをとるのに適していますか。	そう思う	37	38	1
	どちらかといえばそう思う	46	48	2
	どちらかといえばそう思わない	15	12	-3
	そう思わない	2	3	1

表Ⅳ-5-① (続き)

項 目	評 価	平成16年2学期	平成17年1学期	増減
⑤注意するときや質問の仕方は適切ですか。	そう思う	42	41	-1
	どちらかといえばそう思う	50	54	4
	どちらかといえばそう思わない	7	4	-3
	そう思わない	1	1	0
⑥授業を聞いていて、理解しやすいですか。	そう思う	41	41	0
	どちらかといえばそう思う	49	51	2
	どちらかといえばそう思わない	9	7	-2
	そう思わない	1	1	0
⑦先生の熱意を感じますか。	そう思う	65	62	-3
	どちらかといえばそう思う	31	36	5
	どちらかといえばそう思わない	3	2	-1
	そう思わない	1	0	-1
⑧授業に興味を持てますか。	そう思う	40	41	1
	どちらかといえばそう思う	46	51	5
	どちらかといえばそう思わない	12	6	-6
	そう思わない	2	1	-1
⑨あなたは授業に集中していますか。	そう思う	32	37	5
	どちらかといえばそう思う	54	57	3
	どちらかといえばそう思わない	11	6	-5
	そう思わない	3	1	-2
⑩あなたは授業の予習ができていますか。	そう思う	8	10	2
	どちらかといえばそう思う	22	43	21
	どちらかといえばそう思わない	33	23	-10
	そう思わない	37	24	-13
⑪あなたは授業の復習ができていますか。	そう思う	5	9	4
	どちらかといえばそう思う	22	47	25
	どちらかといえばそう思わない	38	24	-14
	そう思わない	35	21	-14

表Ⅳ-5-①に示したアンケート結果を比較すると、全ての項目で否定的な評価の割合(「そう思わない」及び「どちらかといえばそう思わない」)が減少し、肯定的な評価(「そう思う」及びどちら

かといえば「そう思う」)の割合が増加している。

これらの結果から、評価を行う生徒や教員の異動等があったため単純に比較することは難しいとしても、授業改善に一定の成果があったと判断してよいと思われる。

また、生徒の予習・復習に関する数字が飛躍的に上昇している点は、本事業を通じた学力向上の取組みの成果の一つであり、授業改善に教員が真剣に取り組めば、生徒は必ず応えてくれるという本校の魅力が数字になって表れたものと考えられる。

表Ⅳ-5-② 生徒からの要望に対する教員の回答(抜粋)

教科	改 善 内 容	生徒への要望
国語	板書後すぐに、説明に移らないようにする。	板書は丁寧に書く。板書がすべてではないので、写すことで安心したいこと。
地理・公民	板書事項を増やしてほしいという意見が多いため、これまで以上に、必要最小限の内容を書くようにする。	板書を書き写すだけでなく、「聞いて」「理解して」自分なりのノートを作成してほしい。
数学	「何を質問されているかわからないときがある。」という意見に対し、疑問の仕方をさらに工夫する。(もっと簡潔に説明した後には質問するなど)	指名された者(回答者)だけでなく、他の者も、自分が答えるつもりで疑問を注意深く聞き、そして考えるようにする。
理科	課題を与える時間の前半は、不要な説明をせず、じっくりと課題に取り組めるようにする。後半の説明を始める時間を予告する。	時間内に課題を処理できるように努めること。分からないことがあれば、質問すること。
外国語	授業用プリントを用いて、区切り・対訳はもとより、単語・熟語、構文・文法のポイント部分を提示するようにする。	本文を書き写し、語彙を調べる予習を怠らない。ノートでまとめ、ノートで復習する習慣をつける。意味や区切りに注意して、暗唱できるまで読む。
保健・体育	授業計画を立てて、授業の流れを明確にし、習熟度に応じて、計画を見直す。生徒スポーツの重要性を考え、ゲームを中心とした主体的な学習活動を増やす。	自分たちでゲーム内容や練習内容の改善について考える。自分にあったスポーツを見つけ、できれば同じ種目を継続してほしい。
家庭	授業に興味を持てるよう、体験や実験等を積極的に取り入れる。	課題は、期限までに必ず提出する。
情報	板書について、できるだけわかりやすく書くように心がける。	板書のなかでわかりにくいところは、その都度、質問するようにする。

成果と課題

- 指導方法等の改善の必要性について、教員の意識が変わり、授業改善の前進が認められた。
- 予習・復習の時間が増加するなど、生徒の学習に対する取組み姿勢に変化がみられた。
- 授業アンケートの質問項目を精選する。
- 授業アンケートの継続的な実施及び分析・活用方法の検討を行う。
- さらなる授業改善のための研究・実践を、事業終了後も継続して実施する。

表Ⅳ-5-③ 生徒へのアンケート結果(平成17年3月)

授業アンケートの後、先生の授業内容が改善されたと思うか。

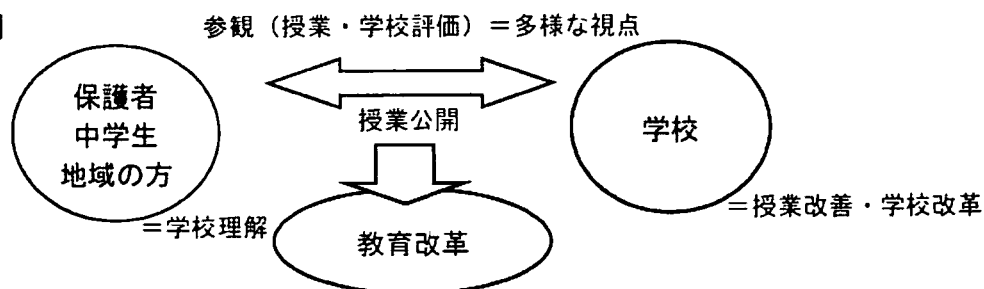
	1年(%)	2年(%)	全体(%)
1 そう思う	5	16	11
2 どちらかといえばそう思う	49	65	57
3 どちらかといえばそう思わない	29	10	19
4 そう思わない	16	8	12

授業アンケート(自己評価)により、自分の学習への取組姿勢が変わったか。

	1年(%)	2年(%)	全体(%)
1 そう思う	8	11	9
2 どちらかといえばそう思う	46	59	53
3 どちらかといえばそう思わない	30	16	23
4 そう思わない	15	11	13

保護者、中学生、地域の方にありのままの姿の学校を見てもらう

〔概要〕



できるだけ多くの方が参加しやすい授業公開にする

本校では、平成17年5月14日(土)にオープンスクール（授業公開）を実施した。オープンスクールは、文字どおり学校をオープンにして、誰でも自由に授業を参観してもらうものであるが、その対象を、本校生徒の保護者、本校への進学を考える中学生、学校近隣にお住まいの方とし、それらの方々ができるだけ多く参加できる日程を考えた。

本校では、例年PTA総会を第1回考査（一学期中間考査に当たる）期間中の土曜日に実施していたが、それを一週間早め、同じ日にオープンスクールを実施することにした。

保護者には、生徒を通じ、PTA総会と合わせて案内状を配布した。近隣の中学校には直接、それ以外の中学校には教育事務所を通じて案内をした。また、学校近隣の方には公民館を通じて案内をした。さらに、学校のホームページを通して広く参加を呼びかけた。その結果、保護者85人、中学生37人、その他9人の合計131人という多数の方に参加していただくことができた。

授業は、午前中に3時間実施し、すべての授業を参観できるようにした。教室の窓と扉は開けておき、教室の出入りは自由とし、廊下からも授業の様子が見えるようにした。ほとんどの授業において数人から十数人の参観者があった。

時間割は、事前にホームページで公開しておいた。当日も受付で教室配置図とともに時間割表を配った。



会場入り口



公開授業風景

また、本校の学校案内パンフレットを縮小印刷したものも配布した。

「誰でも参加できる公開授業」は、不特定多数の方々に校舎への出入りを許可するわけであり、学校の安全管理に留意する必要がある。そこで、授業で使用しない教室は施錠し、教員の巡視を行うとともに、不測の事態に備えて、ガードマン2人による警備も導入した。初の試みであったが、特に混乱もなく終了することができた。

きめ細かなアンケートにより、実施方法を検証し、今後に改善につなげる

来校者にはアンケートを実施した。ほとんどの方が、オープンスクールを肯定的にとらえていることがわかった。アンケートには、今回の行事や学校全体に対する意見だけでなく、参観した授業ごとの感想を書く欄も設けた。多くは、「楽しそうだった」「生徒はよく集中していた」等の好意的な意見であったが、教師の指導の仕方や、生徒の態度・服装に対する厳しい意見もあった。アンケート用紙は、その全てを綴じて教員間で回覧し、各自の授業に対する感想などを授業改善に役立ててもらふこととした。また、教員対象のアンケートも実施した。こちらも、オープンスクールに対して肯定的な意見が多いものの、その割合は余り高

くない。準備期間を確保し、教員間での趣旨理解の徹底を図る必要があると思われる。また、考査など他の行事との関連で、実施時間帯や開催時期等について、来年度以降検討すべき意見も多く出されている。

図Ⅳ-6-① アンケート用紙

アンケートに御協力ください

本日は、オープンスクールにお越しくださいました。ありがとうございます。
この質問にお答えください（右の欄は数字でお答えください）

Q1 あなたは
1. 本校近隣の保護者 2. 近隣にお住まいの方 3. 中学校の教員
4. 中学生 5. その他

Q2 本日の行事をどのようにしてお知りになりましたか
1. 本校生徒を通して 2. 本校のHPを見て
3. 学校の公民館からの案内で 4. その他

Q3 本日のオープンスクールに参加されたの感想ははどうでしたか
1. よかった 2. どちらともいえない 3. よくなかった

Q4 オープンスクールは、来年度以降も実施すべきだと思いますか
1. 来年度以降も実施すべき 2. どちらともいえない 3. 実施しなくてよい

Q5 御覧になった授業と、簡単な感想をお願いします

科目	授業名	感想

Q6 西泉高校の施設や生徒の様子を見られての御意見・御感想、また、西泉高校への御希望・御質問等、自由にお書きください

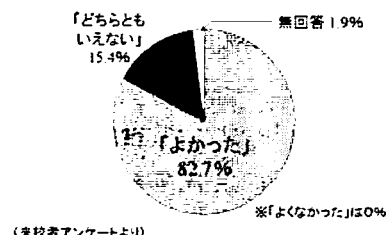
※記入の欄は自由です

成果と課題

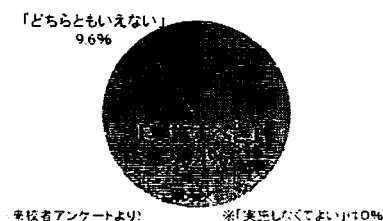
- 本校への進学を考える中学生にとって、有効な情報提供の場となった。
- 保護者や学校近隣の方の、学校への理解が深まった。
- 第三者からの授業に対する客観的な意見が、学校改革・授業改善につながる。
- 生徒・教員ともに授業への積極的な取り組みの動機付けとなった。
- 実施時期や実施方法には検討の余地がある。
- 校内の準備体制が不十分であった。教員間での趣旨徹底を図る必要がある。
- 「学校の安全の確保」と「情報公開」という、一見相反する事柄をどのように調和させるかについて検討の余地がある。

図Ⅳ-6-② アンケート結果

オープンスクールに参加しての感想

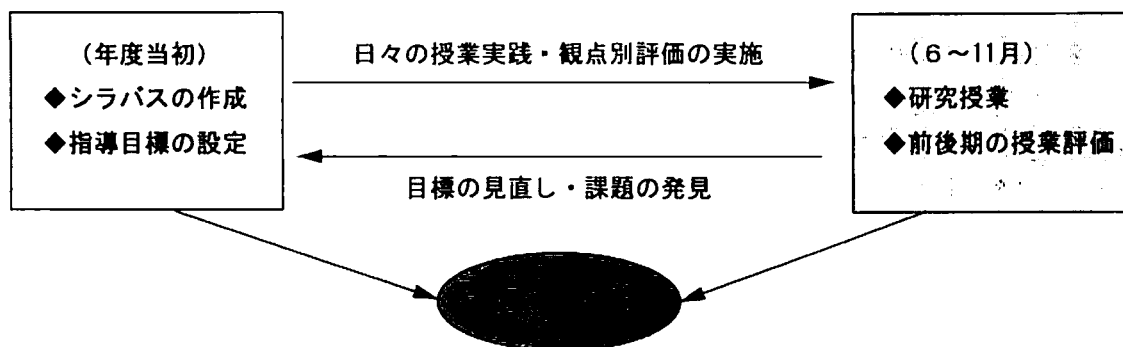


オープンスクールは来年度以降も実施すべきだと思いますか



授業研修プロジェクトにより、授業改善を進める

[概要]



授業改善に向け、授業研修プロジェクトを導入する

授業研修プロジェクトとは、日常の授業実践の中で、創意工夫を凝らして学力向上を図るものである。

プロジェクトでは、年度当初に「シラバスの作成」「指導目標の設定」を行い、日々の授業及び評価を実践していく。その際、四つの観点に基づく「観点別評価」を導入し、評価の面からも授業の改善を図る。さらに、指導上の課題発見や目標の見直しなど授業改善につなげていくために、全教科で年1回の「研究授業」や前期・後期の「授業評価」を実施した。

平成15年度は、これらの授業研修プロジェクトの大まかなサイクルができあがった1年であった。

授業研修プロジェクトを充実させることで授業改善を図る

2年目となった平成16年度からは、年度当初に各教科で明確な指導目標を設定してもらうこととした。これにより、授業で何を求めるのかを明確にするとともに、シラバスの活用を推進できると考えた。また、研究授業を全教科で実施した。これにより、授業研修プロジェクトのサイクルを軌

道に乗せることができた。しかし、目標の設定を教科単位としたために大まかなものになってしまった点、目標を授業評価に十分反映できなかった点、そして研究授業において観点別評価を指導案に組み込む点などは3年目の課題となった。

3年目となる平成17年度は、昨年度までの反省に基づき、下表のように、目標設定を科目単位で実施した。こうした目標の設定方法としたことにより、各科目の授業評価も、より授業改善に結びつくものとなった。

表IV-7-① 教科・科目指導目標（平成17年度 抜粋）

国語科

- 1年 現代文：読解・表現のための基礎を養う学習の充実
古 典：予習・復習の徹底
文法力・単語力の育成
(小テスト、合格まで追試)

数学科

- 2年 授業と家庭学習をとおして、予習・復習をする習慣を身に付けさせ、基本的な概念や原理・法則の理解を深め、計算力や思考力が身に付くようにする。

理 科

- 1年 授業をとおして、2年次の理科の授業で必要となる基本的な概念・法則を理解させる（理科総合A）。

観点別評価に取り組み、授業改善を図る

本校では四つの観点に基づく観点別評価を推進している。

観点別評価の導入により、きめ細かな評価を実現することはもちろんであるが、様々な観点から評価の内容・方法を考えることは、より計画的な授業展開を考えることにつながり、授業のねらいをより明確に生徒に示すことができるようになる。また、平成16年度版のシラバスの作成にあたっては、表Ⅳ-7-②に示すように、評価の観点

や方法を書き込むこととし、生徒に、何を学習し、どう評価されるのかを知らせることで、計画的な学習を促すことができるようになった。

確かに、観点別評価の実施により、評価資料の作成など、教員の負担も大きくなるが、それ以上に、テストの得点だけではみることのできない生徒の力が発見でき、生徒理解につながる良い機会となっている。

また、授業改善という観点からは、観点別評価で得られたデータ等から、生徒が十分に理解できていない領域も把握でき、その後の指導の改善に生かすことができた。

表Ⅳ-7-② シラバス内の評価の観点について（例：英語Ⅰ）

【評価の観点】

評価の観点	観 点 の 趣 旨
関心・意欲・態度【関】	コミュニケーションに関心をもち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとしているか。
理解の能力【理】	日常的な話題について、英語を聞いたり読んだりして、情報や考えなど相手が伝えようとすることを理解することができるか。
表現の能力【表】	日常的な話題について、情報や考えなど伝えたいことを英語で話したり、書いたりして表現することができるか。
知識・理解【知】	日常的な話題についての英語の学習をとおして、言語やその運用についての知識を身に付けるとともに、その背景にある文化などを理解しているか。

【評価の方法】 上記の四つの観点から学習評価をします。

- 1 中間と期末の定期考査の成績、小テスト、課題レポート、プリント、演習ノートなどの提出物、学習活動への取り組みの様子などで評価します。
- 2 学習全体の評価は、【関】は10%、【理】は20%、【表】は20%、【知】は50%の配分で行います。

研究授業に取り組み、授業改善を図る

授業研修プロジェクトの中で、実際の授業力の向上を図るのに重要な取り組みが、全教科で年1回取り組むこととした研究授業であった。

研究授業を誰が行うかは、年度当初に教科・科目の設定目標を研究研修部に提出してもらう際に合わせて決定した。研究授業の実施に際して、教

員数の少ない芸術・家庭科などは、公開授業という形で一定の期間を設定し、多くの先生方に参観してもらえるように工夫した。

授業者の決定については、若い教員に偏ったり、毎年同じ教員になったりという問題もあったが、教科内外の教員が参加することで、授業をする、しないにかかわらず刺激を得ることができる場となった。

研究授業の実施に際して注意したことは、下表

また、授業後の反省会においても、評価の観点

このように、研究授業を実施することにより、授業者はもちろん、参観者にとっても授業改善を図ることのできる貴重な機会となった。

表Ⅳ-7-③ 評価の観点を含んだ指導案（抜粋）

一國語科 1 年 古文一

表Ⅳ-7-④ 評価の観点を含んだ指導案（抜粋）

—数学科2年 数学Ⅱ—

$$\textcircled{2} \int_{\alpha}^{\beta} f(x)dx = -\frac{1}{6}(\beta - \alpha)^3 \quad \text{を用いた計算の有用性を認識させる。}$$

(3) 本時の評価規準

①積分区間での2曲線の上下関係について、グラフを用いて考察することができる。

(数学的な見方や考え方、表現・処理)

$$\textcircled{2} \int_{\alpha}^{\beta} f(x)dx = -\frac{1}{6}(\beta - \alpha)^3 \quad \text{を利用して計算しようとする。 (関心・意欲・態度、知識・理解)}$$

学校全体で、組織的に、授業研修プロジェクトに取り組むことで、学力向上の基本となる「日々の授業改善」を推進することができた。

特に、研究授業や観点別評価への取組みは、シラバス作成や授業評価と合わせ、教員の意識を変

えていくことに大きな役割を果たしたといえる。

そして、こうした授業改革の中で、生徒による授業評価を実施することにより、その評価結果を活用して、さらなる授業改善が行われていくものと期待している。

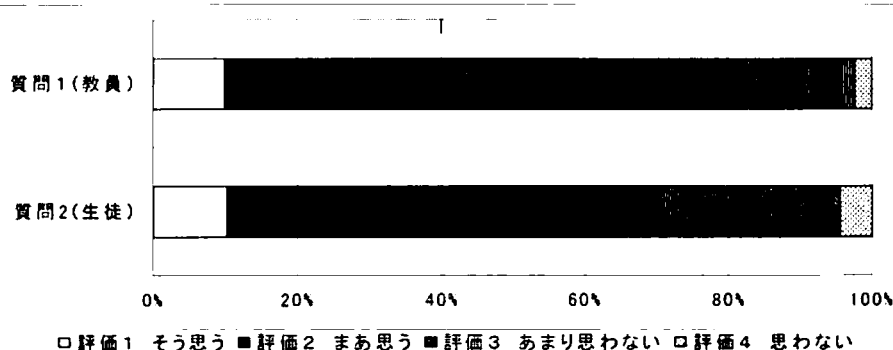
成果と課題

- 生徒の学習意欲の向上を図るため、各教科において、授業展開の工夫・改善がみられた。
- 教科・科目の年間指導目標が、生徒に十分理解されていないという課題がある。

学力向上フロンティアハイスクール事業アンケート結果より

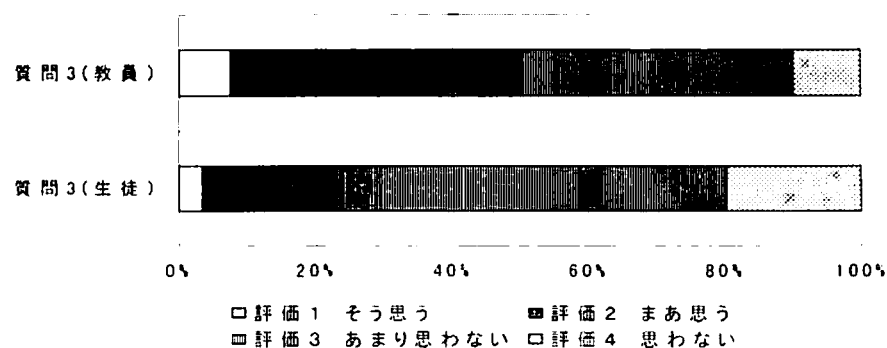
教員質問1 学習意欲の向上に努めた授業展開がなされていますか。

生徒質問2 先生方は学習意欲の向上に努めた授業展開をしていますか。



教員質問3 教科・科目の年間指導目標について、生徒に十分知らせていますか。

生徒質問4 あなたは教科・科目の年間指導目標について、理解していますか。



V章 学びの意義や生き方を考える体験や 学習をどのように充実させるか

- 1 科目の履修指導をどのように行うか
- 2 卒業生による講話をどのように行うか
- 3 社会人による講話をどのように行うか
- 4 大学との連携をどのように進めるか
- 5 インターンシップをどのように行うか① ー専門学科ー
- 6 インターンシップをどのように行うか② ー普通科ー

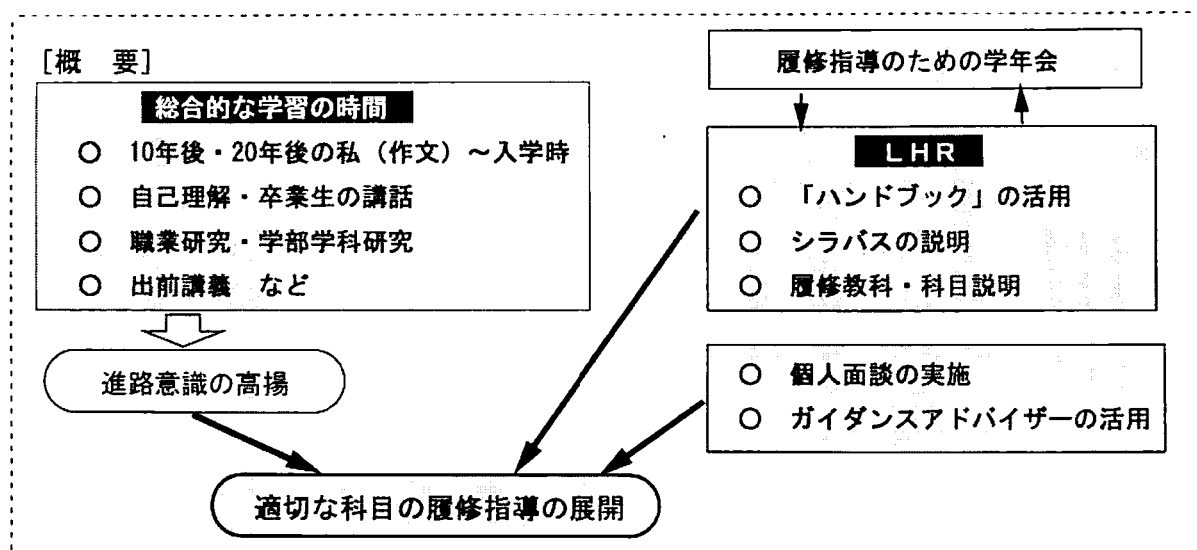


校外での国際協力体験



保育所でのインターンシップ

LHRや総合的な学習の時間を活用して進路意識を高めながら、科目の履修指導を進める



「ハンドブック」を活用して履修指導を進める

本校では、単位制に移行した平成15年度から、今までのコース・科目選択に比べ、よりきめ細かな履修指導が必要となってきた。

そこで、履修指導を含め、学校生活全般にわたる「ハンドブック」の作成を平成15年度から開始した。また、保護者向けにも、入学時に学校生活全般について記した「保護者のための便覧」を作成して配布している。

科目の履修指導は、主にLHRと個人面談を通じて行うが、本校の履修手続きについては、以下のとおりである。

文理分けは1年次に行う。1・2年生とも、1学期のLHRで説明を重ね、6月に個人面談及び仮登録を行う。夏休みの保護者会で、保護者を交えて話し合い、9・10月にLHRや個人面談等を通じて本登録するという流れになっている。

この中で、特に1学期のLHRで活用しているのが「ハンドブック」である。4～5月にかけて、履修登録の流れや科目選択について「ハンドブック」[第2部]を使用して説明している。

表V-1-① 「ハンドブック」 目次

はじめに

[第1部] 本校の概要、高校生活について

- 1 学校の沿革・概要
- 2 校歌
- 3 校訓と教育目標 本校がめざすもの
- 4 高校生活の心構え

[第2部] 学習、履修登録について

- 1 学習について
- 2 履修登録について
- 3 教育課程表
- 4 講座一覧表
- 5 進路別講座グループ表

[第3部] 講座科目の案内（シラバス）

（略）全教科掲載

[第4部] 各分掌から

（略）全分掌・事務室掲載

この「ハンドブック」は、シラバスの見方を含め、実効性の高い資料として活用でき、履修指導をスムーズに進めることができた。また、「ハンドブック」には、生徒が書き込めるシートも掲載しており、個人面談の際にも活用している。

**履修指導のための学年会議を開催することで
教員間の共通な理解を図る**

毎年、構成が変わる学年担任団が、共通した理解のもとで指導にあたることができるよう考えたのが、履修指導のための学年会議の開催である。

実際にホームルーム担任が履修指導を行う際に、最大の課題となったのは、複雑になった単位制のカリキュラムを生徒にわかりやすく説明することであった。

週1回開催する履修指導のための学年会議では、研究研修部と担任との間で、カリキュラムの説明並びにLHRの進め方について慎重に協議を重ね、共通した理解が図られるよう努めた。また、個人面談において、担任だけで判断できないような事例が出てきた場合は学年会議を活用して対処した。

このように共通した理解をもって履修指導を進めていくことで、生徒一人ひとりに対するきめ細かな指導が可能となった。

**各学年のガイダンスアドバイザーを活用し
科目の履修指導をサポートする**

履修指導は担任教員の主導で展開するが、生徒の進路希望によっては担任以外の教員の力が必要となる。また、履修指導だけでなく、進路指導全般において、生徒一人ひとりへのきめ細かな指導の充実を図る必要が出てきた。

そこで、平成16年度より、ガイダンスアドバイザーと称する教員を、各学年に（教務・進路・研究研修部から）文・理1名ずつ配置することとした。担任と横の連携を強化する必要が新たに生じたが、ガイダンスアドバイザーのサポートにより、生徒は、より多くの教員と相談する機会を得て、様々な角度から進路希望や履修登録を考えることができるようになった。

**総合的な学習の時間を利用して進路意識を
高め、科目選択の重要性に気付かせる**

本校の総合的な学習の時間は、「未来工房」という。生徒が、この時間を使って、一人ひとりの未来をデザインし、その未来を作るための方法を具体的に考えながら、実現していったほしいということから、この名前を付けた。

そして、この時間の3年間のカリキュラムを、表V-1-②のように作成した。

表V-1-② 「総合的な学習の時間 ー未来工房ー」 のカリキュラム

学 年	テ ー マ	実 施 内 容
1 年 ー自分探しの道ー	はじめに	南高の総合のガイダンス ポートフォリオ評価について
	自分探しの道	(1) 自己理解 (2) 職業研究 (3) 学問研究 オープンキャンパスへ行こう
	社会問題から進路を考える	(1) 視野を広げる（小論文） (2) 課題研究
	おわりに	1年次の振り返り 2年次に向けて
2 年 ー自己実現の深化ー	自己理解の深化	(1) 国際理解を通じた自己理解 (2) 学部学科研究
	社会問題から進路を考える	(1) 課題研究（ディベート含む） (2) 視野を広げる（小論文）
	おわりに	2年次の振り返り 3年次に向けて
3 年 ー夢の実現へー	自己理解	自己理解
	進路研究	進路研究
	夢の実現へ	(1) 勝負ポートフォリオ作成 (2) 小論文

この時間を利用して、1年生では卒業生の講話から、先輩がどのように将来を考えて進路を決定し、今日まで頑張ってきたかを知り、一人ひとりが将来を考えるヒントを得て、その後の職業研究につなげている。ここ3年間は、看護師・公務員（市役所）・弁護士の方に協力を依頼した。今後とも、様々な職種の方に協力を仰ぎ、その貴重な話を聞くことで、生徒一人ひとりの進路選択に役立つものとしたと考えている。

また、2年生では国際理解をとおして自己理解を深めるという目的に沿って、国際社会の中で起きる様々な課題に対し、自分なら何ができるかということを将来の職業と結びつけて考えることとしている。そして、この学習の最後に、青年海外協力隊OVの方の講話を通じて国際理解はもちろんのこと、自己理解を深めている。この3年間で、トンガ、ルーマニア、セネガルの、様々な職種や経験をもつ方を招き、生徒は様々な視点から学習を深めることができた。

さらに、1・2年生を対象として、大学等の先生方の出前講義を実施している。

具体的には、1年生は「課題研究」の1時間目にテーマへの興味・関心を高められるように、2年生は「学部・学科研究」の仕上げとして希望する学部への理解を深められるようにという趣旨で実施した。こうした学習は、生徒一人ひとりが自らの進路を深く考えたり、具体的な進学希望先について考えたりするよい機会となっている。また、様々な大学等に講義を依頼することで、生徒が設定した研究テーマや生徒のニーズに沿った講義を実現することができた。

そして、1・2年生とも、「福祉」「環境」など



出前講義の様子（1年）



出前講義の様子（2年）

の研究テーマを各自の進路希望に関連させた形で学習の深化を図ることにより、自分の将来について一層深く考えることができるようになった。また、「課題研究」では下の写真のように、発表や討論をとおして、表現力の向上を図ることもできた。このように、本校では総合的な学習の時間の効果的な活用により、生徒の進路に対する意識を高めることに努めている。



課題研究での発表場面（1年）



課題研究でのディベート（2年）

校外における体験的学習への参加を通して
進路意識を一層高める

生徒は、総合的な学習の時間に積極的に取り組むことにより、自己の進路を考える上で参考となるような外部の催し物にも主体的に参加するようになった。

具体的には、全員の参加を義務付けている1年生だけでなく、2・3年生についても積極的にオープンキャンパスに参加するようになった。

また、国際関係に興味のある生徒は、アジア高校生会議、JICA中国の高校生国際協力体験プログラム、JICA九州による研修員との交流プログラム、韓国への研修旅行等に参加したり、農学系に関心のある生徒は、滞在型の農業・農村研修体験へ参加したり、医療・福祉系に関心がある生徒は看護体験や介護体験に参加したり、総合的な学習の時間におけるディベート学習をきっかけに、ディベート甲子園中国大会へ参加したりするなど、種々

の校外活動への積極的な参加がみられるようになった。

こうした校外の学習や活動を通じて、自らの進路について考えを深めることは、科目の履修指導を進めていく上で、総合的な学習の時間とともに大いに役立っていると考えられる。



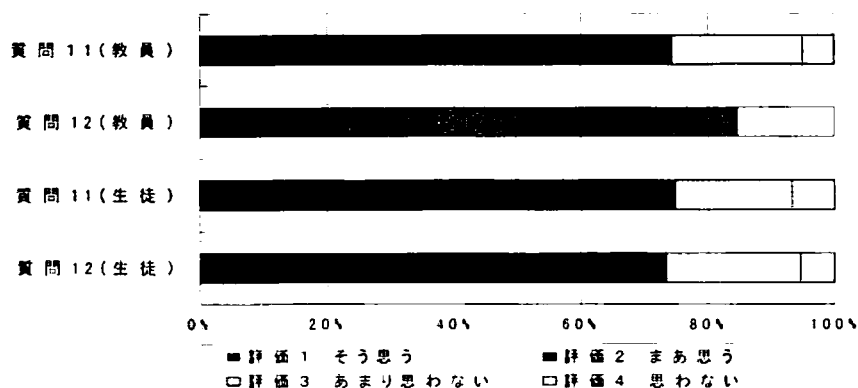
JICA中国 高校生国際協力体験プログラム

成果と課題

- 総合的な学習の時間が、生徒の進路意識を高めるのに役立っていることが確認された。

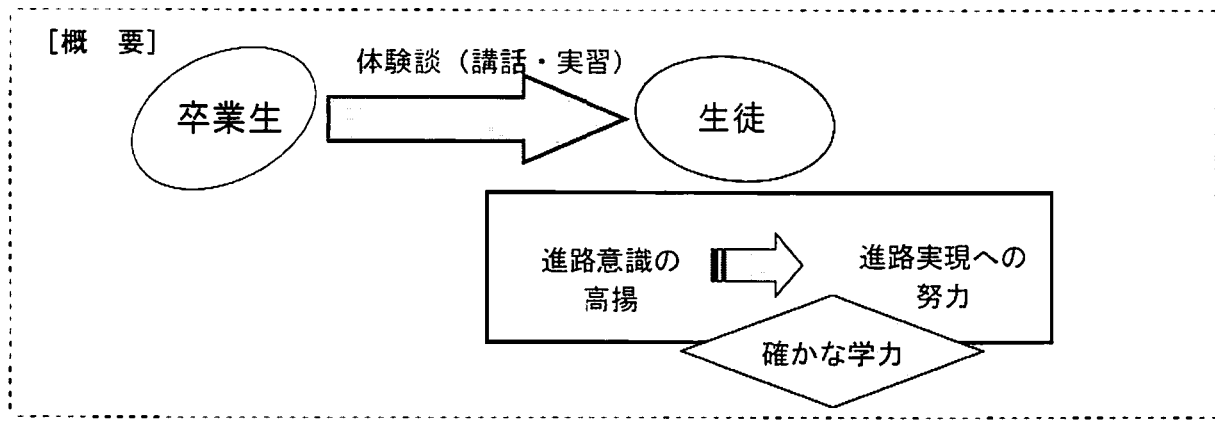
学力向上フロンティアハイスクール事業 アンケート結果より

- 質問11 総合的な学習の時間における職業研究・学部学科研究は進路意識を高めるのに役立っていますか。
- 質問12 出前講義や外部講師による講演会は進路意識を高めるのに役立っていますか。



- 科目選択や進路について、生徒が多く教員に相談できるガイダンスアドバイザーの仕組みをつくったが、その実効性を高めるため、教員間の連携を更に図る必要がある。

卒業生（先輩）の体験談を聞き、自己の生き方を考える



身近な存在である卒業生の話を聞きながら、
自己の在り方生き方を考える

卒業生を呼ぶ最大のメリットは、彼らが在校生にとって身近な存在であり、その話が大きな説得力をもつことにある。卒業生側も、学校の実情を



講義での質問風景

よくわかっており、それに即した話が展開できる。様々な進路関連の行事を行うが、やはり、生徒が関心を強くもてる講師を選ぶことが重要である。また、決して進路意識が高いとはいえない1・2年の時期に行うことは、早い段階から生徒の進路意識を高める有効な方法であると考えられる。

生徒の感想（1）

講師の方が自分たちの先輩ということで、とても身近に感じ、聴きやすかったです。今、

何をすればよいのか、ただ就職すればよいというものではなく、夢や希望が大切だということが分かりました。3年生になって就職するとき、自分の希望が叶うように、今、頑張りたいと思いました。早く先輩たちのように目標を見つけたいです。

卒業生は3つのテーマで話をする



実習を含む講義

目的に沿うように、卒業生には次の3つのテーマを中心に自分の体験を話してもらうよう、依頼した（一人あたり15分～30分）。

- 進路実現に向けての高校時代の過ごし方
- 現在どのような勉強・仕事をしているか
- 進学（就職）をしてみて初めてわかったこと

20前後の講座を設け、多様な進路希望に対応する

本校は普通科、普通科体育コース、会計OA科、情報処理科があるために、生徒の進路も多様である。そのため、生徒の志望にできるだけ対応できるように、数多くの講座を設けた（下記参照）。

平成15年度は19講座40人、平成16年度は20講座32人の卒業生に依頼した。旧担任・部顧問・進路部担当等を通じて、連絡・依頼を行ったが、卒業生の来校日時の調整に苦心した。しかし、生徒に

A : 人文A	(山口県立大学)
B : 人文B	(桃山学院大学)
	(福岡女学院大学)
C : 教育	(山口大学)
D : 経済	(山口大学2名)
E : 体育	(広島大学)
F : 理学	(山口大学2名)
G : 工学	(山口大学2名)
H : 看護	(岩国YMC A福祉医療)
I : 美術	(多摩美術大)
J : 音楽	(エリザベト音大)
K : 社会福祉	(山口県立大学2名)
L : 介護福祉	(山口あかり園)
M : リハビリ	(山口コメディカル学院2名)
N : 保育	(山口芸術短大2名)
O : 美容	(大村美容専門)
P : スポーツトレーナー	(福岡医健専)
Q : 就職1	(マツダ、上田メディカル)
R : 就職2	(中国日産ディーゼル)
S : 公務員	(山口県警)
	(防衛庁事務官Ⅲ種)

としては、自分の希望進路により近い講話を聴くことができ、進路実現に必要な知識の獲得、進路意識の向上という点で大きな効果があった

話のうまさではない

卒業生の一生懸命さが、後輩に届いた

身近な卒業生が講師を務めることは、話を聴く姿勢の育成にも有効であった。その話しぶり、一生懸命に語りかける姿勢が生徒の心に響いたようだ。単なる体験談で終わってしまうのではないかという懸念もあったが、それは取り越し苦労であった。卒業生が実現した進路を知り、自分たちの可能性の大きさに気付いたことが、その後の進路を考える意欲や姿勢に、大きな変化を生み出した。

生徒の感想（2）

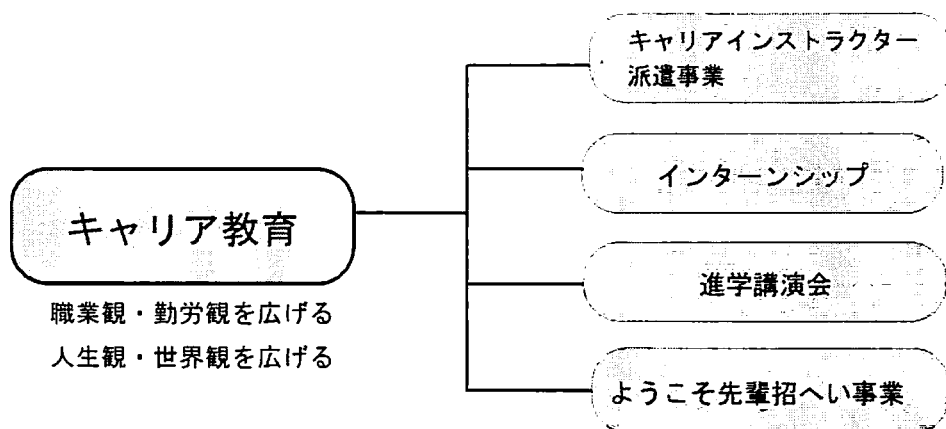
先輩方の話はリアルでよかったです。短期間のアルバイトしか経験のない私には、進路を考え直す、良い機会となりました。仕事をするということは、今までと比べものにならないほどの責任をもつことだと思います。自分の仕事に責任をもたないと周りに迷惑をかけてしまう。これからは、自分の言動など、あらゆる事に責任をもつように気を付けようと思います。

成果と課題

- 外部講師や教員が行う従来の進路講演とは異なり、身近な卒業生から心に響く話を聞くことで、生徒の進路意識や学習意欲が向上した。
- 卒業生のたどった道は自分にも実現可能であることがわかり、進路に関する高い目標がもてるようになった。
- 多様な進路希望に対応できる多くの講座を設けることは容易ではないが、卒業生の協力によりそれが可能になった。
- 講師が学生であったために、講演の内容について若干の質的差異がみられた。
- 講師との事前協議の時間を十分に設け、講演内容や趣旨などの徹底を図る必要がある。
- 1・2年生の同時実施は、進路に関する知識や意識の面で差があるため、やや無理があった。別々に行うか、十分な事前指導が必要である。

キャリアインストラクターによる講演を通じて、生徒の職業観や人生観を広げる

〔概要〕 キャリアインストラクター派遣事業を活用して、将来の生き方や仕事観、社会の現実的諸問題の理解と対応、特に「豊かに生きるとはどういうことか」について、生徒自身に考えさせる契機とする。



「どのような生き方をするか」という問いを考えさせる指導に重点を置く

本校では、生徒に将来どのような仕事に就き、どのような生き方をするかを考えさせること、変化する社会情勢への適応力を養成することを、キャリア教育の大きな目標として、生徒・保護者を対象とする様々な取組みを行っている。

特に、増加しているフリーターやニートの問題、若者の離職の問題を中心に、仕事とは何か、将来の生活をどのように設計するかなど、将来のあるべき姿や考え方の指導に重点を置いて取り組んでいる。

本校のキャリア教育の目標

どのような生き方をするか
社会への適応力の養成
仕事観の育成
社会の諸問題の理解と対応

様々なキャリアインストラクターを招き生徒の世界観を広げる

◆第1回キャリアインストラクター講演会

放送局のディレクターを講師に迎え、一見華やかに見えるマスコミの世界のあまり知られていない現実や、その仕事に従事する担当者の苦労、さらには、仕事をする上で最も大切なことについての話を聞き、その後、質疑を行った。

【内容】 放送現場の舞台裏について

- ①テレビのデジタル化の問題
- ②実況中継など放送現場の厳しさ
- ③番組表のコマーシャルの値段
- ④仕事の楽しさ等について
- ⑤仕事をする上で、人間関係について
- ⑥挨拶と礼儀の大切さについて

【生徒の感想】

僕たちは放送現場の舞台裏を見ることは、滅多にありません。テレビやCM、ラジオについて、いろいろと話をさせていただきました。CMを数秒間放映するだけで数万円が必要と聞いたときはかなり驚きました。2011年には、デジタル放送になるそうですが、今の僕には理解できませんでした。最後に挨拶の話をされましたが、僕はそこまで丁寧な挨拶をしたことがありません。早速実行してみようと思います。



キャリアインストラクター講演会

◆第2回キャリアインストラクター講演会

3年生を対象として、民間企業の経営者を講師に迎え、「仕事をするとは、どういうことなのか」というテーマについて、会社と仕事、社員の教育や人事等について、企業のトップの立場から、具体的に話を聞いた。

【内容】

- ①仕事をするとは、どういうことか
- ②離職していく若者たちについて
- ③仕事を辞めるときについて

◆第3回キャリアインストラクター講演会

1・2年生及び保護者を対象として、元県立高等学校校長を講師に招き、「身近なできごとの中から見えてくる大切なもの」について、講演を聞いた。

具体的には、人間的な魅力とは何か、生きる力とは何か、それぞれの夢を忘れないで努力することがそれぞれの将来を切り拓く力になるなど、生徒自身の生き方を改めて見つめ直すきっかけとなるような内容の話であった。

【内容】

- ①高校生の生活について
- ②野球を通して得られるもの
- ③友情について
- ④本当の優しさとは
- ⑤佐波高生に期待するもの

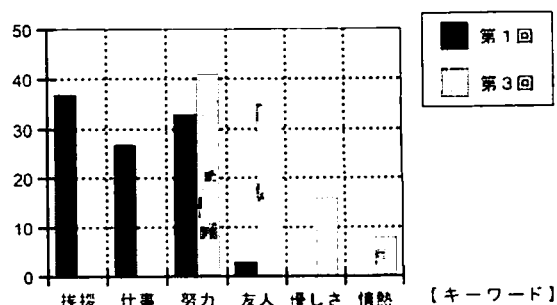
【生徒の感想】

話を聞いて、仲間の大切さや努力の大事さがよくわかりました。活躍をして脚光を浴びている人は、影でものすごい努力をして大きな人間になるんだと確信しました。野球には、大きなストーリーがあり、その中にいくつものドラマがあると思います。ただ、テレビを見ているだけではわからない仲間との友情や信頼などが、すごく伝わってきました。人間は一人では生きていけない生き物です。いろんな人と出会って、いろんなことを学んで育っていきます。今日は、津田さんや中村さんの話を聞いてよかったです。自分は、将来、社会の教員になりたいと思っています。今日の話の中にあった「努力」を大切にし、自分も大きな人間になりたいと思いました。

成果と課題

- 規範意識が薄れ、勉強や働く意欲のない生徒が増えつつある現状への対策の一つとなりうる。
- 社会人による講話は、現実の様々な問題を通して、生きていく上で大切なことを、生徒にわかりやすく伝えることができる。
 - ①離職することでの問題点
 - ②仕事上で最も大切なこと
 - ③人間関係やコミュニケーションの取り方
 - ④努力することの大切さ

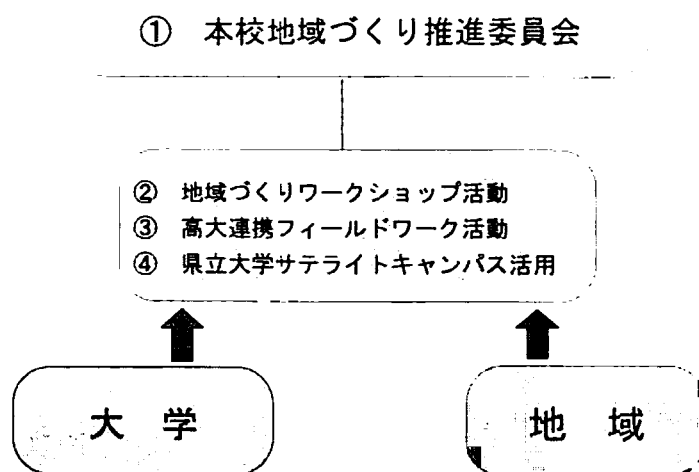
講演会のねらい(キーワード)を感想文に書いた生徒数



高校・大学・地域の連携活動から、生徒の新たな能力や可能性を発見する

〔概 要〕

高校、大学、地域が連携して、地域づくりのためのワークショップとフィールドワークを実践している。特に、地域の歴史や文化を再評価し、地域資源を研究するフィールドワークは高大連携事業として行っている。生徒の新たな知的好奇心を喚起し、学校を離れて初めて見える、生徒の様々な能力や可能性を見出す機会となっている。



地域づくり推進委員会を設け、大学や地域と連携したワークショップ活動を行う

本校では、教員と生徒からなる「地域づくり推進委員会」を設置し、地域の豊かな自然や文化を教材とする学習や活動を通して、生徒の新たな可能性を見出す取組みを行っている。

日常的に活動する生徒の推進委員は、各クラスから2名を選出し、必要に応じて、一般生徒も参加することとしている。

◆「地域づくり推進委員会」の目的

- (1) 地域の自然や文化について知識を深め、地域の人々とのふれあいの中から社会性を身に付ける。
- (2) 活動を「生きた教材」として、生徒自身

の様々な新たな能力、可能性を見出す機会とする。

- (3) 豊かな自然とともに、豊かに生きるとはどういうことかを生徒に考えさせる。
- (4) 大学との連携活動を通して、生徒の将来の進路選択に結び付けていく。

平成16年度から、高校・大学・地域が一体となって、地域づくりのためのワークショップを実施している。ワークショップは、地域の新たな観光資源や特産品の開発等について、高校生・大学生・一般の協働により提案をまとめ、その企画を実行するもので、原則として土曜日の午後（13:30～16:30）に実施している。

平成16年度は、以下のとおり、8回のワークショップを行い、その中でまとめた第1期のプロジェクトを平成17年度に実施している。

《平成16年度 ワークショップ》

第1回 7月	地域づくりを振り返って
第2回 9月	地域資源と課題の整理
第3回10月	地域づくりの活動内容
第4回10月	地域づくりのチーム作り
第5回11月	地域づくりのアイデア
第6回12月	地域づくり企画書作成
第7回 1月	企画書の検討
第8回 2月	各班の企画発表会



ワークショップにおける生徒発表風景

ワークショップの中で多様な体験を積み
世界観を広げる

平成17年度の「地域づくりプロジェクト」は以下のとおりで、本校生徒は3つのプロジェクトに参画している。

この中の国際文化交流プロジェクトについて、第1回の交流会は、平成17年7月、「国立徳地少年自然の家」及び「重源の郷」を会場に開催され、

《平成17年度 地域づくりプロジェクト》

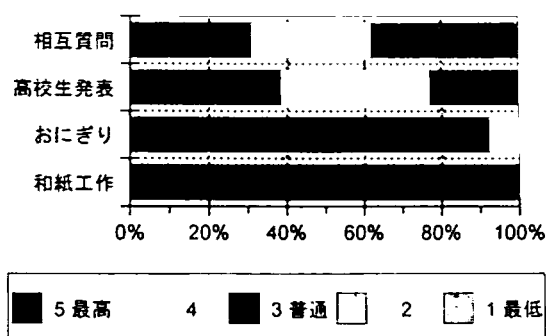
プロジェクト名	内 容
☆①温泉	温泉復活
②グリーンライフ	自然体験活動
③交流公園	高冷地野菜
④ガイド	自然と歴史を満喫
⑤廃校利用	中・長期滞在
☆⑥徳地米特産品化	ブランド化
⑦高齢者見守り	福祉事業
⑧子育て支援	生活応援
☆⑨国際文化交流	留学生との交流

☆は本校生参加プロジェクト

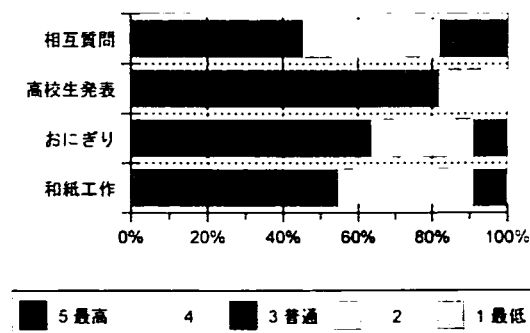
山口県立大学に留学している中国及び韓国の留学生との交流を深めた。

参加者は、山口県立大学の留学生21名、本校生徒9名、大学及び本校の教職員5名、町関係者5名の計40名で、町の紹介ビデオの視聴、和紙工作の体験、重源の郷見学、地元産米おにぎりの試食会、本校生の韓国修学旅行体験発表の他、ゲームや相互質問を通して、交流を深めた。この交流に関する留学生の評価は、下図のとおりである。

図V-4-① 留学生交流アンケート集計結果
【中国人留学生の評価】



【韓国人留学生の評価】



留学生との交流会風景

**大学と連携したフィールドワークを通して
地域のよさを再発見する**

地域の歴史や文化を再評価し、地域資源についての研究を深めるフィールドワーク活動を、高大連携事業として実施している。

参加者は、本校生徒9名、大学生6名、大学院生1名、大学教授2名、研究所員1名、本校教員3名の計22名であり、生徒の知的好奇心を喚起するとともに、学校を離れた活動を通して、生徒の新たな能力や可能性を発見する機会となっている。

◆第1回フィールドワーク（平成16年8月）

地域の歴史的・文化的遺跡を訪ね、新しい観光資源や魅力を探索するとともに、自然環境に恵まれた地域の豊かさを再発見することを目的に、町内の出雲・八坂、柚野、島地・串の3地区でフィールドワークを行った。



長者が原菰蒲園におけるフィールドワーク

◆第2回フィールドワーク（平成16年10月）

今後の地域づくり事業の展開に資するため、新規就農者、ガラス工房など、町内で積極的に活動する方々の意見や思い、仕事のノウハウ、課題等について聞き取り調査を行った。

なお、第1回及び第2回フィールドワークについては、平成16年度の本校文化祭にて、「豊かさを求める旅に出かけませんか」と題して、プレゼンテーションを用いてステージ発表を実施した。

◆第3回フィールドワーク（平成17年8月）

八坂旧商店街、紙人の家、山里農産加工販売所、ゆめ工房、重田木型など、地域のおもな企業等を訪ね、業務の内容だけでなく、仕事上の苦労話や今後の夢など、今後の生徒のキャリア発達に資すると思われる内容についても、あわせて聞き取り調査を行った。

このフィールドワークにおけるおもな聴取事項は以下のとおりである。

《第3回フィールドワークでの主な質問内容》

- ①この町に置かれた理由について
- ②販売について
- ③商品について
- ④仕事で一番苦労されたことについて
- ⑤仕事で一番大切なものについて
- ⑥今の仕事でよかったところについて
- ⑦この町の良いところについて
- ⑧生活信条について
- ⑨これからの夢について
- ⑩今の高校生・大学生について



聞き取り調査の様子

**サテライトキャンパスを活用して高大連携
の活動を進める**

サテライトキャンパスとは、町内の旧小学校跡地に、町と県立大学が結んだ包括的連携協力により、知的・人的交流拠点、地域づくりの研究施設として設立されたもので、研究、公開講座、留学

生らとの交流などに活用される。

キャンパスは、教室棟に学習・研修室や多目的室等があり、体育館は集会室としても利用できる。

イチゴやワサビなど地元農産物のブランド化の研究や、町民向けの講座、留学生や学生と地元の人たちとの相互交流が進められ、高大連携のフィールドワークやその発表の場としても活用されている。

◆サテライトキャンパス開学式（平成17年6月）

サテライトキャンパスの開学式において、山口県立大学の教授を講師とする4講座の模擬授業が、高校生や住民を対象に実施され、本校生徒22名も出席した。内容は、以下のとおりである。

《模擬授業の内容》

- ・「ボランティアってなに」 社会福祉学部
- ・「健康づくりはまちづくり、まちのこし」 看護学部
- ・「英語でのひととき」 国際文化学部
- ・「あなたにとってちょうど良い食事の量はどれくらい？」 生活科学部

◆地元農産物ブランド化発表会（平成17年11月）

地元農産物のブランド化に関する研究成果の発表会を大学生と本校生徒が合同で実施した。本校からは10名の生徒が参加した。

この発表会における本校生徒の活動内容は、以下のとおりである。

《研究発表会の内容》

大学生の指導のもとで、冷凍保存した地元産いちごを使い、イチゴとうふ、イチゴのスムージー、苺のクッキーカラメルナッツ入りの調理実習を、本校生が班ごとに分かれて実施した。

本校生徒が作ってきた地元米のクッキーと一緒に、最後に試食会を実施した。

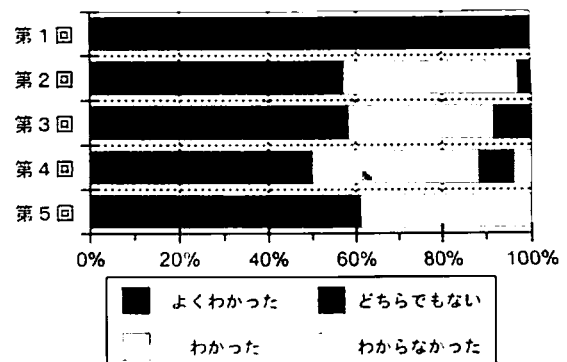


サテライトキャンパスでの調理風景

成果と課題

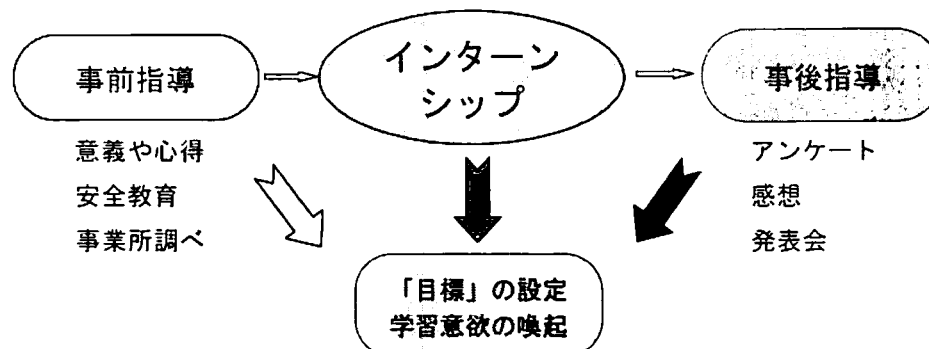
- 地域や大学と連携することにより、高校の授業では得られない、レベルの高い学習を経験できた。
- 一般の人々や大学生に混じっての議論は、生徒の知的好奇心を刺激するものが多かった。
- 毎回、全体発表の機会があるため、生徒は人前で話すことに慣れ、大きな自信につながった。
- 地域の文化や歴史に直接触れる機会を得て、見慣れた風景が新たな意味をもつものとなった。
- 大学生と一緒に活動することは、自分の将来を考える契機の一つとなった。
- 高大連携事業と関連付けて、生徒の問題意識を高揚させる取組みをどのように進めるかが課題となっている。

ワークショップに参加してその内容を理解できたか



2年生全員によるインターンシップ（工業）を実施する

【概 要】



2年生全員を対象とすることで位置付けが明確となり、効果が増大した

インターンシップの理念や目的を明確に伝え、と事業所側も対処しやすい

県内の多くの工業高校の「インターンシップ」は、夏季休業中に一部の希望生徒が実施している。

本校においても、導入当初は同様であったが、全員に体験させる方向で検討を開始し、平成13年度に福岡県の工業高校3校（うち2校は全員実施）を視察した際に、「事業所開拓は直接お願いに行き、趣旨をしっかりと説明すればどうにかなる」と聞き、本校でも実施に踏み切ることとした。平成14年度から「2年生全員によるインターンシップ」に取り組み、平成17年度で4年目を迎えている。

学校側も事業所側も無理のないよう、2日間の日程（現在は11月下旬）とした。初年度は、協力を依頼した事業所の約7割から承諾を得て、44の事業所でインターンシップを実施した。その後、多少の変動はあるが、ほとんど前年度と同じ事業所において実施している。

◆全員実施のメリット

- 授業「実習」の一部として実施しているので、生徒の意識が高まる。4年間実施して、欠席・遅刻はほとんどない。
- LHR等で事前・事後指導が徹底する。
- 巡回指導など多くの教員の協力が必要となり、教員の意識も高まり校内が活性化する。

企業活動の在り方が問われている現在、インターンシップは、企業が生徒を教育することによる社会貢献事業の一つであることや、学校も「開かれた学校」を目指していることなどを伝えれば、協力が得やすい。

◆理念

本校教育改革の一環として、インターンシップを「地域の持つ教育力の活用」と位置付け、「地域との連携」の一つとする。

◆目的

- ①学習した専門的な知識や技術の深化を図る。
- ②生産活動における「安全教育」の徹底を図る。
- ③生産活動の喜びと厳しさを通して、「ものづくり」の大切さを理解させる。
- ④基本的生活習慣と社会生活における礼儀と節度の大切さを理解させる。
- ⑤職業意識の高揚と将来の社会人としての正しい職業観を確立させる。

事前指導をしっかり行い、意欲をもって体験させる

まず、担当教員から「インターンシップノート」を使って目的等の説明を行っている。

【インターンシップノートの内容】

- 学校長から
- インターンシップ実施要項
- 遅刻・早退・欠席に関する留意事項
- 実施に当たっての心得 ○事前教育
- 体験日誌（事業所からのコメント欄）

説明の中で「各事業所では一人ひとりの言動が本校の全てであり、自らの力で本校の名声を高めてほしい」と強調して送り出すことが、生徒のやる気や頑張りにつながるるとともに、事業所からの評価も上がるなど、大きな成果につながっている。

平成14年度の事業所アンケートにおいて、「安全についての認識不足」を指摘されたため、平成15年度からは、企業の安全担当者を招き、安全教育の講演を事前に実施するようにした。さらに、平成16年度からは、インターンシップコーディネーター（山口県経営者協会）による講演を実施し、しっかりと目的や意義を認識させ、より貴重な体験となるよう事前指導の充実を図った。



インターンシップコーディネーターによるキャリア講話

事後指導を十分行い、「目標」をもたせる

インターンシップの終了後、インターンシップノートを整理しながら、感想文を書き、アンケートに答えさせる。そして、この就業体験を通じた新たな「目標」を設定させ、その達成のためには「今、何をすべきか」を考えさせる。

アンケート結果と感想文等をもとに、本年度の評価と次年度の実施方法の改善を図っている。また、これらについては、礼状とともに関係事業所に郵送し、報告にかえている。

さらに、平成17年度からは、3学期に1・2年生全員が参加する「インターンシップ発表会」を開催している。このことにより、発表生徒のプレゼンテーション能力が向上するだけでなく、他の級友の活動を知る中で、将来設計についての刺激を受ける機会となる。また、1年生にとっても、次年度に向けた気持ちの準備ができる。



建築現場での基礎工事

成果と課題

- インターンシップについては、生徒は「個人単位の校外活動」として緊張感をもって取り組み、大変有意義な体験となっており、その目的を十分達成できている。

インターンシップを実施して良かったですか（平成17年度）

「良かった」67% 「まあまあ良かった」27% 「あまり良くなかった」5% 「悪かった」1%

- 事業所にとっても「職場内が活性化できた」等の評価をいただいた。

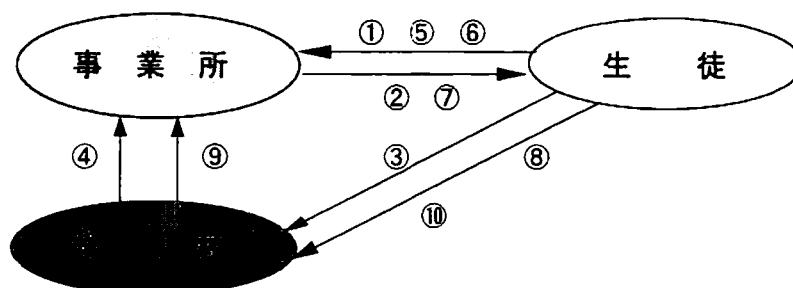
来年もインターンシップを考えていますが、御協力願えるでしょうか（平成17年度）

「協力できる」79% 「協力できない」0% 「未定」21%

- インターンシップの実施校が増加しているので、地域の関係事業所と関係学校が一体となった「インターンシップ連絡協議会」が必要になると思われる。

セルフプロデュース方式の導入によってインターンシップへの意欲を高める

【概 要】



- | | |
|-----------------------|-------------------|
| ①実習先を開拓 | ⑥インターンシップ |
| ②承諾を受ける | ⑦実習日誌の担当者欄に記入して渡す |
| ③実習先決定報告書を提出 | ⑧実習日誌・自己点検票を提出 |
| ④依頼文書発送 | ⑨学校及び生徒からの礼状発送 |
| ⑤生徒作成の依頼文書・プロフィール等を持参 | ⑩感想文提出後、体験発表会を実施 |

生徒自身が企画するインターンシップを実施して、多様な能力の育成をめざす

本校では、受入企業等の選定や、実施のために必要となる交渉や文書作成等をすべて生徒自身に行わせる「セルフプロデュース方式によるインターンシップ」に取り組んでいる。

その年間計画の概要は以下のとおりである。

◆インターンシップの指導計画

- 4月 インターンシップガイダンス
・「どんな仕事があるか考えてみよう」
・進路適性検査
- 5月 業種・職種の希望調査
実施先の開拓開始
アプローチシート配布
インターンシップの手順説明
①希望する事業所を自分で探し依頼する。
②実施先が決定次第、「インターンシップ先決定報告書」を提出する。
③実施先が決定した後、自分で依頼文書・プロフィールを作成し、事業所に持参する。

- 進路講演会
- 6月 事前講話及び研修会
・参加承諾書は保護者から提出
プロフィール（自己アピールシート）作成
実施先への依頼文作成
- 7月 インターンシップ実施先の決定
夏休み 依頼文・プロフィール・実習日誌を
実施先に本人が持参
- 9月 実施先の研究
- 10月 事前講話及び研修会
インターンシップの実施（2日間）
- 11月 礼状の発送
感想文の完成
- 12月 インターンシップ体験発表会

生徒へのガイダンスでは、Self-Produceのねらいを十分に説明する

インターンシップは、2年生全員を対象として行っており、事前指導では、以下に示す目的について十分に説明するとともに、自分自身で様々な手続きを行うことも、この学習の大きなねらいであることについて理解が深まるよう留意している。

◆インターンシップの目的

- ①職業の特色や就業を体験することによって、望ましい勤労観・職業観を育てるとともに、自己の個性を理解し、主体的・自主的に進路を選択する能力・態度を養い、あわせて学習意欲を高める。
- ②職場の人々との交流をととして、社会人としての礼儀作法を身につける。

アプローチシートにより、実施先の決定を支援する

インターンシップの実施先を決定するまでの流れは、以下のような順序で進めている。

なお、この手続きの大半を生徒自身に行わせるため、事業所等の決定が円滑になされるよう、次の「インターンシップ先アプローチシート」を全員に配布している。

インターンシップ先アプローチシート					
組 番号					
氏 名					
	事業所名	業 種	職 種	事業所住所	Id
例	金子菓子店	洋菓子製造	販売		
1					
2					
3					
4					
5					

【インターンシップ先決定までの順序】

- ①自分で通える事業所を職業電話帳等で探し、自分で先方に電話して依頼する。
- ②インターンシップ先決定次第、担任へ「インターンシップ先決定報告書」を提出する。
- ③インターンシップ先決定後、自分で依頼文書・プロフィールを作成し、事業所に持参する。
- ④7月末日までにインターンシップ先が未定の場合は学校で紹介する。

◆実施先決定までのながれ

- ①保護者に「インターンシップ承諾書」を配布し、回収する。
- ②生徒は、自分の興味・関心や適性を考え、自分で通える事業所を職業別電話帳等で探し、自分で先方に電話して受入を依頼する。
「電話のかけ方」を配布
- ③インターンシップ実施先が決定したら、担任に

「インターンシップ先決定報告書」を提出する。

- ④実施先の決定後、自分で「依頼文書」と「プロフィール」を作成する。

サンプルを配布し、学校のパソコンで作成

- ⑤学校で作成した依頼文書を事業所に発送する。
- ⑥自分で作成した「依頼文書」「プロフィール」及び学校作成の「実習日誌見本」「書類受領書」を、電話連絡をした後、自分で実施先に持参する（夏季休業中）。

この時、インターンシップ当日の出退社時間や実習時の服装、実習内容等を確認するよう指示

なお、こうしたインターンシップ実施先の決定作業と並行して、以下のような指導も進めている。

- 就職した先輩を招き職業講話を実施（6月）
- 事業所の方を招き「インターンシップの心構えや留意事項」に係る講話を実施（10月）
- 服装指導及び諸注意を行い、持参品として名札・実習日誌・自己評価票・損害賠償保険加入写真を配布（インターンシップ前日）

インターンシップの成果と課題は、実習日誌と自己評価表により検証する

インターンシップ当日は、各実施先の担当者の指示に従い就業する。終業時には、実習日誌の担当者欄に評価及び意見を記入してもらう。

教員の巡回指導



インターンシップ風景

◆インターンシップ実習日誌

インターンシップ実習日誌 (表)

月	日	曜日	時間	場所	内容
10	1	月	8:00	実習先	
10	2	火	8:00	実習先	
10	3	水	8:00	実習先	
10	4	木	8:00	実習先	
10	5	金	8:00	実習先	
10	6	土	8:00	実習先	
10	7	日	8:00	実習先	
10	8	月	8:00	実習先	
10	9	火	8:00	実習先	
10	10	水	8:00	実習先	
10	11	木	8:00	実習先	
10	12	金	8:00	実習先	
10	13	土	8:00	実習先	
10	14	日	8:00	実習先	
10	15	月	8:00	実習先	
10	16	火	8:00	実習先	
10	17	水	8:00	実習先	
10	18	木	8:00	実習先	
10	19	金	8:00	実習先	
10	20	土	8:00	実習先	
10	21	日	8:00	実習先	
10	22	月	8:00	実習先	
10	23	火	8:00	実習先	
10	24	水	8:00	実習先	
10	25	木	8:00	実習先	
10	26	金	8:00	実習先	
10	27	土	8:00	実習先	
10	28	日	8:00	実習先	
10	29	月	8:00	実習先	
10	30	火	8:00	実習先	
10	31	水	8:00	実習先	

感想、学んだこと、反省点などを記入。

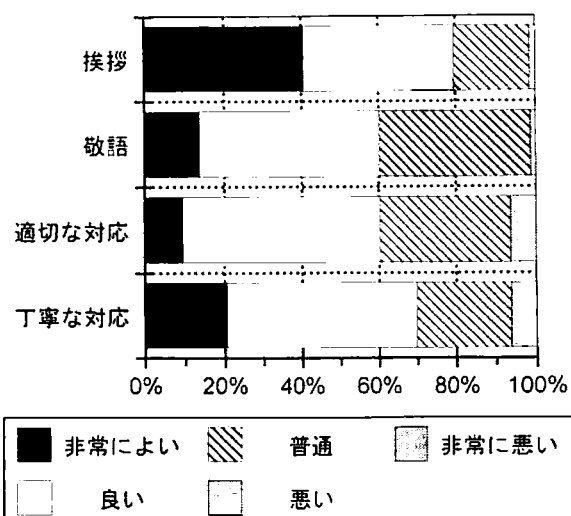
実習態度などの評価及びご意見をお願いします。

生徒記入欄	●感想、学んだこと、反省点など 昨日よりお年寄りの方とのコミュニケーションがよくとれていたと思います。入浴介助は初めてのことで、どうしていいか戸惑ったけれど、自分なりに精一杯できていたと思います。たった二日だけなのに本当に疲れました。毎日介護する人たちは本当にすごいと思いました。また、介護するには「声かけ」が大事だと思いました。おばあちゃんに「ありがとう」と言ってもらえて、本当に嬉しかったです。
担当者記入欄	●実習態度などの評価及びご意見をお願いします。 ご苦労様でした。介護の大変さを学んでいただけでしょうか。自分にとっては食事ができ、入浴できるのが当たり前なのですが、人に同じお世話をするのは難しく、まして老人介護ともなうと思うようにいかないものです。コミュニケーションがしっかりとれているようですね。笑いが少ないのが現状ですが、話をするととても楽しかったようです。ありがとうございました。この実習をもとにお年寄りに対して優しく接する気持ちをもってほしいです。

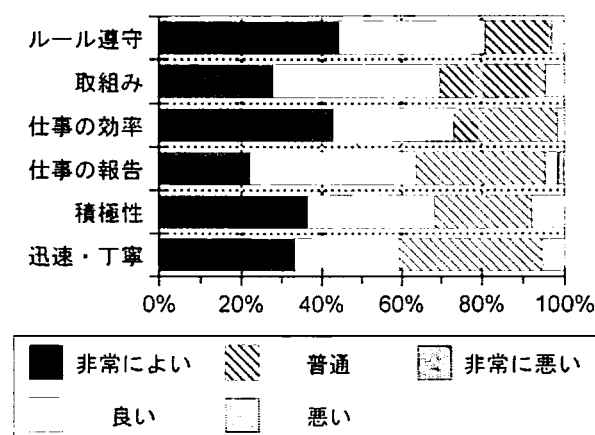
実習日誌の「生徒記入欄」及び「担当者記入欄」をみると、多くの生徒が真剣に就業したことがわかり、また、「自己評価表」の集計結果からも、インターンシップの実施期間中、服装や髪型等の身だしなみ、挨拶は概ね良好であり、実習先におけるルールも守れたことが確認された。

◆「自己評価」の集計結果

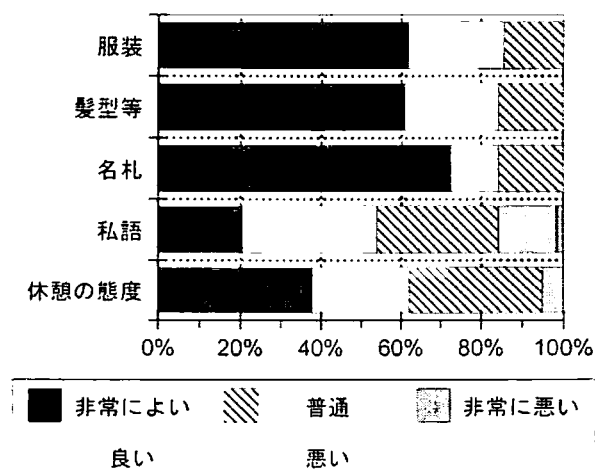
自己評価 (1) 言葉・挨拶について



自己評価 (2) 実習態度について



自己評価 (3) 身なり等について



体験発表会を行うなど事後指導の充実を図り、生徒に達成感をもたせる

インターンシップ終了後、適切な指導を行うことは非常に重要である。

礼状の作成まできちんと本人にさせること、体験発表会を実施して成果を伝える機会をもたせることなど、様々な学習活動を組み合わせることで、この体験学習の効果は倍増する。

本校では、以下のような事後指導を行っているが、体験発表や感想文は、表現力の向上を図る学習ともなっている。

◆事後指導の手順

- ①実習日誌・自己評価票を提出させ、感想文を書かせる。
- ②礼状を作成し、学校作成の礼状と一緒に事業所に発送する。

← サンプルを配布し、学校のパソコンで作成

- ③体験発表会を行う。

◆インターンシップ後の生徒の感想文

- 普通に買い物に行ってもわからないのですが、仕事場ではこんなに苦労があるのだと、仕事をして初めてわかりました。(販売店)
- いつもはしない雑用などをして、すごく疲れた

けれど、勉強になった。(販売店)

- 僕は優柔不断で何をするにも迷ってばかりだったのが、少し、将来就く職業への考えがまとまってきた。(少年自然の家)

- お年寄りとコミュニケーションができるかなど、いろいろなことが多少わかってきた。(福祉施設)

- 小さな子どもと接することが好きだということが改めてわかった。(保育園)

- 挨拶や常識をたくさん勉強できた。(販売店)

- 部屋の掃除は物があるので大変でした。掃除は、お年寄りの方にきれいなところに住んでもらうのが良いと思いました。(福祉施設)

- 職場体験で不足していたのは、笑顔と張りのある声です。日頃から小さな声しか出さない私にとって心残りです。(美容院)

- 実習した後、日常生活でもあいさつや身だしなみに気を遣うようになった。(販売店)



インターンシップ風景

成果と課題

- セルフプロデュース方式の導入について不安もあったが、自分自身でインターンシップを企画するという取組みを通して、生徒は職場開拓の厳しさを実感できた。
- 依頼の電話や接客の仕方（言葉遣い、敬語の使い方、返事をする事の大切さ）等を学んだことにより、学校生活でもけじめのある態度がとれる生徒が増えてきた。
- 生徒が自ら作成した依頼文書等の添削を繰り返すことにより、漢字力や文書作成力が向上した。
- パソコン操作が苦手であった生徒も、最後にはワープロによる文書作成ができるようになった。
- 「プロフィール（自己アピールシート）」の作成をとおして、自己の長所や短所に目を向け、職業に関する適性について自覚する生徒も出てきた。
- 実習日誌や感想文、礼状等を書く作業を通じて、「書くこと」の指導を更に深めていく。
- 「体験発表会」等の場を設定し、発表指導を通じて「話す」能力を高め、積極性を身に付けさせる。
- 生徒の自己評価表と合わせて、事業所にもインターンシップの評価表を提出してもらう。

VI章 進路意識を高め、キャリア発達を促す 教育活動をどのように展開するか

- 1 進路選択のためのガイダンスをどのように充実させるか
- 2 進路相談をどのように充実させるか
- 3 進路指導の在り方をどのように改善するか
- 4 キャリア教育をどのように充実させるか① ー普通科ー
- 5 キャリア教育をどのように充実させるか② ー総合学科ー
- 6 キャリア教育をどのように充実させるか③ ー専門学科ー

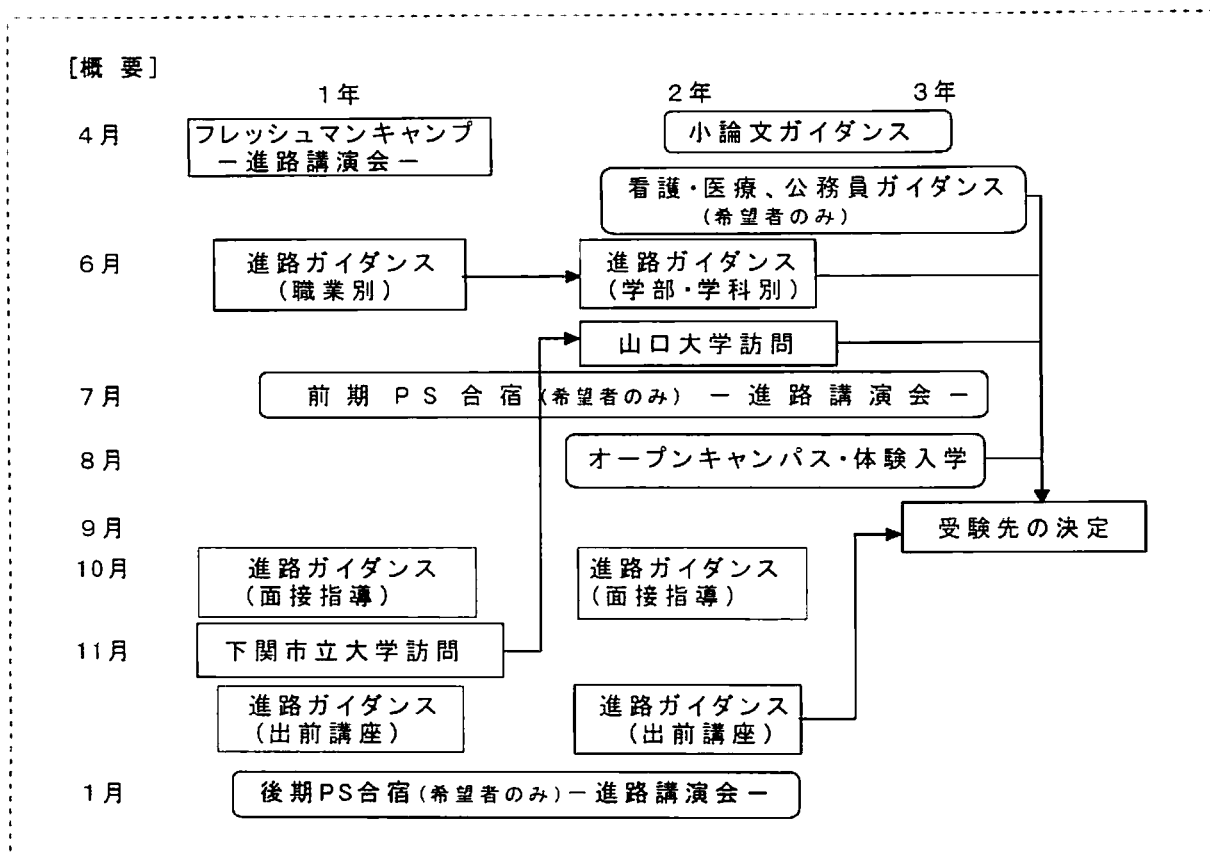


鉄工所での就業体験



高大連携による体験学習

学年に応じたガイダンスを実施し、進路に対する関心や意欲の高揚を図る



様々な分野の講師を招いた進路講演会を行い
進路意識の向上を図る

1年生の4月に実施するフレッシュマンキャンプ(学習を目的とした集団宿泊)の中で、「将来の進路設計に向けて」と題する進路講演会を、予備校など外部の講師に依頼して行っている。

これにより、
高校生活の充
実と自己の進
路実現に向け
ての動機付け
を図っている。



PS合宿での進路講演会

また、年2回、セミナーパークで開催するPS合宿(学習合宿)では、国公立大学進学希望者を対象として、大学進学のための意識の向上を図るための進路講演会を行っている。

より具体的な進路設計のため、系統性に配慮
した学年別ガイダンスを実施する

1年生の6月に実施する進路ガイダンスでは、職業別に事務、教育、福祉など18分野の中から2分野の講義を受講する。その職種の現状や課題、求められる適性、その職種に就くためにはどのような進路が考えられるかなど、各講師から丁寧にわかりやすい説明が行われる。自分の適性を考えるよい機会になることから、生徒には好評である。

2年生では、学部・学科別のガイダンスを実施している。大学・短大系統と専門学校系統の2系統に分けて行う。

大学・短大系統では、研究や講義の内容、学部や学科選びのポイントなどを説明する。また、専門学校系統では、業界の動向、適性などを説明する。さらに、両者に共通する内容として、在学中に取得できる資格、卒業後の就職先、高校時代に準備しておくといふことなどを説明する。

出前講座は、国文学系など16分野にわたって開設している。大学・短大・専門学校などから多くの講師に来ていただき、生徒との質疑応答などを行っている。

また、面接指導に関するガイダンスも重視している。1年生では、挨拶の仕方などマナー指導を中心に行う。2年生では、面接においてよく受ける質問など具体的な事例について指導する。

入試のためばかりでなく、社会人としてのマナーを身に付けさせるという観点からも、継続していきたいと考えている。



面接指導

大学訪問により、大学について知り、進学へのモチベーションを高める

進路選択のためのガイダンスの充実を図るため、1年次に下関市立大学、2年次には山口大学の訪問を行っている。

単科大学と総合大学の違いを学んだり、大学生と直接話をしたり、大学で実際に講義を受けたりすることなどに、生徒は新鮮さを感じ、進学へのモチベーションを高めている。



医療看護系のガイダンス



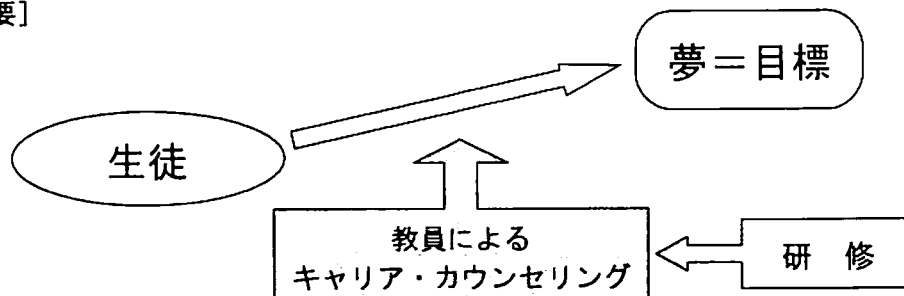
大学訪問（下関市立大学）

成果と課題

- いずれのガイダンスについても、実施後のアンケート結果をみると「役に立った」という回答が圧倒的に多く、有意義であったことを示している。
- 1年生では「知らなかったことが分かって楽しかった」などの感想が多くみられるのに対し、2年生では「自分の進路について質問等ができ、大変有意義であった」などの感想が増えるなど、生徒の成長段階に配慮した学年別ガイダンスの成果がみられた。
- 進学を考えていない生徒を含めて大学訪問を行うことについては、今後の検討課題である。

教員研修を実施して、キャリア・カウンセリング（進路相談）の充実を図る

【概 要】



キャリア教育のステップ・アップの最終段階は
カウンセリング機能の充実にある

キャリア教育については、各学校が、生徒の実情に即した形で推進しており、以下の3段階を経てステップ・アップが図られると考えられている。

① 啓発的体験の 充実	これまでの教育内容から、キャリア教育に関する事項を掘り起こすとともに、進路に関する啓発的な体験の充実を図る。
② キャリア教育 のカリキュラ ムの構築	特別活動や総合的な学習の時間とのリンク、棲み分けなどの整理を行うとともに、教科・科目を含めてキャリア教育のカリキュラムを構築する。
③ カウンセリグ 機能の充実	キャリア・ガイダンスとともに、キャリア・カウンセリングの取組方法について明確にし、実践する。

本校での本格的なキャリア教育は、平成14年度から始まり、現在②の終盤かつ③の冒頭にある。

英語では、「進路指導」のことを「Career Guidance and Counseling」というが、今後は、教員研修をさらに積むなどして、カウンセリング機能を

充実させたいと考えている。

キャリア・カウンセリングは、出口指導ではなく、生き方の相談である

キャリア・カウンセリングとは、「個人が進路や職業の選択、キャリア形成に関しての自己理解、情報の提供、職業紹介、援助を受けることによって、より適切な選択の可能性を自ら開発するようにするための個別または集団によるカウンセリング」のことである。

つまり、高校3年次に行う出口指導を中心とした相談活動ではなく、入学時から始め、一人ひとりの生き方や進路選択の悩みや迷いを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、生徒自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための指導・援助である。

◆主な取り扱い内容

- ・将来の進路への関心・意欲の高揚
- ・将来の進路の明確化（進路設計）
- ・進路適性の吟味
- ・適切な進路の選択・決定
- ・将来の社会的・職業的自己実現に関すること
- ・自己肯定感、自己有用感の伸長

カウンセリングの理論・技法を身に付け、効果的な援助を行う

これまでのカウンセリングは「診断→指示」を中心としたものであった。しかし、最近はこれを批判し、受容的・非審判的場面から構成される、非指示的な来談者中心のカウンセリングが提唱されるようになってきている。

◆カウンセラーに求められる姿勢

- 「生き方」「進路」の学習主体は、あくまでも生徒であるという認識をもつ。
- 生徒との信頼関係を大切にしている。
- 生徒の話を傾聴することを重視している。
- 上手に誉めることができる。
- 厳しい話を率直に語ることができる。
- 生徒の心の動きに敏感である。
- 生徒の成長を信頼している。
- カウンセリングについて学んでいる。
- 産業や職業の世界の推移に興味・関心がある。

◆カウンセリングの基本的なステップ

- ①カウンセリングの開始（カウンセリング関係を樹立する）
- ②問題の提起（来談の目的、何が問題なのかを明確にする）
- ③目標の設定（解決すべき問題を吟味し、最終目標を決定する）
- ④方策の実行（選択した方策を実行する）
- ⑤結果の評価（実行した方策とカウンセリング全体について評価する）
- ⑥カウンセリングとケースの終結（終了を決定し、クライアントに伝える）

◆面接技法

- ①受容、ラポール（親近感）
- ②繰り返し（反射ともいう）
- ③明確化（適切な言葉・語順に置き換えて）
- ④カウンセラーの自己開示
- ⑤対決（来談者の行動の矛盾、合理化、あいまいさ、弁解、誤解などを確認するため）
- ⑥場面構成（カウンセラー主導により、相談面接の方法・条件・目標設定等の手続きを確認する）

研修会を実施して、教員のカウンセリング能力を向上させる

本校では、キャリア・カウンセリングに関する教職員のスキルを向上させるため、以下のように、段階を踏んだ研修を実施している。

①教育相談研修会

一般的なカウンセリング技能の習熟を図るための研修会（学期に1回程度実施）

②キャリア教育研修会

キャリア教育全般に関する講演、本校教員による研修会

③キャリア・カウンセリング研修会

キャリア・カウンセリング技能の習熟に特化した研修会

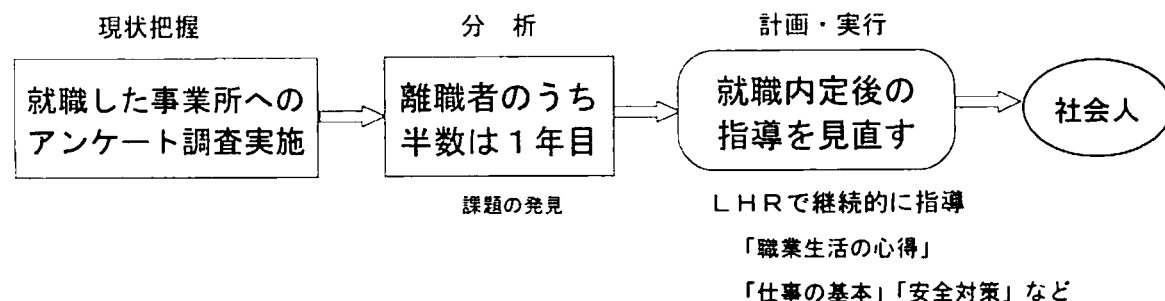


成果と課題

- 講師を招いて、キャリア教育やキャリア・カウンセリングについての教員研修会を実施し、各教員が生徒への対応を見直す良い機会となった。今後とも、教員一人ひとりのカウンセリング技能を向上させる研修会を更に増やしていきたいと考えている。
- 生徒に対するキャリア・カウンセリングを定期的に行っている状況にはないので、今後は、1年次から組織的なカウンセリングを行う体制（ジョブカフェ的なものなど）を構築していきたい。

就職した卒業生の追跡調査を実施して、その結果から就職内定後の指導の在り方を見直し、次のステップにつなげる

〔概 要〕



キャリア教育は、継続的で発展的な指導である

これまでの進路指導は、「進路決定の指導」に重点が置かれ、志望先の選択・決定等にかかる「出口指導」になっている状況が見受けられた。

◆キャリア教育の枠組み (の部分)

	進路発達の指導	進路決定の指導
集団指導	従来の進路指導	
個別指導		

確かに、集団を対象とした「進路発達の指導」については、インターンシップをはじめとした体験活動が実施されるようになってきたが、それぞれの生徒の進路意識の向上や内面の発達に結びつける指導については、まだまだ不十分である。

一方、個人を対象とした「進路発達の指導」については、極めて少ない。このことは、キャリア発達を支援する際に最も重要な個性の伸長という視点に立ち返った指導、その過程における生徒一人ひとりの発達の評価などが重要視されてこなかったことを示している。

また、キャリア教育は、生涯にわたるキャリアの基盤形成という面からも、継続的かつ発展的に見直していく必要がある。

現状把握のために卒業生の動向調査を実施した

キャリア教育登場の背景には、早期離職問題やフリーター、ニートの問題が指摘されている。

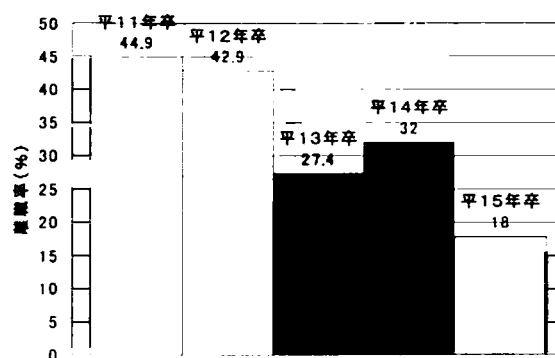
全国的な傾向は分かっていたが、本校独自の現状を把握するために、平成16年度に卒業後の動向調査を実施した。

【方法】就職先事業所へ郵送アンケート

【対象】事業所223 回答数191 回収率86.4%

平成11年～15年度卒の5年間の就職者

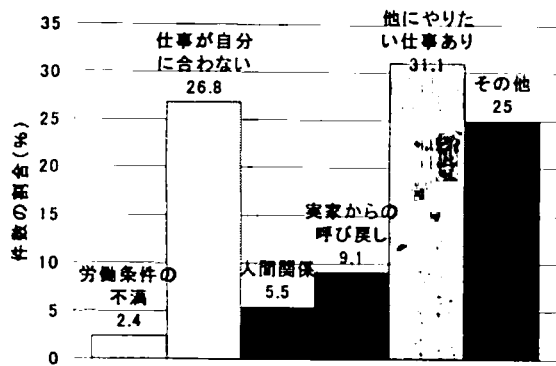
①本校卒業生の年度別離職率



○離職者160名／479名→33.4%で全国平均48.3%と比較して、本校卒業生の定着率は良い。

○平成13年度卒は、平成10年度から開始した「くくり入学」後、初めての卒業生であり、進路支援の成果とみることもできる。

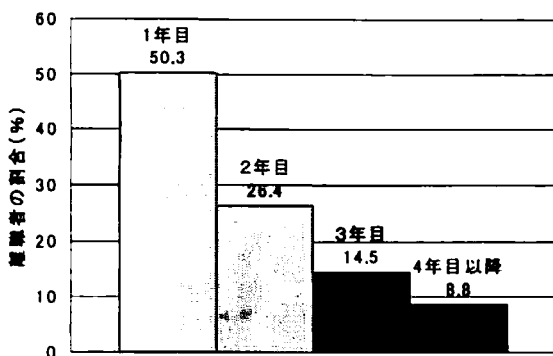
②企業が答えた離職理由（複数回答あり）



○離職理由は、「仕事と合わない」「他の仕事への希望」が多い。

○就職前に適切な進路支援が必要である。

③就職して何年目に離職したか



○「1年目」の離職者がほぼ半数を占めており、いわゆるミスマッチや、学生と社会人のギャップの大きさ、コミュニケーション不足等に起因するものと思われる。

○逆に、1年目を乗り越えれば、早期離職が大幅に改善されると考えられ、就職内定後の、社会人となるための教育の重要性が明らかになった。

就職内定後の指導を見直し、次のステージ（社会人）につなげる

これまでの進路指導は、「進路決定」の指導になりがちで、10月頃までに「就職内定」した生徒に対する指導は、卒業間近のキャリア講話（社会人の心得、消費者啓発講座）くらいであった。

LHRも、10月過ぎからは「自由主題」が増える状況にあったため、平成17年度からは、進路発達に関する集団指導を「キャリア・アップ・セミナー」と称して、11月に3回実施することとした。

◆キャリア・アップ・セミナー

【期日】平成17年11月8、15、22日(火)

【講師】教頭、進路指導課長、第3学年主任

【テキスト】「プロをめざす新製造社員のためのものづくり百科」（日本HR協会）

【内容】

①ものづくりの今

・ものづくりの役目・組織の仕組み

②職場生活の心得

・社会人と学生の違い ・職場で求められるもの
・やる気のパロメーター ・チームワーク

③仕事の基本

・真心をこめて ・話の聞き方 ・ほうれんそう
・失敗は隠さずに ・仕事の手順 ・見て学ぶ
・目標を持とう ・時間管理の重要性

④生産職場の基礎知識

⑤職場の安全対策

⑥地球にやさしいものづくり

成果と課題

○「キャリア・アップ・セミナー」は、企業がどんな人材を求めているのか、そうした人材になるためにはどんな学習をすればよいのかを考えさせる良い機会となった。

3回の「キャリア・アップ・セミナー」を受講して、どうでしたか？

「大変ためになった」33% 「まあまあためになった」52%

「あまりためにならなかった」14% 「全くためにならなかった」1%

○実施時期や実施回数に検討の余地がある。このようなセミナーは、1年次から必要ではないかとの意見が多かった。

○数年後に卒業生の動向調査を実施、本事業における取組みの評価を継続的に行っていきたい。

職業人から直接話を聴く「キャリアセミナー」及び大学での先端技術に触れる「体験学習」により進路意識を高める

[概要]

◆キャリアセミナー（1年生全員対象）

希望講座の調査（6月） → 講師選定・依頼（講座確定） → 2つの講座を聴講（10月）

◆大学における体験学習（理数科1・2年生対象）

1年生	山口東京理科大学（11月）
2年生	①山口大学医学部（8月） ②九州工業大学工学部（11月）

キャリアセミナーでは、興味のある2つの分科会で職業についての話を聴くことができる

キャリアセミナーの目的は、生徒が早期に職業への意識を強くもち、主体的に進路を決定していく過程を援助することにあるため、1年次に実施している。6月に話を聴きたい講座についての希望調査を行い、その結果をもとに講師を選定して依頼する。生徒は確定した講座から2つの講座を選択して聴講する。本セミナーは、単に職業の紹介にとどまらず、社会における自己の生き方を考える機会にもなっており、その意義は大きい。

以下に、実施要領の概略と分科会の一覧を示す。

[実施要領]

- (1) 対象 1年生 240名
- (2) 日程 2学期中間考査直後の金曜日
2限～4限の時間帯を利用する
第1部（60分） 第2部（60分）
アンケート（10分）
- (3) 運営 全体の計画・運営については進路指導部が行うが、当日の進行は学年が担当する。
- (4) 事後指導 アンケートの他に感想文を提出する。さらに、参加した分科会に即したテーマで小論文を書く

表Ⅵ-4-① 分科会・講師一覧(平成16年度)

分科会	講師所属等
① 法曹	法律事務所（弁護士）
② 税務	税理士事務所（税理士）
③ 国際	代表取締役社長
④ 公務員	市役所
⑤ マスコミ	新聞社（記者）
⑥ 工学	大学助教授
⑦ コンピュータ	銀行システム部
⑧ 農学	農学部獣医学科助教授
⑨ 医師	脳外科医師
⑩ 薬剤師	病院薬剤師
⑪ 教育	県立学校教諭
⑫ 教育	小学校教諭
⑬ 芸術	画家



キャリアセミナー

大学での体験学習は、先端研究の一端に触れることができ、学習への興味付けの機会になる

年度当初に、①実施の可能性を大学に打診し
②大学側の会議を経た上で内諾を得てから ③正式な依頼文書を送っている。(②と③が逆になる場合もある。) 詳細な実施要領は、電子メールに添付して送っていただく。メールと電話を併用し、連絡漏れなどがないように注意する。これまで実施した体験学習の概略は以下のとおりである。

1年 理数科

[山口東京理科大学]

- ①講義「熱を電気に変える仕組み」
- ②キャンパス見学
- ③実験実習「太陽電池パネルを使ったデモンストラーション実験」
- ④事後指導 レポート作成

2年 理数科

[山口大学医学部]

- ①講義「大学で学ぶこととは」
- ②体験学習「人体組織の実習」
- ③事後指導 レポート作成

[九州工業大学工学部]

- ①学内施設見学
- ②実験実習(10名×4班)
- ③事後指導 感想文、実験実習のまとめ



理数科体験学習 (1)



理数科体験学習 (2)

成果と課題

【キャリアセミナー】

- 事後アンケートの結果、「大変よかった」または「よかった」と答えた生徒は、ほとんどの分科会で90%を超えており、生徒の評価は高い。
- 感想文においても、「その職業の深いところを知ることができて参考になった」など、意義を認める内容のものが大多数であった。
- 講師の依頼は、PTA・同窓会の全面的な支援により行っている。

【大学における体験学習】

- 生徒は熱心に、かつ楽しく取り組んでいた。感想文においても、学習への積極性を記したものが多かった。
- 学習をさらに有意義なものとするため、事後指導とともに、事前学習の充実を図る。
- 学校行事として実施するため、継続的に取り組みの評価を行いながら、一層の工夫改善を図る。

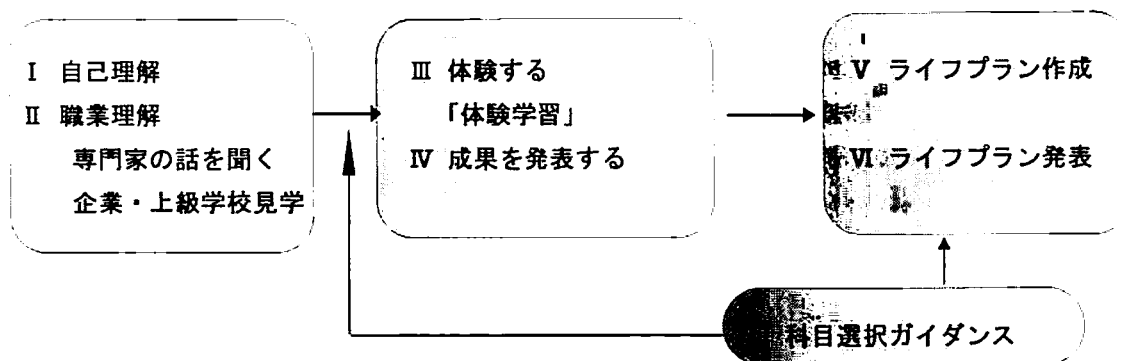
科目「産業社会と人間」により進路意識の向上を図る

〔概 要〕

◆科目「産業社会と人間」の目標

自己の在り方生き方の探究という観点から、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、職業選択に必要な能力・態度、将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養うとともに、自己の充実や生きがいを目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養う。また、現実の産業社会やその中での自己の在り方生き方について認識し、豊かな社会を築くための積極的な意欲や態度を養う。

◆指導内容及びプロセス



「産業社会と人間」とは？

自己の生き方を考える総合学科の基本科目！

科目「産業社会と人間」は、1年次に全員が履修する進路学習科目であるとともに、自分の生き方について考えを深める総合学科の基本科目である。本校では1学年240人を対象に週2時間（2単位）、正副担任が科目担当として実施している。

自分で興味・関心・適性を考える…ホップ

I 自己理解

現在までの「自分史」の作成を中心に、様々な演習（「自己理解アンケート」やゲーム等）を行うことにより、「自分自身」及び「自分の興味・関心・適性」を認識できるような指導を展開した。

II 職業理解

演習や講演、職場・上級学校見学などを通して、職業に対する理解が深まるような指導を行った。

◆演習

1学年240名が一斉に実施するため、コンピュータ教室のキャパシティ（40名）では、インターネットに接続しての調べ学習が困難であることから、LAN環境にないノートパソコンを使って職業を検索できるようなホームページを作成し、実施した。

◆講演会

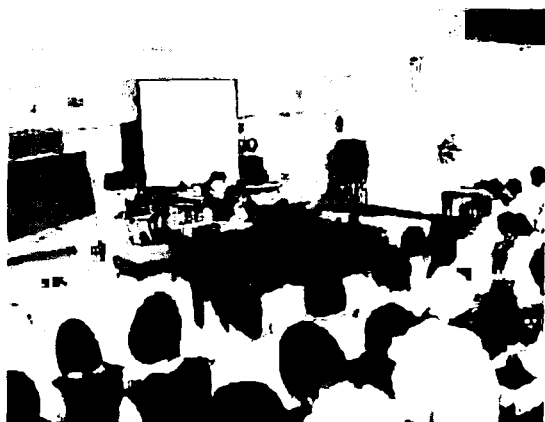
職業人講演会＝本校卒業生5名を招き、パネルディスカッション形式で講演会を実施。
系列別講演会＝5つの系列がめざす職種に関する専門家を招き、生徒の希望に即して実施。

進路別講演会＝大学・短大・専門学校・就職の4分野に分けて講師を招き、生徒の希望に即して実施。

◆見学

職場・上級学校見学＝職場と大学をセットで6コース設定し、生徒の希望に即して見学会を実施。

※現在は、職場見学と上級学校見学については、日程的な余裕及び生徒のニーズを考慮し、日時を変えて実施している。



生徒のニーズに即した「体験学習」…ステップ

Ⅲ 体験する

◆「体験学習」のねらい

- ①産業界や上級学校などの知識や技術に触れ、学習意欲の向上を図る。
- ②職業選択能力や働くことに対する望ましい見方・考え方を育成する。
- ③地域の人々とのコミュニケーション能力の向上を図る。

◆受入先事業所決定までのプロセス

- ①入学当初の「産業社会と人間」授業時に、体験学習希望職種（その他という項目も含め26種類の項目を設定）の予備調査を実施。この段階では、生徒の状況把握として利用。
- ②「自己理解」「職業理解」の理解度が深まった段階（5月末）で、本格的な希望職種調査（第2希望までを記入）を実施。
- ③並行して、各部活動顧問に夏季休業中の部活動日程表の提出を依頼する。
- ④夏季休業中の行事（課外・登校日・部活動等）と希望職種（原則として、第1希望を優先させる）を網羅したデータ表を作成。
- ⑤データが出そろった段階で、受け入れ先の開拓を開始。電話での依頼交渉成立後、事業所を訪問して詳細な打合せを行う
- ⑥6月中に受け入れ先との打合せをほぼ終えて、個々の生徒に事業所及び日程の了承をとり、

各生徒の事業所別実施要項を作成。受け入れ先への依頼状（実施要項・生徒評価票・体験学習についてのアンケートを同封）を送付。

本校では、生徒の第1希望を尊重した事業所開拓を行っている。そのため、声優希望、イラストレーター希望、システムエンジニア希望等、現実的には受け入れ先の選定が難しい職種については、専門学校等と連携し、その生徒のためだけの模擬授業を含む体験的な学習を依頼し、実施している。また、山口芸術短期大学と連携を図り、保育・芸術（音楽・美術）に関しては、本校1年生（希望者）だけのためのオープンキャンパスを2日間実施している。特に保育に関しては、受講後に、実際の保育園・幼稚園で職場体験を行うといったコラボレーション体験学習も実施している。

平成15年度の受け入れ事業所は70か所に及んだ。

【受入先の評価】（事業所アンケートより抜粋）

大変礼儀正しく、しっかりしています。最近返答に「ウン」と答える人も多いのですが、ちゃんと「ハイ」と答え、職場の人間に気を遣っていました。／しっかり職場の皆に挨拶され、こちらの説明にも熱心に耳を傾け、また、積極的に質問されるなど、意欲的に学習に取り組まれておられました。／他校の短大生と比べても、明るい態度で好感がもてました。／来られた生徒さんに清潔感を覚えました。／ハキハキとした返事で、態度も真面目でした。／積極的に質問したり、係員の指示に素直に従うなど、良かったと思います。／第一印象が非常に良好であり、この業種に対する興味が大きかった。／挨拶もきちんとでき、社員とすれ違う際にも積極的に声かけを行っていた。



Ⅳ 成果を発表する ー体験学習発表会ー

生徒個々が事後に提出した「体験学習報告書」に基づいた原稿を作成し、発表会を行った。発表会はクラス単位で行った後、代表者による全体発表会というプロセスで実施した。

クラス発表の際は1人当たり4分程度で行い、一人ひとりの発表後に、他の生徒による評価(30秒程度、発表内容・発表態度等を総合的に判断)を行う。生徒の自己評価及び相互評価に基づいて、学年会で代表者を決定し、全体発表会を実施した。

【発表会後の生徒の感想】

○各自が自分の将来に近い職場に行き、一人ひとりが感じたことを聞くのは良いことだと思った。自分が行けなかった仕事場のことを詳しく聞けるので、自分の将来への視野が広がって、いろんな道を開くことができると思う。わたしたち、総合学科の一年生は、他の学科、他の学校よりもとても貴重な体験をしていると思う。だからこの貴重な体験を無駄にするわけにはいかないと思う。

○今日の体験学習の発表を聞いて、みんなちゃんと将来のことを考えていて、しっかり夢を持っているんだなあと考えた。その将来の夢にちゃんとした意志をもっていてすごいなあと考えた。自分にもちゃんとした夢はあるけど、今日発表していた人達は何か違った。今は美容師になりたいと思っているけど、どこかに迷いがあって、「絶対美容師になりたい!!」とは言いきることができない。これから先、本当に美容師を目指すか、それとも違う夢を目指すかはわからない。けど本気でやりたい職業を見つけて一生懸命頑張りたいと改めて思いました。

○みんなそれぞれ興味のある職場で多くのことを学んできたのだと思いました。今回の体験は学校では学ぶことのできない、働くということの大変さ、逆に楽しさを学ぶきっかけになったと思いました。将来、自分が就きたいと思っている職業に就くためにも頑張ろうと思いました。私になりたい保育士は、子どもと遊ぶだけが仕事ではないので、人間として立派になり、子どもを教育する立場として見本になれるようになりたいと思いました。どの職業も簡単ではない、

そして努力しなければ夢は実現しないと今回の体験から学びました。

○どここの職場、何の仕事でもあいさつ and 笑顔は大切なことがわかった。Sさんの発表を聞いていたら、保育士と看護師という全然違う職業だけど、子どもに対する接し方、患者さんに対する接し方という面で、どちらもあいさつと笑顔が大切だ。Sさんは、はきはきしていたし、ゆっくりと発表していたし、前を向いていたし、共感できたし、すごくよかった。Y君の発表には夢中という言葉が出てきた。すごく印象強かった。私も夢中になれることを将来したいと思う。将来、看護師になるかどうか、一瞬迷ったけど、体験学習をふり返るとやっぱりなりたいたいと思う。

○それぞれの人の発表を聞いて、それぞれの職場でいろんな事を感じてきていたと思った。たった1日でも、学ぶことは多くて、物事を深く考え、将来について考え直す…そんな真剣に将来のことを考えている人たちばかりだった。仕事の内容より、礼儀とか社会に入ってから必要なことを学んできていた。それぞれ好きな職場に行っただけなのに、みんな学んでくることが同じで、社会に入ってから、大変で厳しいんだと思った。みんなの夢に対する気持ちが、すごく良かったと思う。

○夢を持つということがどれだけ大切かがわかった。やっぱり、夢がないと、上を目指すこともできないし、マラソンに例えると、どこまで行ってもゴールがなく、永遠に走り続けなければいけないと思う。それに夢があると、やる気が出るし、精神的にも身体的にもプラスになると思った。そして、人と関わったり、社会のルールを守ることも重要な要素の一つだと思う。人とかかわりの中で社会について学べることもあるし、あいさつをすることも大切だと思った。

(「発表会」ワークシートの感想より抜粋)

将来を見据えた「科目選択ガイダンス」

本校総合学科では、生徒の進路目標にとって有意義な科目選択が行えるようにガイダンス・カウ

ンセリング担当教員を配置し、担任と連携をとって指導にあたっている。「科目選択ガイドブック」に基づく系列主任及び教科主任による科目説明をはじめとして、各種ワークシート（選択シミュレーション等）を使用して、きめの細かい指導を行っている。現在では、1年生が2・3年の授業を参観できるシステムも導入し、生徒の科目選択に対する理解度を深めようと努力している。

ライフプランを作成しよう・・・ジャンプ

V・VI ライフプランの作成・発表

この1年間の学習に基づいて、各自のライフプランを作成させた。「ライフプラン発表会」を視野に入れて、発表内容に即したプレゼンテーションを作成し、より効果的な発表ができるように、事前にプレゼンテーション指導も実施した。



〔発表会に招いた来賓の感想〕

○なかなか夢がもてない世の中で、生徒が前向きに自分の目標、自分の夢に向けて努力しようとしている姿勢をかいまみえることができたこと

は、たいへんうれしく思いました。

○どの生徒も、自分の進路を真剣にみつめ、熱く語っていたことが印象的でした。1年間掛けて、積み上げてきた自分自身のライフプランなのだということが、よくわかりました。もう2年後に、再び大きな岐路に立つ生徒たちが、この1年間をその時にどう生かしてくれるか、大変楽しみですですね。

○大変充実した内容でよかったと思います。様々な観点から自分の将来の夢を見つめているので、きっとしっかりした道を築いていけることとします。また、現在の自分と結びついているので、充実した学校生活を送ることができるだろうと思いました。

○発表者全員、堂々とした態度で自信に満ちた内容で大変すばらしいと思いました。4月から計画を立て、夏休みには職場体験、2学期にはレポート、クラス発表等、段階を踏んでの今日の発表であった。発表者の努力・苦勞の積み重ねを感じました。

○昨年は受験生だった生徒さんたちが、一年間でここまでしっかり心身ともに成長している姿をうれしく思いました。

○どの生徒さんもすばらしい発表でした。可能性を秘めたこの時期に、将来をじっくり考える時間を学校で学べるという事は、いいなと感じました。2年先に子どもたちが夢により近い位置にいる事ができるように、自分が求める自分を、探し求める努力を続けてほしいと思います。

成果と課題

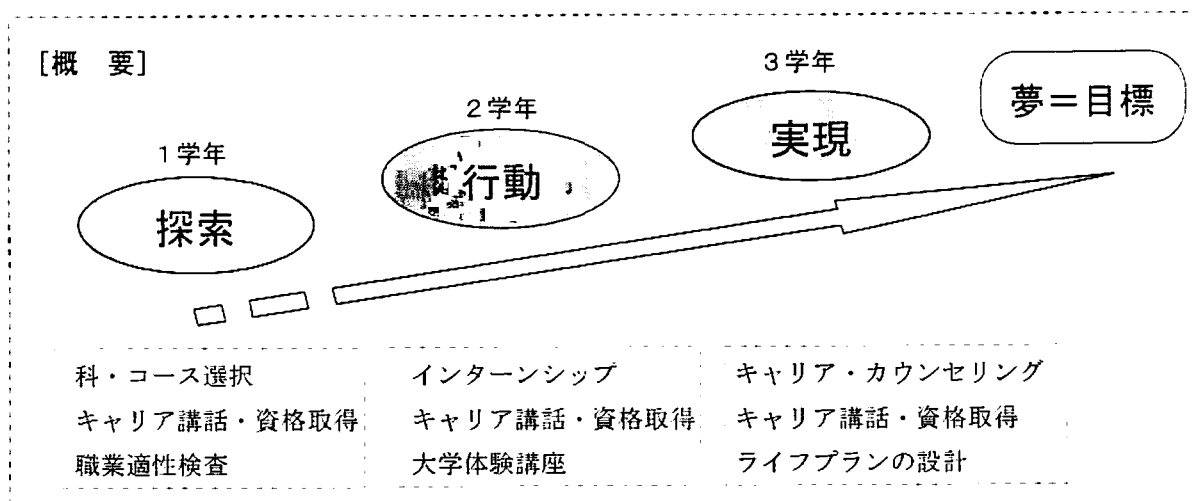
○ 生徒を対象に実施したアンケート（平成15年度末）によると、「職場体験（インターンシップ）は進路を考える上で役立ちましたか？」という質問については85%、「産業社会と人間の学習を通して、将来の職業について具体的なイメージがもてましたか？」という質問については82%の生徒が、それぞれ肯定的な回答をしている。

○ ワークシートの感想及び生徒の変容の様子等から、段階的に進めてきた指導の成果があらわれ、「産業社会と人間」の当初の目標はほぼ達成できたものと評価している。

○ 「満足度が60%」という結果も出ていることから、より効果的な指導法の工夫改善を重ねる必要がある。



3年間の体系的な「キャリア学習プログラム」を開発する



本校は積極的にキャリア教育に取り組んできた

- 平成9・10年度文部省教育課程研究指定を受け、「教育改革実行委員会」を組織し、学校改革を実施した。平成10年度入学生から「一括くり入学の導入」「進学コースの設置」を行った。
- 平成13・14年度キャリア教育実践モデル地域指定事業（文部科学省）を受け、種々のキャリア講話（企業経営者、労働行政、年の近い卒業生等）を開催した。特に平成14年度からは本校独自で2年生全員によるインターンシップ（2日間）を実施した。
- 平成14・15年度高大連携教育下関地域実践研究校（山口県教育委員会）の指定を受け、進学コースの生徒を中心に大学訪問・出前授業等を多く行った。

キャリア教育を通して「将来どう生きたいのかどうなりたいのか」という生きる力を育てる

キャリア教育は、文部科学省の定義によると、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」とある。端的には「児童生徒の一人ひとりの勤労観・職業観

を育てる教育」である。また、キャリアという言葉業を「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と定義している。

これを受けて、インターンシップやキャリア講話等の一過性のイベントだけでなく、教育活動全体をキャリア教育の視点から見直し、発達段階に応じた、組織的・系統的なキャリア教育推進のための学習プログラムを開発することにした。

3年間のテーマ及び達成目標を明確にする

それぞれの学年に対して、発達段階を考慮した次のテーマと達成目標を設定した。

表Ⅵ-6-① 3年間のテーマ及び達成目標

学年	テーマ	達成目標
1 学年	探 索	自己の個性を理解するとともに、職業全般に関する知識を増やし、進路の方向性を選択する。
2 学年	行 動	目標とする職業に関する体験的理解を深めるとともに、勤労観・職業観を確立していく。
3 学年	実 現	進路を決定し、その実現に向けて取り組む。また、決定後、将来のライフプランを具体的に設計する。

キャリア教育推進のための学習プログラムの
枠組みを4つの能力領域に分けて考える

それぞれの学年の目標を達成するための学習プログラムを考えるとき、表VI-6-②に示した「進路発達にかかわる4つの領域・能力」について見直すことが重要である。

この領域を考慮しながら本校のキャリア教育学習プログラムの系統図を、図VI-6-①のように作成した。さらに、この系統図を具体化して、表VI-6-③のような学習プログラムを作成した。

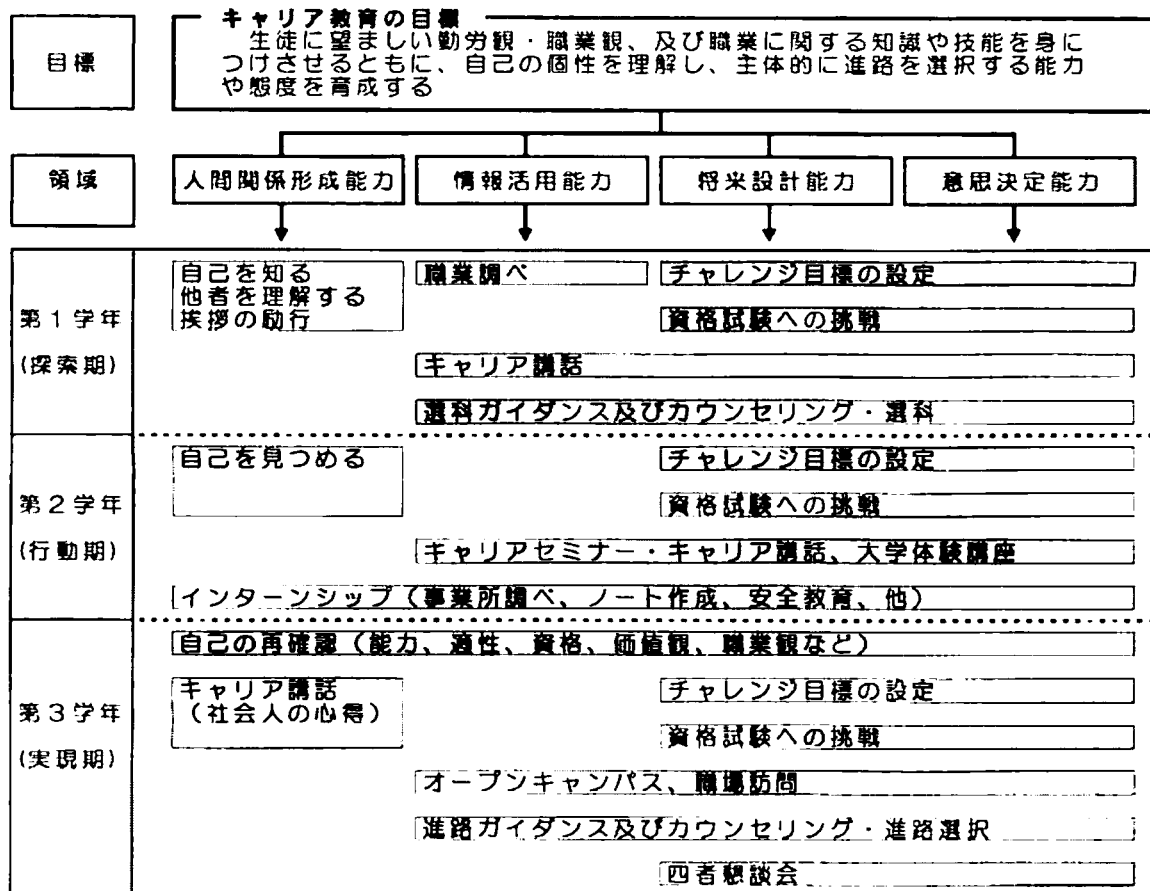
これをもとに学習プログラムの修正や追加を行い、毎年改善を図っている。

なお、参考までに、本校の学科・コース（4学科・6コース）と教育システム図を図VI-6-②に示す。

表VI-6-② 進路発達にかかわる諸能力

領 域	領 域 説 明
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。 ・自他の理解能力 ・コミュニケーション能力
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。 ・情報収集・探索能力 ・職業理解能力
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。 ・役割把握・認識能力 ・計画実行能力
意志決定能力	自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。 ・選択能力 ・課題解決能力

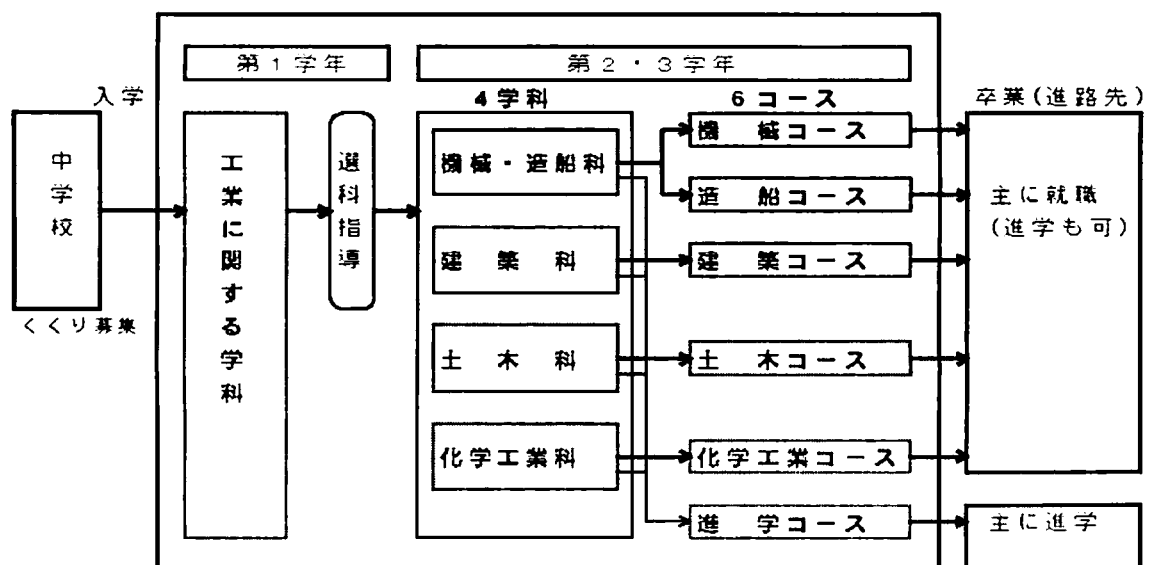
図VI-6-① キャリア教育学習プログラムの系統図



表VI-6-③ キャリア教育学習プログラム

学 年	1 学年	2 学年	3 学年
テーマ	探 索	行 動	実 現
領 域	実際の学習活動と発達が期待される具体的能力		
人間関係形成能力	◎新入生オリエンテーション ◎職業適性検査 ◎挨拶の励行 ◎体育大会 ◎中央工祭（文化祭）	◎インターンシップ（異年齢とのコミュニケーション） ◎インターンシップ発表会 ◎挨拶の励行 ◎体育大会 ◎中央工祭（文化祭）	◎キャリア講話（社会人としての礼儀やマナー） ◎課題研究及び発表会 ◎挨拶の励行 ◎体育大会 ◎中央工祭（文化祭）
情報活用能力	◎選科ガイダンス（学科・コースの説明・見学） ◎工業技術基礎（ローテーションで体験） ◎キャリア講話（ハローワーク） ◎職業調べ	◎インターンシップ（事業所調べ・理解、ノートの整理） ◎キャリア講話（年の近い卒業生） ◎工場見学 ◎大学体験講座	◎進路ガイダンス（就職・進学の方法や手続き） ◎進路情報（求人会社、受験学校） ◎オープンキャンパス
将来設計能力	◎学科・コースの選択（自分の適性・進路を考えながら） ◎資格試験への挑戦	◎インターンシップ（社会での果たすべき役割を自覚、目標に向けてやるべき課題） ◎資格試験への挑戦	◎ライフプランの設計（進路決定から次のステップへの準備…キャリア・アップ・セミナー） ◎資格試験への挑戦
意志決定能力	◎学科・コースの決定 ◎チャレンジ目標の設定（自ら目標を設定し、実現に向けて努力する）	◎チャレンジ目標の設定（将来設計や進路希望の実現を目指して、課題を設定し、その解決に取り組む）	◎キャリア・カウンセリング ◎進路の決定（選択した結果に責任をもつ） ◎チャレンジ目標の設定

図VI-6-② 本校の学科・コース(4学科、6コース)と教育システム図



**1年次では、学科・コースの選択指導を中心に
キャリア教育を展開する**

本校では、平成10年度入学生から「くくり入学」「進学コース」を導入している。選科ガイダンスにより、生徒は自己の適性を認識しながら、多くの情報を得て、自らの責任の下に将来の進路を考え、学科・コースを選択していく。また、決定に向けては、個々にカウンセリングを十分に行っている。

また、総合的な学習の時間について、本校では、「進路学習」をテーマとして、1年次に実施している。その中に、選科の研究やキャリア講話等を組み込みながら、更に自らの在り方生き方について考える機会を増やしている。

**2年次では、インターンシップの事前・事後
指導を充実させ、将来につなげる**

本校では、平成14年度から2年生全員によるインターンシップ^{*1}を実施している。平成17年度で4年目を迎えているが、一過性のイベント的なものに終わらせないよう、年々、事前・事後指導の充実を図っている。

事前指導では、キャリアコーディネーターによる講演や企業の安全担当者による講演を実施し、よりよい体験になるよう留意している。

また、事後指導では、感想文やアンケートを書くことにより、将来を考える材料としている。

さらに、本年度から、3学期に、1・2年生の全員参加によるインターンシップ発表会を計画している。この企画により、生徒のプレゼンテーション能力の向上を図りたいと考えている。

さらに、学科・コースごとの工場見学（大学体験講座）や、年齢の近い卒業生を招いての講演会を実施するなど、体験的な活動を多く取り入れている。また、PTAの企業見学会を実施し、保護者への啓発も行っている。

**3年次では、進路決定が最重要課題だが、
内定後の期間も大切にし、実社会につなげる**

3年次には、まず、具体的な進路を決定するための指導を行い、就職先または進学先をそれぞれ決めていく。こうした進路指導については、従来どおり最重要視して取り組んでいる。

しかし、平成15年度に、本校生徒が過去5年間に就職した事業所に対してアンケート調査を行ったところ、既に33.4%の者が離職しており、そのうち、50.3%の者が1年目に離職していることが明らかになった^{*2}。

そこで、入社1年目を乗り越えられれば、早期離職者はかなり減少するものと考え、その予防の手だてとして、「キャリア・アップ・セミナー」と称する講話を行うこととした。具体的には生徒の就職がほぼ内定した後の、11月頃のLHR等を利用して、「職場生活の心得」「仕事の基本」「安全対策」等の内容についての講話を行い、次の社会人のステップへつながるよう配慮している。

成果と課題

- 従来の進路指導にかかわる学習活動を、キャリア教育の観点（理念、各学年のテーマ、4つの領域等）から見直しながら、整理し関連付けていくと、不足していた部分や改善点が見えてくる。
- キャリア教育における「体験的な学習」や「キャリア講話」を実施するためには、地域の協力が必要であるため、それを得るための体制を整えながら、推進していく必要がある。
- キャリア教育に必要な機能は、「キャリア・ガイダンス」と「キャリア・カウンセリング」に大別されるが、本校では「キャリア・カウンセリング機能」がまだ不足している。

*1 V章5（P92～）参照

*2 VI章3（P104～）参照

事業の総括

1 研究のねらいの実現状況

◆ 研究のねらい

本県では、学力向上フロンティアハイスクール事業の指定にあたり、「山口県教育ビジョン」の中期目標を踏まえ、県全体の研究主題を「学ぶ意欲を高め、生徒一人ひとりの夢や目標の実現を図る指導と評価の工夫」としました。

「一人ひとりの夢の実現」を支援するには、まず、生徒自身が自己のよさや可能性に気づき、「なりたい自己」を拡大できるような様々な手だてを工夫する必要があります。具体的には、総合的な学習の時間や特別活動の時間等を効果的に活用しながら、職業観や勤労観の確立を図るための体験や学習、適切な進路選択に向けたガイダンス等の充実を図り、自己の在り方生き方について真剣に考えさせることが大切です。

また一方で、それぞれの夢や目標の実現のために必要となる能力や適性等について、十分に理解を深めるとともに、それらの能力等を確実に身に付け、「なれる自己」を拡大できるよう、基礎・基本の習得に加えて、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力、問題解決能力などを含めた「確かな学力」の育成に努める必要があります。

そこで、各フロンティアハイスクールでは、県の共通テーマをブレイクダウンした3つのサブテーマ(下図の①～③)を踏まえ、それぞれの学校の実態に応じて、学習意欲の向上、一人ひとりに応じた指導と評価の改善・充実等に関する実践研究を推進してきました。

◆ 研究成果の概要

多くのフロンティアハイスクールでは、学ぶ意欲を向上させるため、生徒の興味・関心を喚起する授業の工夫・改善に取り組むとともに、大学等と連携した体験的な学習や企業におけるインターンシップなど、生徒の進路意識の高揚を学習意欲に結び付けるための実践研究に取り組んできました。

また、一人ひとりへのきめ細かな指導を行うため、習熟度別授業やチーム・ティーチング等の指導形態の工夫を図るとともに、始業前や放課後、長期休業期間中など、授業以外の時間に補充的な学習や発展的な学習に取り組む時間を新たに設け、個々の適性や能力等に応じた個別指導、グループ指導等を展開してきました。

さらに、生徒の学習への準備状況を把握する診断的評価、学習途中における学力の伸長状況を評価する形成的評価、さらには、個人内評価や「生徒による授業評価」の充実を図るなど、評価結果をその後の指導に役立てる「指導と評価の一体化」についての研究も重ねてきました。

こうした取組みの成果と課題については、PDCAサイクルに基づいて検証を行うこととしており、各フロンティアハイスクールでは、アンケート等を通じて研究仮説の検証と取組みの改善に努めた結果、ほとんどの取組みに対して、生徒や保護者から肯定的な評価を得るという結果となっています。

「学力向上フロンティアハイスクール事業」と「山口県教育ビジョン」との関連



学力向上フロンティアハイスクール事業

【本県の研究主題】

「学ぶ意欲を高め、生徒一人ひとりの夢や目標の実現を図る指導と評価の工夫」

① 学ぶ意欲の醸成
 学習意欲を高めるための
 指導や評価の工夫

② きめ細かな指導
 一人ひとりに応じた
 指導方法等の工夫

③ 指導と評価の一体化
 生徒の学習改善、教師の授業改善
 等に生かすための評価の工夫

2 研究成果の活用

本事業では、他校への研究成果の普及・還元が求められています。

各フロンティアハイスクールでは、学力向上のための諸課題に対し、様々な方法でその解決に取り組んできました。

以下の表は、その取り組みを、本県の研究主題を構成する3つのサブテーマに沿ってまとめたものです。各学校における教育活動の改善・充実を図るための参考としてください。

1 学ぶ意欲を高めるための工夫

課題と研究内容	実践のポイント（取り組みの成果）
◆ 生徒の興味・関心を喚起する授業改善をどのように進めるか ◇「生徒による授業評価」を実施する	□授業評価→授業改善→再評価のサイクルを確立する。 ⇒授業アンケートは、1学期、2学期に行い、それぞれの分析結果を次学期の授業に反映させる。 □授業アンケートの質問項目は、常に見直す。 ⇒各教科の指導目標の実現状況を把握するための質問を設け、不十分な点の改善策を教科会議で検討する。 □授業アンケートには、前回のアンケート以降の授業改善の状況を把握するための質問を設ける。 □評価結果を分析し、具体的な授業改善の方法や内容等を生徒に明示する（生徒への要望事項も併せて示す）。 □生徒による授業評価は、研究授業時に実施し、参観した教員の評価と合わせて多角的に分析する。
◇授業研究・授業公開を推進する	□授業公開は、保護者だけでなく、他校種の教員や生徒等も参加しやすい日程とする。 □授業公開時には、保護者や他校の教員等にもアンケートを依頼し、授業改善に生かす。 □全教科で研究授業を実施する。 ⇒他教科の授業も参観できる日程とする。 □研究授業の学習指導案には、具体的な評価規準や評価方法等を必ず記入する。
◇ICT教材を開発する	□教師が撮影した動画をDVD教材に編集する。 □動画とスライドを同時に提示できるソフトを活用する。 ⇒前年度の課題研究の発表会について、その様子は動画で、プレゼンテーションの内容はスライドでそれぞれ示し、生徒に発表の仕方を視覚的に理解させる。 □自学自習教材をネット上にアップロードする。 ⇒生徒は自宅で問題演習に取り組み、教員も自宅で生徒の学習状況を把握できる。
◇地域の教育資源を活用する	□県のサポートバンクを活用し、地元講師とのチーム・ティーチングによる授業を企画する。 □大学や自治体との連携を図り、地域のフィールドワークやワークショップに参加する。

(続) 学ぶ意欲を高めるための工夫

課題と研究内容	実践のポイント (取組みの成果)
◆ 自己の在り方生き方や学びの意義を考える学習・体験をどのように充実させるか ◇課題研究や就業体験を取り入れる ◇キャリア・セミナーを開催する ◇科目・系列等の選択指導や進路相談の環境を整備する ◇多様な資格の取得を支援する	□進路研究を軸にした3年間の「総合的な学習の時間」の学習プログラムを作る。 □ライフプラン（人生設計）と関連付けた課題研究を中心に「総合的な学習の時間」を展開する。 □大学や専門学校における体験学習の充実を図る。 □就業体験先を生徒自身に決定させるセルフプロデュース方式のインターンシップを導入する。 ⇒企画力、コミュニケーション能力の向上を図る。 ⇒アプローチシートを準備し、受入先の決定を支援する。 □課題研究やインターンシップの事後指導を充実させる。 ⇒発表会を行い、報告や発表等をさせて表現力の向上を図るとともに、下級生への動機付けを図る。 ⇒発表会を生徒に運営させることにより、企画力、課題解決能力等の向上を図る。 □発表会は校外の施設で開催する。 ⇒学習に対する成就感、達成感をもたせる。 □生徒の進路希望、受講に対するニーズを十分に踏まえ、できるだけ多様な講座を開設する。 □講師依頼には、サポートバンクやキャリアインストラクター派遣事業の活用、PTAや同窓会との連携を考える。 □講話を聞いて終わりではなく、講師との交流会やレポート作成などの活動を組み込む。 ⇒コミュニケーション能力や表現力の向上を図る。 □生徒にとって身近な卒業生の講話を取り入れる。 □生徒の発達段階を踏まえた、系統的な3年間の進路ガイダンスの計画を立てる。 □科目選択等のためのガイドブックやワークシートを作成する。 □科目選択等の参考とするため、2・3年生の授業を1年生が参観できるシステムを構築する。 □学年ごとに、ガイダンス・カウンセラー、ガイダンス・アドバイザー等の教員を配置する。 □キャリア・カウンセリングに関する校内研修の充実を図る。 □卒業生の離職（離職理由も含む）に関する追跡調査を行い、早期離職の対応策を検討する。 ⇒就職内定後のLHRにおける指導の充実を図る。 □生徒の資格取得を支援する課外授業の充実を図る。 □卒業まで修得させる単位として「技能審査による単位認定」を導入する。

課題と研究内容	実践のポイント（取組みの成果）
◆ 生徒一人ひとりの理解や習熟の程度に応じた指導をどのように行うか ◇学力確認テストを作成し、活用する ◇習熟度別指導やＴＴを導入する ◇中学校の学習との円滑な接続を図る	□生徒の実態に即した学校独自の「学力診断テスト」（レディネステスト）を作成する。 □「学力診断テスト」では、解答だけでなく、各設問に対する理解度を４段階で回答させて分析する。 □「学力診断テスト」の結果を個人カードにまとめ、個人面談の資料とする。 □学習に関する個人面談やカウンセリングは、担任教員だけでなく、教科担当教員も行う。 □習熟度に応じた、１・２年連続の教育課程を編成する。 □習熟度別クラス編成を行う際も、１年の最初はクラスを分離せず、ＴＴによって基礎学習を重点的に行う。 □習熟度に応じたオリジナル教材を作成する。 □放課後に、全校生徒による習熟度別学習の時間を設ける。 ⇒学力診断テストの結果等を参考に学習集団を編成し、それぞれの指導内容及び到達目標を設定する。 ⇒全校体制で指導にあたり、担当教科以外の教科についても指導を行う。 □中高連絡協議会を活用する ⇒教科指導に係る分科会（教科別分科会）を設置する。 ⇒中高連絡協議会の際に双方の研究授業を実施する。 ⇒中・高の教員によるＴＴを双方の校種で実施する。 □中学校の学習指導要領、観点別学習状況の評価規準、使用教科書等に関する研修の充実を図る。 □中学校の学習内容に関する復習教材を作成し、１年次の最初に「基礎学力回復講座」を展開する。 □中学校の教員に高校の授業を公開し、研究協議を行う。
◆ 補充的な学習・発展的な学習をどのように進めるか ◇始業前や放課後、長期休業期間中の学習を工夫する ◇学び方を指導し、学習力を高める	□朝の学習や読書の充実を図るため、始業を５分間早める。 □始業前は朝の読書、放課後は教科の基礎学習という、毎日の学習リズムを身に付けさせる。 □読書と英単語学習を組み合わせた「朝学」を行う。 □教育学部の現役大学生を講師として、大学生活に関する情報提供等も得られる学習合宿を企画する。 □学習合宿には、進路ガイダンスの時間を組み込む。 □入学直後に、高校における学び方の指導時間を設ける。 ⇒２時間連続の特別時間割を組み、予習－授業－復習の学習サイクルを体験させる（教科によっては、ある程度、高校の授業を経験した後に実施する方が有効）。 ⇒全員参加のフレッシュマンキャンプを行い、高校における学習方法の理解を深める。 ⇒オリエンテーションで、家庭学習の方法を指導する。 □学校図書館オリエンテーションを行い、調べ学習に必要な参考資料の収集方法を学ばせる。 □クラス対抗ディベート、学年対抗ディベート等を実施し、実践的な表現力の向上を図る。 □国語科と地歴科が連携して、新聞記事の要約を定期的な課題とし、読解力と表現力の向上を図る。

課題と研究内容	実践のポイント（取組みの成果）
◆ 学習の基盤となる習慣・規律をどのように形成するか ◇基本的な生活習慣や家庭学習の習慣を身に付けさせる	□生徒会と連携した“遅刻ゼロ運動”を推進する。 □全教員が全生徒の動静をリアルタイムで把握できる出席状況板を職員室に設置し、活用する。 □「学習と生活の記録」を毎日記入させる。 ⇒家庭での学習状況を本人及び担任が把握できる。 ⇒宿題の適切な量や質を検討する材料となる。 □家庭学習の成果が生かせるような授業展開を工夫する。

3 生徒の学習や授業の改善に生かす評価の工夫

課題と研究内容	実践のポイント（取組みの成果）
◆ 「指導に生かす評価」を学校全体でどのように進めていくか ◇学習意識や学習実態を分析する ◇目標に準拠した評価、観点別評価についての理解を深める ◇多様な評価方法を取り入れる ◇シラバスの改善を図る	□学習に関するアンケートの集計・分析は、学力向上プロジェクトチームで行い、改善策を検討する □アンケートやレディネステストの結果を踏まえた独自の学力向上プロジェクトを立ち上げる。 ⇒数値目標を設定する（平日の家庭学習の時間を1年生60分、2年生90分、3年生180分以上に増やすなど） □大学教授を講師に招くなど、「学習評価」に関する校内研修の充実を図る。 □学習指導案に、観点別学習状況についての評価規準や評価方法等を明示する。 □中学校との「学習指導及び評価等に関する情報交換会」を開催し、観点別の評価方法等を研修する。 □全教科のシラバスに、観点別の評価方法等を示す。 □「指導と評価の一体化」を図る。 ⇒計画(Plan)→実行(Do)→評価(Check)→改善(Action)の見直しのサイクルを確立し、評価をその後の指導の改善につなげる。 □独自のレディネステストを作成するなど、高校の学習への準備状況を把握する＜診断的評価＞の充実を図る。 □学習の途中において、一人ひとりの学力の伸長状況を評価する＜形成的評価＞を重視する。 ⇒学力診断テストの結果について、単元ごとに分析し、指導方法等の改善策を検討する。 □＜個人内評価＞を重視し、一人ひとりの学びの履歴を詳細に記録する。 ⇒個々の学力に関する資料を整理して、カルテのような個人カードを作成し、学習カウンセリングに活用する。 □＜生徒による授業評価＞により、授業改善を図る。 □シラバスの改善に関するアンケートを実施する。 ⇒「現行のシラバスの表現はわかりやすいか」「どのようにすれば活用しやすいか」など、改善に生かせるアンケート項目を設ける。 ⇒生徒の意見により、書き込み式の様式に変更する。 □単位制高校では、多様な選択科目の履修指導に活用できるシラバスの在り方を検討する。